
Trigger Point

群青 坊哉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Trigger Point

【Nコード】

N4818T

【作者名】

群青 坊哉

【あらすじ】

竜伝説が眠る地に住む御子柴惣一は地元高校に通う二年生。彼が竜駒巫覡の少女と出会った時、伝説は再び目覚め、日常は非日常へ遷移する——……………俺。一体これからどうなるんだ？

恐らく何一つ不自由なく生きている人間は、自分の死というものの関心が薄い。

必ず最後には訪れる刻なのに、家族、親戚、近所、テレビ、インターネット……”死”というものがそこかしこに溢れているこの世界で、警戒するどころか恐ろしく無防備に行動する。生と隣り合わせである”死”を、驚く程他人事に捕らえている。

それが、恐怖のあまり無意識に避けているためなのか、与えられた生を謳歌すべく死という概念に囚われないよう行動している結果なのかは判らない。

それでも”死”というものに触れた時、ようやく人はうすらぼんやりと己の死について考えをめぐらせる。自分の死とはこんなものだろうと、希望にも似た想像をする。ぽっくり逝きたい。家族に見守られて老衰。でもあまり長くは生きたくないな。エトセトラ……。しかし、いざその場面に直面してしまった御子柴惣一は、自身を襲うあまりの光景に現実である事を拒否しようとした。

勿論、”死”というものが、予告もなしに訪れる理不尽なものであるという理解はあった。一見頑丈そうに見えるこの肉体も、病気や交通事故、通り魔など、日々テレビが伝えるような不幸に見舞われる事で驚く程あっけなく壊れ、死に至るのだらうという事も想像していた。しかし、今置かれている状況は素直に”死”を受け止めるには、なんというか……あまりにも非現実的だった。

なんかこう……ゲームなんかで見るような大剣が、背中から自分の胸を貫通してたりしているわけだ。

「……………どういうこと？」

間拔けな言葉が思わず漏れた。あ、喋れるんだ。これってやっぱ

夢？ どんどんと心臓は早鐘のように煩く鳴るのに、頭はどこかぼうつとしている。思考が鈍っている。痛みも感じない……って事は、これやばいんじゃない？ 焦りに似た感情が胸の奥で疼いている。

それでも網膜は一寸も余所へ逸らすことなく律儀に、胸から生えた銀に光る剣先を映し続けていた。あたかも、いい加減に現実として受け止める、と言わんばかりに。

じわじわと痛覚が疼き出した。あ、やっぱやばい、やばいつて。

早く、早くなんとかしないと絶対死ぬ。でも、なんとかって……？ 回らない頭で惣一はそれでも状況を把握しようとする。わからないまま死んだらきつと気持ち悪い。つまりはこれ、夢なの？ 現実なの？ 思考が追いつかない。誰でもいい、誰か、俺の質問に答えてくれ――

「どういうことも何も、目にした世界が全てだ」

背後からハキハキとした高い声がかかった。

距離は恐らく一メートルも離れていない。なに、そんなに傍にいるんなら助けてくれよ。惣一は振り返ろうとした。しかし、体は金縛りにあつたように動いてくれない。

「現実を受け止める。おまえはもう、終わる」

声に応じるようにどんと、一際大きく心臓が踊って、直後、全身をバラバラに裂かれるような痛みが惣一を襲った。頭の中でチ力チ力と鳴る警告の赤。同時にすうっと意識が遠のいた。

……んで。結局なんで、こんなことになっちまったんだ？

ぼつんと浮かんだ素朴な疑問に、僅かに踏みとどまった意識は今日一日を大急ぎで記憶から検索する。ああ、これが走馬灯ってやつかな。惣一はぼんやりと思った。

朝。たとえ一秒たりとも無駄に出来ない忙しい時間帯に、しかし御子柴家の両親は、盛大に別れを惜しんでいた。

「だあから離れる！ 遅刻するだろ！」

「だって、だって……、今日でそうちゃんとお別れかと思うと私……私……！」

「そうだぞ惣一！ 惣一は悲しくないのかい？ 泣いてはくれないのかい？ なんて薄情な息子だろう、父さんおまえをそんな子に育てた覚えは無いぞ！」

「たかだか一週間、海外旅行で家離れるだけだろうが！」

「やっぱりそうちゃんも一緒に……！」

「学校なんか休んで……！」

「だあら週末試験があるんだって……何度も言わせるな！」

首周りにぶらさがる両親を引きずって惣一はなんとか玄関に足を運んだ。靴を履くと泣いている両親を順に引っぺがす。

「とにかく！ せっかく福引で当てた一等ペア旅行券だろ？ 俺は大丈夫だから楽しんでこないと。抽選券くれた飯沼にも悪いじゃん」

「だって私、心配なんだもんそうちゃんが……！」

「心配はありがたく受け取っとく。だから行ってこい。つうか、高校生が留守番一つ出来ないでどうするって話。父さん俺をそんなやつな子に育てた覚えは無いだろ？ 遅刻するようならしの無い子供に育てた覚えは無いんだろ？」

「そうだけどさ……でも僕達は……！」

「てな訳で！ 俺学校行ってきます！ 土産期待してるから！」

「そうちゃん！ いかないで！」

「そういち！ そういちいいー！」

両親の絶叫の中扉を開けると、門前に集まっていた近所の住人の目を避けるようにして俯き、惣一は全速力で家から離れる。途中振り返って両親が追いかけていない事を確認すると、盛大な溜息を吐いた。

「……………どこの世界名作劇場だよ……………」

親父達、このこと知ったら…………泣くだろうな。死ぬ程。目に見えて…………ああ、段々頭痛がしてきた…………。

「おはよう。御子柴君」

頭上から降ってきた優しい音。

窓から差し込む柔らかな朝の光に照らされたふわふわの栗色の髪。凜とした細面が、ふわりと微笑む。

「ああ、はよ…………飯沼」

週明け月曜、少し早めのバスに乗ると会える丘上のお嬢学校の女生徒。

他愛の無い会話の合間に覗く横顔は、ようやく見慣れてきた惣一でさえも、はっと息を呑む程整っている。

大きな強い瞳が、視線に気づいて惣一を見た。

「……………私は、以前から御子柴君の事知ってたんだけどな」

飯沼……あの時、前から俺のこと知ってたような事言ってた……
……？　もしかして………いやいや、相手はあの飯沼だぞ？　そ
んなはずないだろ………うん。そうだ、でも………気になるよなあ
……これって、未練てやつ？

「うはよー。月曜恒例、棒立ちミコちゃん」

「また何ぼさつとしてんだよ惣一！」

悪友ども。毎日見る印場高の校門。校舎。級友。帰り道……走馬
灯どころか、今日一日を頭に浮かべた惣一の意識は、消えるどころ
か徐々に覚醒していく。

……そうだ。学校帰り。今々。古いタバコ屋の前の交差点で俺は、
いきなり突っ込んできた車に轢かれたんだった。

「……………い」

そして、背中から大剣で突き刺されて意識が戻った。

「痛いっつってんだよ……………」

前後が通じない。

意識を失っている一瞬で、一体何が起こった……？

「……………馬鹿な」

驚愕の高音が背中から——己を貫いている剣を通して惣一の意識
に直接響く。

「おまえ。中に入ってまだ、意識を保っていられるのか？」

「…………何わけのわからない事を……………」

「状況がわからないのか？」

「状……況？」

言われて惣一は、先ほどまで自身を苦しめていた激痛が収まっている事に気づく。恐る恐る、視点を自身の胸に下ろした。——ない。先ほどまで、確かにこの胸から突き出していた剣先が……なくなっている。慌てて胸を撫で下ろした。傷どころか、出血すらない。うそだろ。両の掌を呆然と見下ろして、数秒。惣一は新たな異変に気づいた。

——正面に、自分を覗き込んでいる、大きな二つの黒目がある。

「……うわ！」

慌てて飛びのいた。尻餅をついて初めて違和感に気づいた。ぺたぺたと、地面、側面、天井を両の手で確かめる。惣一は透明な球状の物体の中に居た。いつの間に。

「な、なんだよこれ……！？」

かすれた情けない声が喉から出た。わけのわからない事ばかりで思考が追いつかない。惣一の頭は視覚、触覚、それから聴覚から与えられた情報を整理する作業でてんやわんやだ。早く現状把握、現状把握……。

「おまえが居るのは、一守の水晶球の中だ」

さっき聞いた音と同じ声が球体の中に響いた。
ひょっとしてこの大きな目の主が話している……？

「いちもり？ すいしきゅう……？」

眩くように声を上げると、大きな目は頷くように瞬きをした。

「水晶球は御霊を一時的に保管する巫覡具だ」

「……よくわからないんだけど。っていうか、あんたがデカインじやなくて、これ……、ひよっとして俺が小さくなってる?」

「まあ、そうだな。おまえは一時的に私の式になっているという事だ」

「シキ?」

「式守という」

「シキガミ……って……」

聞いたことのある単語だ。様々な情報が行き交いパンク寸前の頭を何とか宥めて、惣一は記憶を探る。確かホラー映画とか、そういうので……。

「おまえはどうやら比較的冷静な状態を保っているようだが……突発的な死によって志半ばで命を絶たれた御霊は死の直後、状況が解らずに暴走するものなのだ」

「……死って。……俺、死んだのか?」

「やはり記憶が混乱しているようだな。ほら、そこをしてみる。水晶球に入った今なら冷静に見れるはず」

言って、でかい二つの目はいなくなった。代わりにどこかで見たような風景が飛び込んでくる。

いつも通る交差点の——そこは事故現場だった。一台の乗用車が角のタバコ屋に突っ込んでいる。少し離れた位置に人盛り。時折隙間から見えるのは、大量の血に染まった見覚えのあるブレザーと男子生徒——

「もしかしくなくても、あれは、俺……なんすか？」

引き攣った表情になっているのが自分でもわかる。球体に両手をついて食い入るように見ていた惣一の頭上から、やはり冷静な高音が降ってきた。

「つい数分前の事だ。車が突っ込んできて信号待ちをしていたおまえを轢いた。おまえの体は数メートル離れたあの位置にかつとんで……即死だ」
「……………」

記憶にあるような、ないような……。覚えているのは帰り道までと、それから、身体を襲った強烈な痛みだけだ。そしてあの……大剣。

「……一つわからないんだけど」
「なんだ」

「……俺、交通事故で死んだんだよな？」

「ああ。私の目の前で吹っ飛んでいった」

「なんで剣が貫通してたわけ？　俺今そこら辺りの記憶がないんだけど」

「刺したのは私だ」

「……は……！？」

惣一は声を振り返った。見上げた先には女の子の姿があった。肩までのストレートの黒髪と、大きなつり目が特徴的なまだあどけない少女の顔。……やっぱり異様に巨大だが。

黒い無地の着物に身を包んだ少女の瞳は、惣一の身体を囲んで大騒ぎしている人々を見ていた。

「言ったはずだ。御霊は死の直後、混乱して暴走する。故に私はその場面に遭遇した場合、御霊を先ず水晶球に入れ、状況を説明した後で昇天させるようにしている。おまえが見た剣は『竜角』。自分よりも高い霊力を持つ御霊を水晶球に取り込むために私が用いている竜駒だ」

「……ようするに。俺、この後、成仏させられるわけ？」
「順当に行けばそうなる」

惣一の言葉に視線を戻した少女は、無表情のまま、こくりと首を上下に動かした。

「！？ 馬鹿な、俺、まだ生きてるじゃん、成仏って……俺本当に死んじゃうじゃん！」

「話を聞いていたか？ 既におまえは死んでいて、今のおまえの状態は御霊——ようするに幽霊だ。死の後に昇天だ。一緒にたにするな」

「一緒のことだろ！ 昇天って、昇天したら、俺こうして話す事もできなくなるんだろ！？」

「存在自体が無くなる」

「いやだあああああ！ ここからだせー！！」

絶望の声を打ち消すように腹の底から叫んで球体を力任せにバンバン叩いた。が、柔らかくて硬い……こんなにやくのような感触の透明な壁は、惣一の拳をその都度優しく包み込んで——破損するどころか輝一つ入らない。

真顔でその様子を見続ける少女。

「こうなってしまうから、水晶球に入れた。以上が事故後ここまでの経緯だ。理解出来たか」

「出来んわ！！」

即答に、僅かに困った表情を示す少女。

「……厳密に言えば、ここから出す事は可能だ」

「！　なら早く……！」

黒目はそこで惣一を真っ直ぐに見た。強い眼差しに貫かれて、言いかけていた言葉を思わず飲み込む。

「しかしおまえの肉体は壊れている。この水晶球以外、どこにも戻る場所はない」

「……………壊れてるって……………」

「精神体——おまえの今の状態の事だが——にダメージが無かろうが、壊れた体には入れないという事だ。どんなに霊力が高い者であろうと、どんな術を使って肉体を復元したとしても、どうしたって一度切れた命系を癒着させる事は出来ない。それが”死”というものだ」

「……………死」

「御霊のまま現界を彷徨うと、悪霊に取り込まれたり、場所や生人に固執してその身が悪霊と化したりする。そうなってしまったら昇天も叶わなくなってしまう」

「……………そういうの、なんか……………ホラーとかで聞いた気もするけど……………」

「…霊能力者とか、陰陽師だとか、そういうのだろ？」

「精通しているのなら話が早い」

「え？」

「おまえに害を与えるつもりはないのだ」

黒瞳から険が取れた。

「私はおまえを救うためにここにいます。一緒に来い」

「……………救うって」

「無論、昇天させる事だ」

それって……あんまり救われないような……………。思ったが惣一は口にしなかった。目の前の瞳が、あまりにも優しかったからだ。きっと、こいつの言っている事は本心だ。このわけの解らない喪服女は、本気で俺のためになると思って言っている。

俺……………死んじゃったのか……………。惣一は自身の両手を見る。全く実感がない。記憶が無いからしょうがないのかもしれないが、それにしたって現実味がない。今、球体に閉じ込められている事もだ。心のどこかでまだ、これは現実ではないと思っている。世界が自分を騙しているような、次の瞬間ではっと目が覚めて、なんだ夢かとホツと胸を撫で下ろしている自分が見える。説明をしてくれたこの少女が信じられないわけではない。自身が死んだという事実がどうしたって受け入れられないのだ。

「……………俺は」

言いかけたその時、人だかりから大きなざわめきが聞こえた。

「おい！　しつかりしろ！！」

「わかるか！？」

「どうしたんだろう……………なんかあったのかな」

黒目を見上げるが、喪服女の横顔にも疑問の色が見て取れる。その瞬間、一際良く通る男の声がした。

「救急車まだか！？　まだ、生きている！　息があるぞ！」

答えるように聞こえてきた救急車のサイレン。けたたましい音に

徐々に掻き消されていくざわめき。

「……………え？」

「……………え？」

二人は同じ方向を見て、呆然と立ちすくんだ。

「これはこれは……………大変な事になりましたね」

遠くで回る救急車の赤いランプが点滅するように辺りを照らす中、飯沼一華は背後に忍び寄った人物に振り返った。

と、風が吹き一華の長い髪を攫った。目を細めた隙に左手をとられる。自身を拘束した者をしかし一華は澄んだ目で射た。

「……………相変わらず、貴女の瞳は意識を奪いますね。さて。こうしてお目にかかるのは何度目でしょう。直接言葉を交わすのははじめてのことだと記憶していますが」

「どういう意味？」

「なにがですか？」

「さっきの言葉と、それからこの手。貴方がこんな所に居る事も」

「意味することは一つだと思いますが」

「……………」

「導きと。監視ですね。竜駒巫覡として当然の働きかと」

「……………そう。私と同じと言うつもりなの」

「違いますか」

「ええ。勘違いです。貴方だけの……………無理もないけれど」

「へえ。やけに含みのある言い方ですね。思ったとおりだ、貴女と居ると退屈しない」

一華は諦めたように小さく息を吐いた。その困った表情を黒い長髪
の男は楽しげに眺めている。

「楽しみだな。これからは貴女の色々な顔が見れる」

「一つだけ、いいかしら」

「なんなりと。竜玉」

「貴方の言う『監視』を続けるつもりならそろそろ手を離れた方がいい
と思うの。すぐく目立ってるから。私達」

「これは失礼」

大げさな素振りで両手を揚げて一華の細い手首を離す。

頭上から男に向けられていた殺気が薄れた。

やれやれと肩を竦めてから、男は改めて一華と、彼女の視線の先
を視界に入れる。

「護衛はともかく、彼らは気づきませんよ。それどころではなさそ
うですし」

「そうね。……でも、もう」

黒い少女は、医療スタッフが行き交う廊下の白い壁に腕を組んで凭れていた。背は百五十センチもないだろう。色白の肌によく映える漆黒の髪を顎より上のラインで切りそろえた日本人形のような容姿の少女だ。身を包んでいる黒い無地の着物が一層浮いて、先ほどから奇異の視線の一斉放射を浴び続けている。

呆然と病室からドアを透りぬけて出てきた惣一は、少女の姿を認めると浮いたままゆっくりと近づく。

少女は通り過ぎる人々の視線を物ともせず、ただ目を閉じたままでいた。……いや、よく見るとその頬を一筋の汗が伝っている。さすがにこう目立つちゃ居心地悪いだろうな。ぼんやりと思いながら正面に立つと惣一は力の無い声で少女に訴えた。

「……なあ。体に入ろうとしてもこのままなんだけど。すかすかと通り抜けちゃうんだけど。戻れないんだけど」

「すまない」

即座に謝罪の言葉を返される。え、俺謝られた？ どういうこと？ 未だ事態に脳の処理が追いつかず、青ざめた無の表情のままにいる惣一の目前に、少女は自身の左手首に着けている水晶の腕輪を突きつけた。

目の焦点が合い、惣一の脳が物体を認識するまでたっぷり数秒の沈黙を要した。

「ナニコレ」

物がわからないわけじゃない。どうして自分が今ここで数珠を突きつけられなきゃなんのか、意味がさっぱり解らない。

疑問符を一杯に並べた情けない表情の発する問いに、しかし黒い少女は事務的に淡々と答えた。

「おまえが先ほどまで入っていた水晶球だ」

「そか。俺さつきまでこん中入ってたんだすげえなあ。……………」
「で？」

どゆ事？

体に戻るにはどうすりゃいいの？

惣一のない視線を、黒の大きなつり目はようやく正面から受けた。

「…………これに一度入ってしまうと、成仏するまで出る事は叶わない」
「出られないって…………出れてるじゃん」

惣一は自身の身体を指した。半透明で後ろの景色が透けてしまっている。少女曰く、これは『幽体』と呼ばれる状態なのだそうだが、惣一に言わせればまるで幽霊だ。

「ここに来る前にも述べたとおり、一時的に水晶球から出す事は可能だ。そもそもこれは元々霊を使役する為の一寸の巫覡具であって……………」

「じゃなくて、そんなこと訊いてないつつつか…………、成仏って？」

「……………おまえの命系は既に水晶球に癒着している」

「生きてるのに？　こっから出られないわけ？　俺どうなるの？」

「……………成仏してみるか？」

「死ぬじゃん！！」

「……………すまない」

僅かに汗を浮かべながら頂垂れる少女に惣一は地団駄を踏んだ。

「謝るのはいいから、なんか出る方法！ 入れたんだから出す事くらいできるだろ、訳ないよな！？ とにかくいますぐ何か方法プリーズー！！」

「勿論、調べる。今から一守に戻る。戻ったらすぐだ。だが恐らく……」
「……………おそらく……………」

「前例がない」

見渡せば、敷き詰められた真新しい青畳が数十畳。それ以外に家具等、生活感を漂わせる物質は何一つ存在しない。そんなただただ広いだけの座敷の中心に、白袴を着た小さな爺さんが座布団の上でちょこんと胡坐を掻いている。

皺だらけの顔の前で大きく広げた扇から大きな二つのつり目を覗かせてしばらく、自分と向かい合うようにして正座する少女と、その横に座る半透明の惣一の姿を見上げていたかと思うと、あっけらかんとそう言い放った。

またしても茫然自失の惣一と、頬に二筋の汗を流す少女。

「靈力ゼロの人間を水晶から出す方法なんぞ、知ラン」

意味ありげな視線で少女を見た後、軽い口調でぷいっと横を向く。足を崩して座る惣一の横で小さな背筋をぴんと伸ばして座っていた少女は、ピクリと僅かな反応を見せると怪訝な声を上げた。

「靈力ゼロ……………だって？」

「なんデヤ。お主おんしそんな事もわからんのか。日々の修行は一体何の

為にやっておる。状況に囚われぬ意志と判断力、それに物事に動じぬ強靱な精神力を養えとお主にはあれほど言うておったのに毎日やつてもそれじゃなんの意味もないチャラ」

「……………」

少女の頭上に不可視の大岩がみしつと落ちてきたように惣一は感じた。

「今回の事だつてそうチャ。如何なる状況、如何なる理由があろうと生人を水晶球に取り込むなど前代未聞。竜角で殴つ叩切るなぞ言語道断チャ。常日頃から言うておったはず。お主は竜角に頼り過ぎとる。竜駒巫覡といえど、執着しすぎなのチャ」

「……………」

少女の小さな頭がさらにずしんと落ちる。

あ、大岩二発目。横目で、声なき声で呟く惣一。

「今一度集中して小僧を視てみんかい。外身を覆っている霊力は半端ないが、内は殻チャ。如何に生人時に霊力が高かろうと、水晶球に命糸を癒着させたが最後、球に吸い取られるのがオチチャろうから、現時点で霊力がゼロなのは言うまでもない事チャが……………」

「……………」

「…………ま、仮にも竜駒巫覡の名を持つ己で答えを導き解決するんチャな」

最後の大岩を少女の頭に落とすと爺さんは扇をピシヤリと畳み、老体とは思えぬ軽快なフットワークで立ち上がると愉快的ステップで座敷を出て行った。

畳の匂いのするただっぴろい和の空間に残された少女と惣一。

少女は不自然な程に頭を垂れて数十分、固まっただま動こうとし

なかった。

「……………あんさあ」

無言に困り果てて、正座したままの少女に惣一は声を掛ける。
…が、無反応だ。

このコ。どうみたって小学生くらいだもんな。怒られて落ち込んでいるのかな。今度は惣一の頬に一筋の汗が伝った。参ったな。自分是一人っ子だ。子供のお守なんてやったことない。

「……………なあ。このまま居てもラチあかないし。済んじやった事は仕方ないしさ……………とりあえず行動しない？」

言いながら、少女の前に回って様子を伺う。

辞儀でもするかのように頭を垂れた少女の顔は……………意外な事に無表情だった。

「…………………………『とりあえず』？」

顔を上げると同時に、大きな黒瞳が惣一を刺す。
てつきり泣いているかと思っていた惣一は思わずびくりと肩を鳴らした。

「……………あ、ああ、そう。『とりあえず』。……………それにさ、腹減ってるんじゃないか？ もう飯時過ぎてるんじゃない？」

室内には畳と壁と障子、それから和を匂わせる照明があるだけで時計の一つもない。ないのだが、病院を出た時点で辺りはすっかり夕闇に染まっていた。晩飯の時間は当に過ぎている頃だろう。

惣一の言葉に怪訝そうな表情を返す少女。

「夕餉をとっている場合では……」

「だから『とりあえず』って事でさ。あ、ほら。腹は減っては戦は出来ぬって言うじゃん。聞いたことない？」

「……………ある」

さらりと揺れる黒髪。素直にこっくりと頷く少女の様子に「だろ？」と笑んでみせる。

「こんな何にもないところで塞ぎこんでるよりはよっぽどいい。留まったらどんな綺麗な水だって淀むだろ。いい事ないって」

「……………塞ぎ……………こんでいると言つか。私が」

「あれ、違うの？」

惣一の驚きの表情に、少女はばつが悪そうに視線を逸らした。

「……………違うとも。今後について考えを巡らせていたところだ」

「へえ……………そう」

半目で空返事をしてやる。強がり。可愛げのないガキは特に嫌いだ……………。

「……………先ほどから気になっていたが、私はおまえと同じ歳だ。ガキではない」

視線を落としたまま、少女は告げた。声色に若干不機嫌な色が混ざっている。

「へ」

……同じ歳だつて？ 惣一は改めて少女を見た。小柄な体型にあどけない顔立ち。見たところランドセルを背負って小学校で給食食べて……が似合いそうな容姿だ。最低でも中学生……、

「同じ歳だと言っている。今年で十七。学校に通っていればおまえと同年になる」

「うそ。全然見えね………つつつか。もしかして。俺の考え………読んでたり、………する？」

「水晶球に入った時点で、おまえは生人であろうと私の式という立場にある。式の思考を把握する事はそれを使役する者の義務だ。尤も、読んでいるというよりは……球を通してなんとなく伝わるという程度だが」

「つつわーあい………」

惣一の頭から血の気が引いた。サイアクだ。さらに問題が増えた。思春期男子の頭の中が女子に駄々漏れ——垂れ流し状態……だと………！？

読まれはしなくてもこれは………一大事だ。場合によっては………地獄………？ 汗が濁流のように落ちる。

「妙な事考えないようにしなきゃ………か」

無表情のままぼそりと呟く少女。心なしか表情筋が嫌な感じに歪んでいる気がする。

「読んでるだろ！？ 絶対に読んでるだろ俺の心！？」

「む。私は嘘は言わない。おまえがわかりやすいだけだ。………」

ふむ。別に記憶を漁らなくても、球に入ってからこれまで、おまえが妙な考えとやらを抱いた事はないと思っただが。………しかし、『妙な』とは一体どのようなものなのだ？」

「早くここからだせー!」

大きな満月が闇の降りた街を照らしていた。

まるで海底に沈んでしまったかのような静けさと、小さな光が無数に広がる宙の圧倒的な存在感。吹きつける清流が生む澄んだ空気に包まれた世界。こんななりになっても風を感じる事は出来るんだな。惣一は空に寝転がって自分の透けた掌越しに月を仰いでいた。

ふいに、風を切る音がした。

下からだ。惣一は視点を移した。遙か眼下に、暗い森に囲まれた一守家のシルエットが小さく見える。惣一が住んでいる印場市の隣、同県白羽市にある白蛇神社の境内に建てられた古めかしい平屋造りの屋敷だ。その立派な庭園で少女が大剣を振っていた。

昼間俺を刺した剣か。惣一はゆっくりと地に降りる。

「すげえな、そんな大きな剣振り回して。重たくないの？」

少女は強い光を帯びた瞳でただ一心に前を見据えている。

身の丈以上の刃を静かに振り上げて、一瞬静止した後、宙を袈裟懸けに斬る。

飛び散る汗とともに短い黒髪が一定のリズムで広がる。

夜闇を裂く剣先が、月明かりを受けて鈍く光っていた。

「その剣。どしたの」

めげずに横から質問を続ける惣一。混乱して後回しにしていた疑問と好奇心が頭の中で一気に膨れ上がっていた。

少女は二、三、剣を振った後でようやく「どうしたとは？」と素っ気なく返した。正面を見据えたままりズムを崩すことなく剣を振り続けている。

「持たないでしょ。ふつー。剣なんて。そもそもそんなもん振り回してたら銃刀法違反で捕まるし」

「これは剣ではない。『竜駒』だ」

「りゅーくつて、なに」

「竜駒とは竜駒巫覡が使役する神具。主に銃刀の形をした物が多いが、その類ではない」

「よくわかんないんだけど」

「……。何しに来た」

「身の振り方話し合おうと思って。いつまでもこのままじゃいられないし」

「今後の方針か」

「方法探すのが先決だろ？　それか、何か考えがあるのかなって」
「ない」

「……そうきつぱり言わないでくれる。結構堪えるから」

「これから一守の書物庫を探るつもりだ」

「もう日付変わるぜ？」

「私の力は夜の方が高まる。探し物は夜の方がいい。精神統一のために竜角を扱っていた」

「りゅーかく？」

「この竜駒を示す名だ」

「要するに、その剣の名前な訳ね。……で？　統一して、何かわかるの？」

「わからない」

「……だよなあ」

言つて、惣一は月夜を仰いだ。前途多難、どころではない。先行き真つ暗。光も見えない。お袋泣き喚くだろうな。親父にクラスの連中に、それから……飯沼一華。

「せめて、無事だって事を伝える手段を考えんなあ……」

溜息混じりに言葉を吐く。

少女は剣を振る手を休めると、ここで始めて惣一の姿を視界に入れた。

「周りを優先させるのだな」

「優先……つつつか、なんつつか。現に俺はぴんぴんしてるし、今は問題ないだろ。まずはそっからでしょ」

「……おまえ、名は」

「な？」

「私の名は一守晶。いちもじあきう おまえの事は、なんと呼べばいい」

ああ、名前の名、ね……。

本当に、解りづらいというか、こんな口調の固い女子、見た事がない。この喋り口調はまるで厳格な親父……そう、あのテレビで頻繁に見る某携帯会社のコマーシャルに出ている白い犬のようだ。……こっちは、白じゃなくて黒いけども。

「……どうした。腹でも痛むのか？」

発症した笑いの発作をなんとか抑えようと身を屈めていると、怪訝そうに首を傾げて近寄る黒いお父さんけ……じゃなかった。一守。

「悪い、なんでも……っていうか、名前だったな」

身を起こすと惣一は改めて少女——晶に向き直った。

「俺は御子柴。御子柴惣一」

よろしく、と右手を差し出す。

晶は不思議そうな顔でしばらく差し出された手を見ていたが、ふむ、と一言。竜角の柄を握っていない方の手でその手を握った。

彼女の手は異様に小さくて細くて温かくて……少し汗ばんでいた。

「ではミコシバと。困るのであれば直接伝えればいい。先ほども言った通り、現時点ではミコシバを水晶球から出す方法はわからない。方法を調べるのにいつまでかかるかも正直わからない。しかしその間ずっと幽体のまま、というのも何かと不便だろう」

「っていうと……本当の体には戻れなくても、他の体なんかに入る事が出来るのか？」

幽霊が人の体に乗っ取る、なんて内容の漫画を思い出して訊いてみたが、晶はまた怪訝そうな顔で首を傾げた。

「他の体、というと……一時的でよければ、可能なのは五体満足な死体くらいだが。……入りたいのか？」

大きな黒瞳が真顔で問う。

「んな訳ないだろ！……その、思いついて、言っただけだよ……」

「……んな事、マジで出来るんだ。ここで頷いたら本当に誰ともつかぬ死体の中に入れられそうで怖い。想像して、惣一の背筋をぞーっと悪寒が伝った。

「それならいいのだが。命系を死体に仮癒着させるより、幽体を実体化させる方が手っ取り早いからな」

ほっとしたような様子の晶の言葉に、惣一の耳がダンボになる。
幽体を、実体化させるだって……？

幽体ってのは、この幽霊みたいな体の事で、それを実体化ってことはつまり……………。

「出来るの!？」

目を見開いて一気に詰め寄る惣一にも動じず、無表情のまま晶はその顔を見返す。

「可能だ。だがこの方法には危険が伴う。精神が殻を持たずに表に出る訳だから、傷を負えば精神そのものに傷を受ける事になる。それでも…………」

「かまわない、かまわない。かまわないから、今すぐ実体にしてくれ! 数日後には親が旅行から帰ってくるんだ!」

「今実体化してどうする。帰宅するつもりか」

「あ……ああ、そうだな。このままここにいたってしょうがないし、家には帰りたい」

「ならば、少し待て。私にも準備がある」

言つと、晶は竜角を瞬時に消し、

「うわすげ。どーなってるの?」

くるりと回れ右をして、屋敷の縁側に足を進めた。
慌てて惣一はその後を追う。

「じゅんびつて何? じつたいかの準備?」

「式の実体化には私の霊力が必要だけだ。瞬く間に終わる」

「じゃあ、なんの」

「何って……おまえの家に滞在する準備に決まっているだろう」
「……………は？」

時を止めた惣一に、晶は足を止めて振り返った。

「必然だ。互いの距離を半径十メートル以内に保つ。それ以上は私の霊力が届かない」

「……よく状況呑みこめないんだけど。それってつまりさ。折角体もらっても、おまえと距離離れると……」
「幽体に戻る」

一瞬の間の後。

「解決してねえ。これ、さっぱり解決になってねええ」
「……………すまない」

地に突っ伏した惣一の姿に、しょげつと頭を下げる晶の姿が、月明かりに照らされていた。

結局、惣一は家に帰らず、晶の水晶の中で一晩を過ごすことにした。

問い詰めてみれば、晶は惣一を実体化させると常に霊力を消費し続ける状態になると言う。

「……だからさ。早く言おうよそういうことは」
「そういうこととは？」
「消費し続けるってそれ、疲れることなんだろう？」
「それはミコシバには関係の無いこと……」

「あるの。寝覚めが悪いつつうか、落ち着かないつつうか……とにかくあるの」

「……………そうか。すまない」

「謝ってばっかだな……………」

「……………すまない」

そうなんだよな……………一守って奴、会ったばかりの俺に頭を下げてばっかなんだ。

よっぽどこの事態……………つまり俺に対して、気に病んでるんだろう。まあこんなことになって迷惑じゃないって言えば嘘になるけど、でも……………。

今日一日見てきた晶の顔が過ぎる。小学生のような顔立ちで、しかしその眼差しは……………なんというか、懸命だ。

その仕草には女子特有の可愛らしさだとか甘えなどは欠片も無く、生真面目にきびきびと動く。顔立ちのせいかもしれないが、どこか違和感があるというか……………無理をしている風に見えてしまう。

殻もなく剥き出し状態の幽体で外をウヨウヨしては危険だという理由で無理矢理強制送還された水晶球の中。仰向けに寝転んでいるため、自然、晶の顔が視界に入る。惣一が存在を特に意識する事なく、薄明かりの下、ぴしっとした姿勢で小さな木製の机に向かい、黙々と文献を読みふけていた。見れば正座をしている。この定規のようなきつちりかつきりの真面目っぷりは地なのだろうけど……………なんとなく危うい印象なんだよな。ほっとけないつつうか。眺めながら、いつしか惣一は瞼を閉じていた。それにしても。自然、ため息が口から漏れていた。

事故を始めに、神社に住んでる本物の霊能力者に大きな剣で刺されて。

死んだと思ったら実は生きてて。

今じゃ体は病院で、心は水晶の中。

今日だけで不思議なことが起こりすぎた。

日常から非日常へ。スイッチが切り替わるように世界は激変し、一気に雪崩れ込んだ。

まだ、この状況が夢なのではないかと、心のどこかで疑っている自分がいる。それとも何かおかしなフラグでも踏んだのだろうか。記憶を漁って過去を振り返るが差し当たって覚えがない。

……………俺。一体これからどうなるんだ？

漠然とした不安を頭に君臨させたまま、惣一の意識は徐々に眠りに落ちていった。

「ぶわ……！？ 冷て！」

水晶の中。いきなり頭上から降ってきた冷水に惣一は飛び起きた。

「……………ミコシバ？ 起きていたのか」

「起こされたんだよ！ それも、いきなり水ぶっかけられて！ 風邪でもひいたらどうする……………って。……………あれ？」

水を払おうと体に手をやって、違和感に惣一は首をひねった。昨日から着ている制服のシャツが……………全然濡れていない。

「んあ？」

全身くまなく触ってみる。が、手のひらが湿ることはない。というか、どこも濡れていない。

「水など、ミコシバにかけた覚えはないが」

晶の声に惣一は顔を上げた。

世の中は驚くほどに暗かった。というか、まだ夜中である。水晶自体がほのかに発光している事に惣一はこの時初めて気づいた。

闇の中、白の薄い着物に身を包んだ晶がこちらをみていた。大きな目にかかる睫毛は水に濡れ、切りそろえた黒髪からは水滴が滴り落ちている。

「って、おま……………何してんの！？ 濡れてんじゃない！」

慌てて球を飛び出す。宙に浮いて初めて状況を把握できた。ここは……恐らく、洞窟の中。小学生の時に修学旅行で行った鍾乳洞を彷彿とさせる場だった。

洞窟の突き当たりには池……と呼ぶには大きすぎる湖が、端から端まで広がっている。突き当たりと言っても、厳密に言えば洞窟はさらに深く続いているようだが、人が通れぬ程に穴が小さく、暗所である事も手伝って、今居るこの場からは奥を覗く事すら叶わない。しかし恐らく最奥まで水に浸かっている事だろう。天井から伝う水滴が溜まって出来たのだろうか。

晶はその湖の中心に立ち、腰まで水に浸かっている。古い木桶を手にしたまま、不思議そうに黒瞳を瞬かせて惣一を眺めていた。頭だけではない。全身びしょ濡れだ。

遠くに見える洞窟の入口からは、ごうという音とともに冬の冷風が容赦なく吹きつけて、晶の真っ直ぐな黒髪と、湖の手前に置いてある蠟燭の炎とを揺らし続けていた。見るからに寒そう———というか、痛々しい濡れ鼠の少女にぎよつとした惣一は慌てて飛び寄った。

「大丈夫かよ!?　すぐに家に戻って温めないと風邪ひくどころじゃあ……!」

少女の細い肩を掴み、抱きかかえようとした。しかし、その手はすかっと、あっけなく擦り抜ける。

「?　何をそんなに取り乱している?」

血相を変えて慌てふためく惣一の姿を怪訝そうに見上げる晶。ん?　何、俺、変な事言ってる?　目と目が間近でガツチり合い、惣一は一瞬口ごもった。

「な、何をつて……つつつか、おまえだおまえ!　おまえこそ何し

てんだよ！？　こんなところで水に浸かって、正気の沙汰とは思えない！」

剣幕に押されて、晶の表情にも僅かな動揺が生じた。

「何って……その、沐浴だが」

「も……くよくく？」

聞き慣れない言葉に惣一は眉尻を思い切り下げる。惣一の表情を晶は不思議そうに眺めた。

「そつだ。私は毎朝六時きっかりに神社の裏手にあるこの白池で沐浴し、穢れを落としている」

底が見えるほどに澄んだ冷水の中を、裸足で平然と移動する晶。惣一は固まったまま、呆氣にとられたように小さな背中を眺めていた。確かに寒がっている様子はないが……。

「……………日課……ってのか？　これが？」

「日課というか、義務と言った方がよいが……まあそんなところだ」
水から上がると、蠟燭の横に置いてあった籠の中のタオルを手にして体を拭く。小さな足が真っ赤になっていて痛々しい。

「……………その、寒くない訳？」

「寒いに決まっているだろう」

「！　ならやんなきゃいいじゃん！　こんなの絶対病気になるって！」

「そついう訳にもいかない。これは私の義務だ」

「義務って……病気になるまでやんなきゃならないのか？」

「私はここ数年、床に伏せたことはない。……が、このままいくと
ミコシバの言う通り、すごく不味い気がする」

「だろ！？ だったら……！」

「だから、早急にここから出て行ってもらいたい。ミコシバ」

「……………な、なんでだよ、俺、これでも心配して言ってるんだぜ
？ それを……………」

「……………着替えたいのだが」

「……………！」

「……………早く言えつての！」

猛ダッシュ（？）で洞窟の入口横にへたり込んでから、明け始め
た紫空の下、惣一はやっとの思いでそう吐き捨てた。

「先程はすまなかった」

声がして、惣一は勢いよく顔を上げた。怒っているような困っているような情けない表情で、それでも大きく口を開けた。考えが及ばなかった自分も間抜けだが、大事な事を言わないこいつも相当の馬鹿だ。一言もの申さなければならぬと思っていた。が、視界に入った晶の姿に、惣一は完全に凍り付いてしまった。

「……………」

黒のローファーに白いソックス、リボンタイのセーラー服の上からブカブカのニットカーディガンを羽織った晶がそこに立っていた。

「……………や、やはり変か」

惣一の表情に、動揺した様子の晶。

「…………い、いや…………これまで着物っぱいのしか見てなかったから、普通の格好してるのが意外だっただけ…………つつか、全っ然見えなけれど俺と同じ歳か。制服着て当たり前なんだよな…………。しかし、うちの学校の制服だったから…………余計…………」

後頭部を掻きながらフリーズした頭を徐々に解凍していく。そうだな、黒い着物つてのがインパクト強すぎていうか、異様だったんだ。あんなの着た女子なんて見た事ないからな。そこまで考えてから、惣一の頭は再起動を果たした。…………ウチノ制服？

「……つつか、まさか同じ学校だったのか!？」

「私は生まれてこの方、学校という場に通った事はない」

なぜかむすつとした表情で晶はぴしゃりと言つてのけた。

「……は？」

「この服は、宮司が揃えてくれたのだ」

「はあ？」

「解放する手段が判明するまでの間、実体化させ、これまでどおりの生活を送る事をミコシバは要求し、私は承諾した」

「あ、ああ……昨日の話か」

「昨日も話した事だが、ミコシバを実態化させ続けるには距離が重要だ。私の力では最大でせいぜい半径十メートル内が限度。私は方法が判るまでの間ミコシバと行動を共にせねばならない」

「確かにそう言つてたな。……で？」

「今朝方沐浴の前にそのまま宮司に報告した。その際、嬉々として渡されたのがこの服だ」

「……なんで」

「学校へ潜入するのに私の格好では目立つ、と」

「じゃなくて。なんでその宮司って奴が女子の制服持つてんだよ……」

「……しかもピンポイントでうちの学校のつて所に、そこはかとなく危険な香りが漂つてんだけど……」

「危険な香りだと？ 宮司が危険だと言つのか？」

「……意味違うと思う。おまえが言ってる危険と、俺の言ってるキケン」

「よくわからないのだが」

晶が困った顔で惣一を見上げる。惣一も困った顔で晶から目を背けた。

「とにかく。宮司の事は私には判らない。計り知れない人だ。朝餉の時に直接問うてみたらどうだ」

「断じて私物ではない。こんなこともあるつかと、弟子その二に用意させたのチャ」

数十畳あるただっぴろい和室の中央に長方形の木製テーブル……というか、細長いちゃぶ台。床の間の方を背に胡坐をかいていた小さな爺は、湯気だつ味噌汁を片手にひょうひょうと言つてのけた。

「つて、あんだつたのか……宮司つての」

縁側に近い座布団の上に浮いていた惣一がジト目を向けると、持っていた異様に長い……まるで菜箸のような箸をくるりと器用に回して、箸先をびしつと惣一に向ける爺。

「あんだチャない、一守一徹チャ。超有能な巫覡であるこの儂を差し置いて誰が白蛇神社の宮司を勤めるといつのチャ」

「知らんけど。いないけど。つつうかまだ、他の誰にも会つてないけど。てか、もしかして、こんだけ大きな屋敷に住んでるの、じーさんとおまえと、二人だけつて言う？」

隣でびしつと正座している制服姿の晶を見る。彼女は既に皿の上の豆腐料理をきれいに平らげ、幸福そうにお茶を嚙っている所だった。

問われて、僅かに不機嫌そうな顔つきで湯飲みを置くと、宙に浮かぶ惣一を見上げる。

「……一守以外にも、世話をしてくれる人が数人出入りしている」
「ああ、それなら確かに昨夜から何人が目にしてる。巫女さんだろ？」

「馬鹿かお主。見てわからんのか。ありや巫女じゃないわい」

「え？ だって、白衣に赤い袴着て……」

「たわけめ。ありや、こすぶれチャ」

「……こ、す………？」

「巫女とコスプレ巫女ちゃんの区別もつかんとは。お主も修行が足りんのぉ」

「してないつつの修行なんて！」

かかと笑う一徹の顔をジト目で睨む惣一。

つつうかさせてるのか。コスプレを。神社の宮司つつうか、爺が若い子に強要？ それっていいのか！？

「強要はしていないようだが。皆嬉々として袖を通しているぞ」

さらに頭の痛くなるような発言が隣から聞こえてくる。……そうか、読んだか俺の心を。ジト目をそちらに向けると晶は臆面も無く惣一を見返し、口を開いた。

「なんだ、知らないのかこすぶれ。宮司の話では巷で流行しているらしいぞ」

「いや、巷っていうか」

何この素っ頓狂な言葉。こいつは一体どれだけ世間知らずなんだろう。さっき学校に行った事がないとかなんとか言ってたけど……そういえば、こんなに広い家の中、まだ一台もテレビの姿を見ていない。……ひょっとして、テレビを置いていない……とか？

「なんチャ。若造のくせに流行も知らんのか。儂の行きつけの店じや、どのねーちゃんもやっておるぞい」

「ふざけんな変態爺、どーせ店は店でもいかわし……！」

瞬間、飛んでくる扇。惣一の額に激痛が走った。

「で……！」

な、なんで……！？ 俺、今、半透明なのに……！ つつつか痛みどんだけ。

惣一の足下にゴトリと落ちる扇。その重音に、しわがれた声が重なった。

「ミコちゃんおっくれる〜」

「くそ……あのエロじい人をおちよくりがって……大体どうして透明の時に扇子が当たるんだよ……」

ズキズキと痛む額を押さえながら晶と二人、学校へ向かう。

晶に実体化させてもらった惣一。今は普通の人間呈で歩いているが、どうにも歩きづらい。多分、月面で歩行するとこんな感じではないだろうか。本物の体でない為か異様に軽い。半透明時のような宙に浮く程のものでは無いが、それでも、この場でジャンプすれば軽く目の前の電信柱のテッペンまで到達するのではなからうか。

「宮司だからな」

せつせと隣を歩く制服姿の小さな晶が、前方を見ながら素っ気無く答えた。

「宮司だから、で片付けられる事かよ」

「宮司の霊力は凄まじい。私など足元にも及ばない。一瞬で鉄扇に霊力を通し幽体に影響を与える物へと変質させる事位造作もないだろう」

「鉄……扇……？」

「ああ。鉄扇だ」

「どつりで、『扇子が当たった』にしちゃとんでもないと思った……」

「ああ。とんでもなかった」

「……ひょっとしなくても、伝わったのか。痛み」

無言で前方を見つつ歩みを進める晶の額に、横から手を伸ばす惣

一。真っ直ぐに切り揃えられた黒い前髪を掻き揚げると成る程、真っ白な額の一部が真っ赤になっていた。

目にした直後、惣一に罪悪感にも似た感情が湧き上がった。失念していた。感情が伝わるのなら、痛みも伝わるはずだ。

「……な、なにを……して……！」

声に表情を見遣ると、前髪を掻き揚げられた晶がわなわなと体を震わせていた。あ。耳まで赤くなってる。それにしてもこいつ、色白いよな。

「悪い。知らなかった。傷を受けたら一守にダイレクトに伝わるんだ」

晶から離れる。と、前髪を素早く整えた晶が、未だ赤く染まる顔に普段の無表情を作って口を開いた。

「だileくと、というわけではない。ミコシバが傷を負った所で私は腫れ上がる程度だろう」

「そうなの？」

「ああ。そういう術をかけているからな」

ふうん。怪我をしないのなら、そんなに気にする必要ないのかな。でも痛みはちゃんと伝わっているようだから……。

そこまで考えて、惣一ははたと立ち止まった。

「……と、そうだ。病院寄ってかなきゃ」

「病院？ 何故だ」

「靴そつちだし。大体登校ラッシュ時におまえと肩並べて学校なんか行ったら相当目立つし。なにより病院あうちの状況が気になるし。さす

がに家族の一人も連絡付かないとき、学校に連絡されちまうだろ。制服でどこの高校かはモロバレだろうしさ」

「自宅には誰もいないのか」

「言っただと思うけど、今両親とも旅行してて、俺は一人っ子。まあ、都合よかつたけどな。居たら居たで今頃大騒ぎだつて」

「……そんなものか」

「そんなもんだろ？ あのだうさんだつて凄まじそうじゃん」

「そうか？」

「おまえつて一人娘なんだろ。俺と同じように事故に遭つたらあのコスプレじーさんだつて血相変えて騒ぐと思うぞ」

「……………そうだな。私がおまえと同じように事故に遭つたら……考えるに、宮司の場合」

「うん？」

「目が合つた瞬間に、不甲斐無い、と。とどめをさしてくるだろう」

「……………そうなの」

「ああ。兄が家を離れた時もそうだった」

「……兄。お兄さんがいたの？」

「そうだ。数年前までは」

「数年前までつて？」

「兄が家を出て行つた後、宮司が、あれは最早他人。兄とするなと」
「そりゃ確かに。凄まじいな……………」

病院にて、患者の双子の兄と名乗つた惣一は、当然のように病室に案内される。

昨日同様、集中治療室のベッドに寝かされていた自分。

なんでも外傷は軽いらしく、これから精密検査を受けた後、異常がみられなければ一般病棟に移されるそうだ。

意識もすぐに回復するだろうと説明された。

（んな訳ねーし。意識、外、出歩いてマスから）

話を聞きながら皮肉に笑うと、一度だけ晶がチラッとこちらを見上げた。

その後、保管されていた鞆を受け取って、晶と二人、高校に辿りついた頃には、時計はすでに十一時をまわっていた。

当然授業中である。

「御子柴！ おまえ……大丈夫だったのか！？」

教室に入るなり教師の大声と、クラスメート達の好奇の視線を浴びせられ、大きく仰け反る惣一。

「な、なんすかそのリアクションは……」

「こっちのセリフだ！ 当直の先生が病院からの電話に出られてな。昨夜はずっと担任の海道先生が付き添っていたそうじゃないか」

……遅かったらしい。

そりゃあそうだよな。惣一は小さく舌打つ。昨夜は色々有り過ぎて頭が働かなかったのだ。

「……っと、自分が起きた時には先生いなかったんで、知りませんでした。……海道先生で、今どこいます？」

「ああ、一旦こっちに顔を出してから、また病院に戻ると言っておられたが」

げ。今病院に行かれちゃ困る。

あっちには”体”が寝ているのだ。御子柴惣一が二人存在している事がバレてしまうではないか。

「職員室つすね。顔出てきます」

「ん、あ、ああ……しかし、本当に大丈夫なのか御子柴」

「ぴんぴんしてますって」

職員室にて散々泣き喚く海堂を宥めた後、教室に戻ろうとして、ふと時計を視界に入れる。

時刻は十一時半。登校してからまだ三十分も経っていないかった。ふいに晶の無表情が頭を過ぎった。

そういえば一守の奴、屋上で待つと言ってたっけ。

真冬の屋上。寒くない訳が無い。

方向転換。職員室から一番近い、中庭の自販機に足を進める。

そこで惣一は、自販機横のベンチに腰掛けてオレンジジュースを飲む級友の姿を発見した。

「あれ？ 水戸？」

声をかけると、ベンチの背に凭れかかったまま、気だるげに惣一を見上げて「うーす」と片手を上げる。

水戸^{みとみつくに}光國。惣一とは中学からずっと同じクラスで、いわば腐れ縁

だ。さらさらの茶髪に高身長。整ってはいいるがどちらかと言えば女顔で、声も男にしては高い。背が伸びる前——中学までは、私服で居ると頻繁に女子と間違えられ声をかけられたらしい。

女子にはウケがいい……というか、高校に入ってから実際はモテてる。

「昨日は大変だったみたいだなーミコちゃん」

どこか気だるそうないつもの光國の声に苦笑を浮かべる惣一。こうしてダチとくっちゃべってるとなんだか、昨日の事が全部夢

だっ たみたいだ。

「まあな。っていうか、なんでこんなトコに居るんだよご老公」

「見て解んだろ。俺っちはサボリ。おまえ程じゃないけど、昨日はバタバタしてたからタルくてさー。んで？ ミコちゃんこそ、どつたの」

「俺は……まあ、俺もサボリかな」

自販機のボタンを押し、缶コーヒーのホットを二つ落とす。
拾い上げるのを見て水戸が笑った。

「ひでーな。俺っちが飲めないの知っててそれ？」

「安心しろ。てめえのじゃねえから」

意外そうに瞳を見開く水戸。

「お仲間がいる訳？」

「まな。ンじゃそういう訳で」

「へえー今日は訊かないんだ？ 飯沼一華嬢、マル秘情報ー」

踵を返しスタスタと校舎に向かう惣一に、懷から取り出した手帳をヒラヒラさせる水戸。

「あるぞーとつときの新情報」

……まったく、なんでこんな女みたいなきれーな面^{ツラ}した奴が、我が校始まって以来のド変態達が集ったと言われる新聞部改め、アイドル発掘し隊の部長なんだろう。

光國が度々「この紋所が目に入らぬかー」と気だるげに男子生徒に掲げているあの手帳は、アイドル発掘し隊の発行する『美少女図

鑑（県内版）』の……いわばネタ手帳である。
足を止めてぐぬぬ……と唸る惣一。

「……………」

しばしの葛藤の末、惣一は苦笑いを浮かべつつ光國を振り返った。

「今度聞かせて。水戸光國ご老公様」

「ちえ。折角ミコちゃん驚かせようと思って仕込んだネタなのによ……付き合い悪いんでやんの」

ふてくされたような顔で缶ジュースを一気飲みする水戸に謝る仕草をしつつ校舎に入る惣一。

その様子を横目で見つつ、光國はぼそりと呟いた。

「……ネタばらしの時期。どう考えてももう過ぎてると思うんだけどなー、お嬢」

「だあから、本気で大丈夫だって。声聞けばわかるだろ？　Ｕターン帰国なんてする必要なし！　安心して。うん……うん。それじゃ」

ホットコーヒー二缶を腕に抱え、うんざりした顔で携帯を切る。

「ったくあの馬鹿親……毎度毎度しつこいつつの」声に驚いた顔でこちらを見た晶、屋上の真ん中にポツンと一人、立っていた。

「どうした。じゅぎょうではないのか」

「抜けてきたつつつか。義務果たしてきたつつつか、サボりつつつか。このままここに居たって誰も文句言われない状況が完成してる」

「ふむ。では何しに来た」

「なにしにつて……ほら。どうかなって様子見に」

缶コーヒーで両手が塞がっていたので、顎で晶を指す。

キョトンと突っ立っている晶に近寄ってコーヒーを一缶手渡すと、無表情で大きく首を傾げた晶は頭を元の位置に戻しつつ口を開いた。

「校舎全域に私の力が届くよう数箇所に陣を設置した所だ。実体化に支障はない」

「じゃなくて。寒くないかなと思つて………愚問だったな。こりゃ寒い」

晴れた屋上。時刻は午前十一時半を回った頃だ。

日差しは強いが北風は凄まじく、容赦なく吹き付けてくる。

黒髪を四方八方に乱された晶はしかし、気持ちよさそうに瞳を閉じた。

「風が気持ちいい」

「いや寒いつて。ただでさえおまえ寒々しい格好してるつてのに」

言つて惣一は手にしていた缶コーヒーを開け、口を付ける。

それを見た晶も、見よう見まねで缶のプルタブを開けて恐る恐る口を付けた。

一瞬間を齧めた後、ふむ、と頷いてグビグビと喉を鳴らす事、数十秒。

……え、まさかの一気飲み？ 惣一が啞然とその様子を見守ると、腰に片手を当て、どうやら飲み干したらしい晶がぷはーっと息を吐いた。

「温まった。礼を言う」

「……そりゃどーも。もうちょい女子らしくチビチビ飲んでくれると、まだまだ防寒として役立つたはずなんだけど」

「しかし、独特の風味の茶だった……」

「コーヒーだから。それ、コーヒー」

「そうか、こーひーというのかこの茶は」

「だから、茶じゃないってソレ」

缶を掲げて書かれた英字を指し示す。

キョトンと晶は、手にしていた空の缶に視点を落とした。数秒後大きく首を傾げる。……そういや、「学校に通った事はない」んだっけ。読めんのか。英語。

「しかし、温まったつつつても。この後もこのままここに突っ立つてる気だろ？ さすがに寒くね？」

「しかし、用意された衣服はこれだけだった。ミコシバの視覚にどれだけ寒々しく訴えようが、こればかりは慣れてもらうしかない」

「だから、俺はいいから。……そのマフラーだけで防寒になるの？」

「まふらー？」

「それ。首に巻いてるじゃん」

首に巻きつけた暖かそうな茶色のマフラーを指す。登校時には気づかなかったが、鞆の中に入れてあったのだろっか。

「これはマフラーなどではない。イタチ守だ」

怒られて、今度は惣一がキョトンとする番だった。

「………いたち、のかみ？」

「今のミコシバと同じ事象だ」

「……俺と同じ……って事は、ひょっとして実体化ってやつ？ イ

「タチの幽霊なの？ それ」

「違う。イタチ守は動物精霊だ。式をお願いしている」

「シキ？ そういえばちよくちよく聞くけど……それって結局なんなんだ？」

晶は僅かに眉を動かし、考えるような仕種をしてから、

「すまない。正式には式守しきがみと呼ぶ」

と、告げた。途端に惣一の目が大きく輝いた。

「しきがみって、式神か！ すげー本格的に陰陽師だな」

「一守は陰陽師ではない」

「でも、神社の神主の家だろ？」

「神主が皆陰陽師という訳ではない。一守は巫覡を名乗る」

「ふげきって……訊くけど、陰陽師とは違うの？」

「ああ。血と道具、陣を用い、式守を身に降ろし使役する」

「それって陰陽師じゃん」

「陰陽師とは異なる。彼らは言霊と術を生成し、式神と易を操る。

巫覡にはない力だ」

「似たようなものだと思うけど……」

「違う。そもそも彼らの式と巫覡の式は違うのだ。彼らは己の霊力を用いて式——式神を使役する。巫覡は、元々は神招ぎ——神界・霊界・自然界の超物理的な存在を己の身に降ろすのみの存在。使役するには巫覡具を用いて自我を制御する事が必要となる」

「超物理的な存在って……俺もかよ。俺を数珠に入れたのも使役するつもりだったのか」

「悪いが。私は動物精霊専門だ」

「専門って……そんなんあるの？」

惣一に問われ、途端に顔を赤くした晶は軽く咳払いをした。目を瞑り気難しそうな表情を作る。

「おまえの場合、目的は使役ではなく昇天だ。経験上、死直後の混乱状態にある霊に状況説明は困難だ。私は一旦数珠に入れ霊を鎮めてから行う事になっている」

「俺が生きてるって解らなかったの？」

「……………すまない」

「いや、責めてるわけじゃなくて、普通に疑問。一守って格好から何から、漫画で見るような本格的な霊能力者だし。実際そんな力あるのに、なんで解らなかったのかわかって」

「言い訳はしない」

「だから。責めてるんじゃないって。理由が知りたいだけ。何、おまえドジっ子？」

むっとした顔で惣一を見上げる晶。

「おまえの場合は例外だ。おまえは幽体に霊力を纏っていた。だから、てつきり死んだものと」

徐々に声が小さくなり、視線が足元に下がる。そんな黒目の動きを惣一はキョトンと見ていた。

「れいりよく？ 俺にもあるのか？」

「ああ。今も目に見えるくらいに」

惣一は目を丸くする。

「嘘だろ。俺不思議体験なんて生まれてこの方、した事も見た事も聞いた事もないんだけど」

惣一の言葉に、晶の黒瞳に動揺の色が灯る。

「……そんなはずはない」

「俺が嘘ついてどうすんだよ」

「……………それはおかしい」

「おかしいて」

「通常生霊は霊力を纏わない。それをおまえは纏っていた。さぞや力の強い者なのだろうと思ったのだが……………」

不自然に言葉を切る晶。不思議に思った惣一は晶の横顔を覗きこむ。幼さの残る顔立ちに厳しい表情。大きなつり目がちの黒眼は鋭く遠方を射ていた。

「……………何事？」

「力を感じる」

瞬間、晶が地を蹴った。

「え？」

晶の持っていた缶が惣一の足元に落ちる音が響いたその時には、小さな体は屋上の端へ移動を果たしていた。

「なんつつ速さだあいつ……………飛んでるんじゃないのか!？」

慌てて惣一が後を追う。勝手が違う体で、走るのに手間取った。

「……………なんだあれは」

晶は屋上の手すりの前に立ち、身構えていた。
風に靡く黒髪が晶の表情を隠している。

「どしたの急に!？」

惣一が横に並び、晶と同じように視線を下に投げる。

晶の視線の先――校門の傍に、聖武女学院しゅうむの制服姿の女が一人、
長い茶髪を靡かせていた。

顔はここからでは見えないが……彼女の方も、なんとなくこちら
を見ているような気がする。

「あれは……」

「知っているのかミコシバ」

「知ってるつつつか……この辺じゃ有名だよ。高台に建ってる金持
ち女子高の制服。だけど……」

なんでこんな時間に印場高うちに居るんだろう。しかもあの姿つても
しかして……惣一の眩きを、しかし晶は聞いていなかった。

「信じられん。何故今まで判らなかったのか」

「何が」

「ここまで接近を許すとは、私と同じ力……いや、それ以上だ。ま
さか彼女が持っているとは……」

「は？」

「……行くぞミコシバ」

「行くって……おい、危ないだろ！ 手すり越えるな」

「問題無い。むささび守を喚ぶ」

「は？ む、ムササビがどこに……っておい!？」

晶が屋上から飛び降りた。ミコシバの手を引いて。

「う、うわ……………!？」

惣一の手から落ちた缶の音が、誰も居ない屋上に響いた。

冬空の澄んだ青が視界いっぱい広がる。

惣一と共に落下しながら、晶が空いている方の手で、印を三つ結ぶ。瞬間、眩い光を帯びた数珠を翳した。

「むささび守」

静かな呟きと共に、暴力的な風が——重力が相殺される。恐る恐る惣一は目を開いた。

「!？ 浮いて……………いや」

風に乗っている。

不思議で心許無い感覚に惣一は思わず中空でしりもちを付いた。

幽体時、宙に浮いていた状態とはまた異なる。まるで不可視の空飛ぶ絨毯に乗っているかのような感覚だった。

ゆっくりと地に下りる晶。惣一はそのままぺたりと地に尻を着けた。

「……………すげ……………まじに陰陽師」

「だから、陰陽師ではない」

声に見上げると、晶はいつのまに出したのか竜角を構え、対峙していた。

晶の身の丈以上の刃が日の光を受けて輝く。

「まさか、おまえが既に竜玉を継承していたとは……しかし、飯沼ならなんの不思議もない」

「……………いい、ぬま……………」

聞き慣れた名に、惣一はさらに視線を奥へ。

——剣先の方角に、柔らかそうな茶色の長い髪。

晶と対峙していた華奢な体の女が一人、柔らかな笑みを浮かべて立っていた。

「答える。何用だ、飯沼一華」

「私は……………会いに来たの。貴方達に」

長いのに重力を感じさせないふわふわの髪。高い腰に、すらっと伸びた細い手足。儚げな雰囲気、整った細面。その人並み外れた美しさから、県内で彼女を知らぬ男子学生はいないと言わしめる程の有名人物。

週一数十分、偶然を装って会っている惣一が密かに（？）憧れている女子高生、飯沼一華がそこに居た。

月曜の朝、バスの中でしか顔を合わせた事がない女の子。それが印場高校の校庭に存在している事に、惣一は非現実を感じていた。

「会いに、だと？ 飯沼が、一守に、か？」

険悪な空気にはっと我に返った惣一は、たまらず対峙する二人の少女の間に割って入る。

「ま、待った。何がなんだかさっぱりわかんないんだけど、とにかく待った。つか、知り合い？ 一守と、飯沼って」

惣一の言葉に、少し困った顔をする一華。

「御子柴君、おはよう。事故に遭ったんですって？ 大丈夫？」

「いや、そんなことはどうでもよくって……つつつか、なんでそのこと知ってんの？」

昨日の夕方だ。事故現場に偶然通りかかる以外、他校の生徒である一華に知る術はないだろう。

「なんでって」

きょとんと一華の大きな目が惣一を見上げた。

「いや……だからその、学校は山の上で飯沼は寮生で門限も厳しいから平日は街に出れないって、いつだったかバスで零してただろ？だから、どうして知ってたのかなって、そゆこと……」

目が合った瞬間、心臓が飛び跳ねて、しどろもどろになる。惣一は視線を逸らしつつ、ごによごによごによ……。――

「飯沼の竜駒巫覡だ。何を知っていても不思議ではない」

晶が不機嫌に口を挟む。声に視点を戻すといつの間に回りこんだのか自分の前に居て、剣先を一華の胸に突きつけているではないか。

「だからそんなこと言われても俺にはさっぱり意味わからん……つつつかおまえだおまえ。なんて物騒なもん掲げてんだよ、銃刀法違反で捕まるぞ！」

慌てて一華を庇う様に立つ惣一。僅かに剣先を下ろした晶がむつとした顔でそれに返した。

「昨夜も言っただけ。これは竜駒だ。違反ではない」

「立派にお縄だって。っていうか、なんでそんなに敵意むき出しにしてんだよ？わけがわからん」

「敵意ではない。私は飯沼を監視する者だ」

「かんしつて……なんだよそりゃあ。大体監視で、剣片手にやる事か？」

「彼女は私を上回る力を持っている。それ相応の心持で対峙せねば不意を突かれる」

口をあぐり開ける。え？　って事は、飯沼も、おんみょうじ…
…？

「だから、陰陽師ではないと言っているのに」

晶の声を無視して一華を振り返れば、こんな状況だと言うのに彼女は微笑んだままだ。

「……えつと。とりあえず移動しようか」

一華は、晶と惣一の顔を交互に視界に入れるとなんとも居心地悪そうに口を開いた。

「え？」

「……移動だと？　話はここでも出来る。白昼堂々と一守の前に姿を見せるなど、何を考えているか。先ずはそれに答えてからだ」

惣一の脇から顔を出し、一華に再び剣先を突きつける晶。

「ええ。答えてもいいのだけれど……」

一華は校舎を見上げた。

惣一と晶もそれに倣う。

校舎の窓から全校生徒が自分達を奇異な目で見下ろしていた。

「……ごめんなさい。少し恥ずかしいの」

「………異議なし」

「………」

印場高校の横、校舎に沿って真っ直ぐ伸びる細道を進むと、やっているのかどうか判別できない程古びた小さな食堂が姿を見せた。ぼろぼろの庇の上に、黒墨で「大衆食堂　じゃんぼ」と書かれた古い看板がかけられているのだが、面した道路の幅が狭い為、正面から見ると庇が邪魔して店名がわからない。入口の引き戸の木枠にかけられた『準備中』板が、かんかん風と風に揺れていた。

「おばちゃんちーっす」

ガラガラと、惣一が無遠慮にガラス戸を開け放った。

「ちょっと、表の看板見なかったのかい！　まだ準備中………つて、ミコじゃないか！　久しぶりに顔を見せたと思ったら………何やってんだい、まだ学校だろ」

暗い店内から怒鳴り声とともにどすどすと響き渡る足音。やがて異様に背の高いおばちゃんが惣一の前に立ちはだかった。

百八十センチはあるかも……な身長。体格が良く、肌は黒い。見の通りの黒人だが、黒い巻き剛毛を後ろでひつつめ、白い割烹着を纏った昭和スタイルを見事に着こなしている。

「早く学校にお戻り！　不良に出す飯はないよ！」

太い腕がにゅっと伸びて、惣一の両肩を掴むとぐるりと回れ右させた。

「そんな事言わないで………ちょっと訳ありでさっ　頼むよおばちゃん」

ぐいぐいと店の外に押し出されそうになるのを戸や壁に手をかけてなんとか抵抗する。

「訳ありだあ？ そんな言い訳がまかり通る程おばちゃんは寛大じゃないよ」

「行きつけの店とはここか。ミコシバ」

「趣のあるいいお店ね」

攻防に気づかないのか、惣一の腕の下を潜って暢気に店に足を踏み入れる二人の少女の姿を見たおばちゃん。

「あらあら」

先ほどの勢いはどこへやら。目を丸くして惣一の首根っこを掴むと自身に引き寄せた。

「いつて……！！」

首を傾げる少女二人を横目にひそひそと惣一に耳打ちする。

「あんなキレイな子とかわいらしい子連れて……昼間っから何してんだい全く！ 修羅場ならよそ行っておやりよ！」

「はあ！？ 何勘違いしてるんだよ、そんなんじゃないって！」

「訳ありって言ったじゃないか」

「違う違う誤解誤解。とにかく。訳ありだけど、そういうんじゃない。だから下貸してよ。外で立ち話じゃ目立つんだ」

「そりゃあ。ねえ……こんな時間にあんな子達と立ち話じゃ、目立つてしょうがないだろうけど……」

「だろ？ 頼むっておばちゃん、今日だけ！」

「ミコの『今日だけ』は聞き飽きた……けど、まあ、しょーがないねえ……！ 今日だけだよ」
「さっすがおばちゃん」

溜息交じりの「今日だけだよ」は、おばちゃんの口癖だ。惣一はパンチを繰り出す。おばちゃんは弱りきった顔で受け止める。「うつし」惣一は二人を振り返った。

「交渉成立。こっち」

言うや否や二人に背を向けて店の奥へと進む。

苦々しい表情で、しかし好奇心で満たされた目を向けてくるおばちゃんを横目に、晶と一華は惣一の背を追い、狭い通路を歩いた。

店内の通路の突き当たりは「といれ」と書かれた木札が下がる古い扉だった。惣一は右折し、地下に降りる暗い階段へ向かう。数段降りて突き当たりに現れた木の扉を開けると六畳の座敷があった。小さな玄関で靴を脱ぎつつ、ざらざらした壁を探り、探し当てた電気スイッチを入れて「座って」と促す。

女子二人が中を覗き込んだ。中央にちゃぶ台。奥に簡易なキッチン。壁には小さな食器棚と、錆びたロッカーが三つ並んでいる。部屋の角に十四インチのテレビが置いてあった。

「……御子柴君、ここって？」

「秘密基地」

「ひみつきちだと？ ではミコシバも先ほどの女性もどこかの結社の一員なのか！？」

食器棚から出した湯のみを吟味していた手をそのままに、大袈裟に驚く晶をはあつて顔で振り返る惣一。晶の表情から冗談を口にした訳ではない事を悟ると溜息を一つ。惣一はちゃぶ台に置いた急須に茶葉を入れつつ口を開く。

「じゃないって。ここは『じゃんぼ』の従業員用休憩室。俺ら子供ん時によくここで遊んでたんだよ。探偵ごつことか？ ほら、あれとか」

傍らの電気ポットに手を伸ばしながら、顎でロッカー横に置いてある段ボール箱を差した。中を覗き込むと、こまごましたオモチャがごちゃごちゃに入っている。ロボット。バッチ。おもちゃの腕時計、子供用システム手帳。縄跳び、手錠、お札……。丸まった古い

画用紙を晶が広げると、大小様々、よれよれのクレヨンの字で書かれた『探偵団規則』なるものが現れる。

「ふむ……」

途端難しい表情になって黙々と読みはじめる晶。本当変な奴だなあ。惣一は苦笑しつつ、晶の分のお茶を湯飲みに注いでちゃぶ台の上置いておく。

「素敵ね。私もよく作って遊んだわ。秘密基地。こんなに立派な所ではないけれど」

惣一から湯飲みを受け取る一華。

「飯沼も？ イメージないなあ……」

「そう？」

「家で読書とか。どっちかつつとインドイメージ……って、ごめん。悪い意味じゃなくて」

くすくすと笑う一華。

「そうね。読書は好き。けどお家、弟と妹がいたからなかなか読めなくて。今は弟も妹も大きくなっちゃったし、寮生活だから空き時間に好きなだけ読めるけれど……おかしいかな。少し、寂しいの」

楽しげな表情には弟や妹への愛情を感じる。

一華の笑い顔を眺めていると、惣一の脳裏に何か過ぎつて、その表情を強張らせた。

「どうかした？」

「ん、なんでもない」

ここに、一緒に飯沼と居たことがあるような……って、そんなわけないよな。飯沼の事知ったのって、高校入ってからだし。

自分の様子を神妙な面持ちで見つめる一華に、しかし惣一は気づいていない。

「ふむ、ふむ。……では先ほど会った大柄の女性が探偵団のボスなのだな」

何事かを呟いて、ぐびつと茶を飲み干す晶。「うまい」晶は目を輝かせて湯飲みを覗き込んだ。

「当然だつて。茶葉集めはおばちゃんの趣味。全国から取り寄せてるらしい……って、この事はいいいからさ」

晶から画用紙を取り上げ丸めてダンボールに放り込むと、惣一は二人に向き直った。

「ここでもら大丈夫だろ。話の続きしようぜ」

言い放ってから、しまったと惣一は慌てて付け加えた。先ほどまで子供のように目を丸くして室内を観察していた晶の目に敵意が戻ったのだ。

こんな狭い室内であんなでっかい剣を出されてはたまらない。

「一守、頼むからチャンバラは抜き！ おばちゃん今度こそ大騒ぎだつて。ここ追い出されたら行くところない。俺達制服だし、最悪補導されちまう」

「……………だが……………」

「御子柴君。一守さんが私を警戒するのは仕方のない事なの」

一華が晶を庇うように口を挟んだ。

「仕方のないことって……そんなら飯沼と一守はずっと前から顔を合わせればこんな警察沙汰を繰り返してきたの？」

惣一の言葉に、二人して首を横に振る。

「いいえ」

「会合以外で顔を合わせたのはこれが初めてだ」

「……会合？」

「そうだ。だからこそ警戒せずにはいられない」

「……話ついていけないんだけど。会合ってなんの？」

惣一に訊かれて、晶は一華を睨みながら沈黙する。警戒しつつ、なんと答えてよいのやら言葉を探しているようだった。

「昨日我が家に案内しただろう。一守は、白羽市にある白蛇神社の神主をやっている」

「あ？ ああ……それが？」

「飯沼はあの辺り一帯の地主だ」

「聖学に通っている訳だな。つまり会合ってのは……町内会的な集まりのことを言ってるのか」

惣一の視線を受けて、一華が苦笑した。

「うんまあ……時代錯誤のつまらない家なのだけど……とにかくね、『町内会』の後で飯沼家と一守家の会合があるの。私と一守さんはそこで何度か顔を合わせた事があるだけ。それも、本当に数回しか

ないの」

「じゃあ直接話したのは」

「ええ。今日がはじめて」

「お互いに刺激し合う事がわかっていいるから、用がある時は皆が揃う公式の場で発言するようにして、普段は接触しないようにしているのだけれど」と、一華が付け加えた所で晶の目が光った。

「ならば答えてもらおう。白昼堂々と一守の前に姿を見せたのは、どういいうつもりだったのだ。飯沼」

「はじめに言った通りよ。私は単純に、貴方達に会いにきたの」

「理由を訊いている」

「昨日、貴女のお兄さんに会いました」

「……………！？」

訊かれてさらっと口にした一華の言葉に、晶の様子が一変した。空気の変化に驚いて惣一は黒髪の間隙から横顔を覗く。

青白く、その表情は恐怖にも似た何かで歪んでいる。

「事が動き始めていると言う事。私も立場上接触せざるを得なくなりました」

「立場だと？」

「気づいているはず。私も貴女と同じ、竜駒を使役する巫覡だという事」

「……飯沼が持つ竜駒の神力は通常時の竜角を上回る。竜角以上の神力を放つ竜駒は唯一つ。竜玉だけだ」

「ええ。貴女が察している通り。私の持つ竜駒は『竜玉』です」

「正体を晒してまで『竜玉』が動かなければならぬ程の事態だと？」

「……ご家族から、何も聞いていないの？」

「どういう事だ？」

訪れる沈黙。

問い詰めるような晶の眼差しに、しかし一華は口元に片手を持ってきて何やら考え込んでいる。

「……いいか？ 結局、竜駒ってのはなんなんだ？ 一守が大きな剣のことを竜駒って呼んでたけど、そういう武器の事？」

惣一の声が重い空気を裂いた。

「竜駒とはこの地に伝わる伝説の再現」

「伝説う？」

間の抜けた顔で首を傾げる惣一。一華がそちらに向き直り、晶の言葉に付け加える。

「竜伝説って聞いたことはないかしら。印場と、それから白羽。この二つの土地は特に竜の神力による影響が強く出ていて、実際に空間の性質が乱れているの。だから神力の扱いに長けている一守家をお願いして、管理、調整してもらっているのだけど。昔話もあるでしょう？」

「昔話？ そんなの初めて聞いたけど」

「印場には確か……印場沼の、身を裂かれた黒い竜の話が伝わっているはずなのだけど。聞いたことない？」

「さっぱり」

「これを見るミコシバ」

晶がダンボールから取り出したのは、ぼろぼろの県内地図だ。
ああそれ確か、探偵団っぽい物をみんなで持ち寄ろうってなった時にご老公が家から持ってきた……、

「印場と白羽。両土地を塗り潰してみろ」

地図をちゃぶ台にバンと広げ、目の前に鉛筆を突きつけられる。
渋々受け取り、言われるがままに塗り潰していく惣一。
徐々に、晶の言わんとしている事が見えてきた。

「……………竜か」

印場と白羽を塗り潰してはつきりと浮き上がる竜の形。

「もう一匹、ここに潜んでいる」

晶が指したのは——印場と白羽、その近辺の町村にかかる県最大の湖沼、印場沼である。

沼の形も、言われてみれば確かに竜に見えなくもない。

「印場沼は、かつて白羽市にある浮之島を住処としていた白き竜が暴走し洪水を引き起こした時に出来た湖沼だと伝えられている。

おまけに、印場市にも身を裂かれた黒き竜の伝説が伝わっている。

つまり、太古、この辺りには白と黒、二体の竜神が存在したのだ」

「……………けどさ。これって見ようによっちゃ、なんにでも見れるじゃん。蛇とかさ。それに竜だのなんだのって……………単なる昔話だろ？」

「竜の存在を裏付ける存在がある」

「それって？」

「一つは竜駒。そして、飯沼だ」

「……………竜駒ってのはともかく、飯沼がどうしたんだよ？」

「飯沼は、白き竜と人の子の末裔。半神族だ」

「はんしんぞくう？」

晶の真面目な言葉に苦笑する惣一。

「ってそんな、御伽噺おとぎばなしみたいな話……」

同意を得ようと「なあ？」と一華を見遣ると、晶同様、彼女も真顔を崩さない。

「……………うそっしょ」

表情を引きつらせたまま固まる惣一。

「一守が管理する白蛇神社には白き竜が祀られている。その子孫たる飯沼家には百年周期で強大な神力を持つ者が生まれる」

「それが……飯沼だつてのか？」

「飯沼一華と、彼女の弟妹——飯沼修二、飯沼輪花は、この辺り一帯の土地の管理を任されている一守の監視対象だ。そして——」

晶は自分の左手首——数珠の腕輪を惣一に見せる。内、青色に染まっている玉を指した。

「竜駒。これは、白き竜とはまた別の、黒き竜の体から創られた神具だと言われている」

「……………」

「竜の体から創られた竜を守る為の神具を使う事を許された巫覡——竜駒巫覡は竜を守る為に在る」

——太古。

寺の僧から法華経を聴いた黒き竜は、その恩に報いるため、日照りに困る人間の為に雨を降らせた。

けれども日照りは神による人への天罰であつた。

竜は神の怒りに触れ、雨を降らせて七日目の朝、身を七つに分断されて地に落下した――

「竜駒とは、分断され地に落ちた竜の体より創られた神具。竜駒巫覡とは、竜駒を継承し使役する者。人を救った尊い竜を復活させ、空へ還す為に存在する」

「そんなの、信じられるかよ……」

「事実だ」

惣一の弱りきった顔を横目に茶を啜った後、きつぱりと言い放つ
晶。

「おまえも竜角を見ただろう。あれが現存しているという事はそういうことだ」

「……………見たっちゃ見たけど…………。なら、飯沼もあんな大きな剣を持ってるってのか？」

チラつと一華に視線をやる。

お茶を啜っていた一華は、湯飲みを手にしたまま、ふるふると首を振った。

「竜駒の形は一つ一つ違うわ」

「竜駒は七種類存在していると言われている」

「七種類も？」

「そうだ。黒き竜の逆鱗を用いて創られた『竜玉』、角から創られた『竜角』。他にも、翼、眼、牙、爪、尾、それぞれから創られた竜駒総てを揃えた時に竜は復活し天へ還ると言われている」

「なら集めればいい……つつつか、これまで集められなかったのが疑問なんだけど。たかだか七種類だろ？ しかも県内。一守みたいな霊能力者が持ってるってなると、大分絞られるんじゃないのか？」

「どの一族も手放す気がないのだ」

「……………は？」

「竜を復活させた巫覡は、竜と同等の力を手にすると言われている。故に竜駒を自身の手で集めたいと考える者も少なくない」

「争いになるって事か」

「嘆かわしい事だがな。それが現状だ。一守としては、いち早く竜を天へ還したい。他の巫覡と協力してもよいのだが、変な輩に竜と同等の力を持たれても厄介な訳だ」

言いながら、晶は一華を睨んだ。

なるほど。一守にとって、『半神族』らしい飯沼は『変な輩』の代表なのか。

でも、『半神族』ってのが本当なら飯沼は既に竜ってのと同等の力を手にしているんじゃない？

「その上、さらに力を蓄えようものなら最早適う者などこの世に存在しなくなるだろう」

って。しれっと読むなよ人の頭を……。ジト目で睨むが晶はさして気にしていないようだ。真顔で説明を続ける。

「下手に動くと己の竜駒を奪われてしまう。竜駒の神力は計り知れない。どの一族がどの竜駒を持ち、その竜駒がどんな神力を持っているのか。把握するまでは互いに動けない。長きに渡って不条理な均衡状態が続いているのが現状だ」

「だからおまえ、いきなり目の前に姿を見せた飯沼を警戒してたんだな。『竜角』が狙われてると思った訳だ」

「私は……一守さんの言うとおり、竜駒『竜玉』を所持しています。だけど……今回は忠告をする為に来ただけなの」

「忠告とは、兄の事だけか」

「それもあるのだけれど……御子柴君が今、幽体のままでいるのは、一守さんの力が関係しているのでしょうか」
「どうしてそれを……」

思わず声を上げてしまってから、はたと気づいた。飯沼が、一守と同じ陰陽師——じゃなくて、ふげき？——だって事は、俺が通常の状態じゃないって事くらい、わかって当たり前、って事……？
惣一の困惑の視線を受け、一瞬、寂しげな表情を返す一華。

「それは、竜玉の力か」

刺す様な声に晶に向き直ると、一華は神妙に頷いた。

「御子柴君に早く元の体に戻って欲しいの」
「なぜ、飯沼がミコシバの事を気にする？」
「危険だから」

終始変わらぬ穏やかな一華の表情に、僅かに責めるような、懇願するような色の混じった視線を受けて、晶は少しの驚きを覚えながら思案する。

「……………兄か」
「貴女のお兄さん、近い内——恐らく貴女の霊力が最も弱まる時に貴女に接触してくると思う。…………この意味、わかる？」

「……………ああ」
「このままじゃ御子柴君は巻き込まれてしまう。それを避けたいの」
「……………」

「接触って……。そもそも、都合が悪い日を狙って来るつつうんなら、先にこっちから会いに行けばいいだけだろ。居場所、把握してないのか？ 確か、数年前に家を出たって言ってたっけ？」

「……兄は今まで、修行の旅に出て行方がしなかった」
「しゅぎょうのたびって」

時代錯誤も甚だしい。引き攣った表情を返す惣一。しかし晶は難しい顔をして視線を落としていた。

「そ、それにしたってさ。兄貴が妹に会いに来るのを危険って言うのはどうだろう。だって兄弟だろ？ 本気で妹を襲うはずがない……」

「……竜を復活させた巫覡は、竜と同等の力を手にすると言われてる」

「……まさか。そんな事で実の家族と争うなんて……」

惣一の乾いた笑いに賛同する者はいない。

「私が貴方達に会いにきたのは、忠告と、御子柴君の事をお願いをするため。さもなければ」

一華は一旦置いて、澄んだ瞳で晶を——それから惣一を射た。

「断言する。死は避けられないと」

「ボスに頼みにいく」

一華の言葉の後、しばらくの間口を噤んで俯いていた晶が顔を上げると同時に発言。すくつとその場に立った。

「ボスって……、……おばちゃんの事が……」

意味深な発言の登場人物の正体を訊こうとして思いとどまった惣一。先程まで『探偵団規則』を熱心に読んでいた晶の姿を思い浮かべて溜息を吐いた。

「……で？ 頼みにつて、一体何を」

「電話を借りたい。至急、宮司に確かめたい件がある」

チラリと晶の大きなつり目は一華を見た。
そういえばと、惣一は思い出す。

『……ご家族から、何も聞いていないの？』

自分が竜駒について彼女達に問う前。一華は晶にこう尋ねていた。
竜駒という不思議な武器^{でんせつ}を狙っているらしい、行方の知れぬ兄の事を尋ねる気なのかもしれない。

「電話なら、別におばちゃん頼らなくても」

「よかったらこれを使って」

各々ポケットや鞆を漁り、同時に晶に携帯電話を差し出す惣一と

一華。思わず顔を見合わせてしまった。

「……………これは？」

目前にある二色の携帯を交互に見比べると、真顔のまま首を傾げる晶。

「……………って、まさかおまえ、携帯も知らないってんじゃない……………！」

思いつきり顔を歪めた惣一に対し、きょとんと、真っ直ぐな目を向ける。

見つめ（睨み）合う事、数秒。

「……………そのまさかなんだな、悪かった」

やがてガツクリと肩を落としあきらめたように呟くと、惣一は気を取り直して携帯の使い方を晶に説明した。

ふむふむと隣で懸命に聞き入る晶。彼女が二、三質問した後で、「あれ？」という変な声を惣一が発した。

「圏外になつてら」

「圏外とは？」と訊き返す晶の声を遮って一華の柔らかい声が惣一の耳に届く。

「地下だからかしら」

振り返ると、一華は手にしていた白い携帯を惣一に見せる。彼女の携帯の画面にも圏外と表示されていた。

「ミコシバ。圏外とは？」

再度説明を促す晶の不機嫌そうな顔に向き直る惣一。電波の届かぬらしいこの場では使用出来ない事を説明に付け加えると、

「では一時席を外す。ミコシバはここで少し待て」

晶は惣一の携帯を手に、きびきびと歩いて靴を履き、その場を出て行った。

「携帯も知らないなんて。つとに変な奴」

見えなくなつた小さな背中になぞつと悪態吐くと、一華が隣でくすくすと笑つた。

「仲がいいのね」

「……そんな事もないけど。一守とは昨日会つたばかりだし」

「ええ、そう聞いたわ。だけど、彼女と御子柴君ってなんというか……まるで兄妹みたい」

楽しげな一華の様子に、弱りきつた表情で後頭部を掻く惣一。

惣一が初めて晶に会つたのは昨日の夕方の事だが、思えばお互い、最初から初対面という感じはなかった。こんなにも長い間、一人の女子と行動を共にした事も、惣一にとっては初めての経験だ。

「……特殊な状況だから……かも。一守も変な奴だし」

話し方男っぽいだろうか？ と同意を求めれば、一華は苦笑する。

「一守さんの事。ちゃんと女の子扱いしてるわよ、御子柴君」

「え？」

一華に言われて、どことなく後ろめたい感じを受けた。
言われて思い返してみる。飯沼の前で俺、そんな行動とったっけ
な？ えつと……。

「一守さんも貴方の事、信頼しているようだし」

思考を巡らせている途中で一華が、なんだか異様に胸のざわつく
事を言った。

「信頼つて……だから俺、一守と会ったのは昨日が初めてで……」

「それこそ、すごい事よ。私と話しているのを見て、気づかなかった？ 一守さん、すごく警戒心が強い。ヒトにはあまり、心を許
してくれないの」

「……そりゃ飯沼と一守は、なんというか……あれだろ？ さ
つきの話……竜駒巫覡つてやつ？ それだって特殊な状況下なんだ
からさ」

「そうね」と、どこか寂しげに微笑む一華。視界に入れて、さら
に惣一の胸がざわついた。焦燥感が一気に押し寄せて、何かを言わ
なくちゃと自身を急かした。

「どっちかつつと、飯沼の方が付き合い長いよ、俺」

言われた一華は不思議そうな表情で、真意を問うように惣一を見
返した。

何変な事、言ってるんだろう俺。思いながらも口が止まらない。
今のままでは届かない気がして、前のめりになって彼女に訴えた。

「仲が良かったなら、俺は………！」

一華の表情は、どんなのだった好きだ。

例えば今、少し緊張の走ったその顔も、ちょっと前の不思議そうな顔も。楽しげに笑う表情も、凜とした面差しも。さっきの——瞬間垣間見た寂しげな笑顔でさえ、綺麗だと見とれてしまった。ただ、あの顔はさせてはいけなかった。させたくなかった。

「俺は、飯沼のが——」

今までで一番近い距離に居る一華。発した言葉に、自分を映す大きな瞳が揺らぐ。それだけで、どうにかなってしまいそうな衝動。惣一は、ぐっと堪える。

「……御子柴君、私」

目の唇が、何かを言いかけて薄く開かれたところで、

「ミコシバ。せっかく借りたのだが、このケータイとやら、壊れてるぞ」

ばたんと音が響いたかと思うと、無遠慮でふてぶてしい晶の聲が飛び込んできて二人の心臓を大きく刺激した。

特に惣一は、気づけば一華から数メートル離れた場所に着地していた。

「え、あ、こ、壊れてるだって!? そ、そんな訳ないじゃないかあ?」

異様に引きつった顔。燃えるように熱い頬。胸を突き破るほど激

しく脈打つ心臓。語尾がエナリ君になってしまっている事を冷静に観察し、ああ俺やべえマジ格好悪いと心の奥底で突っ伏す惣一。

惣一や一華の様子に大きく首を傾げながらも、晶は靴を脱ぐなり真っ直ぐに惣一の下へやってきて、メタルブラックの携帯電話をずいっと目前に突きつけた。

「言われた通り、上で電話をかけたのだが、繋がらない」

「そ、そんなはずは……店内が圏外になってるとか？」

「この敷地内がケンガイになる事はないそうだ。壊れているのではないかとは、ボスが発した言葉だ」

「そんなばかな」

惣一が怪訝そうな声を上げた時には、平静を取り戻していた一華が晶の元に駆け寄り、真顔で携帯電話を見下ろしていた。

次いで、むつつり顔の晶と、いまだ情けない表情を浮かべる惣一の目を直視する。

「外に出ましょう」

「おや。あんたたち。やっと学校に戻るのかい」

ぞろぞろと一階に戻ると食欲をそそる香りが胃を刺激すると同時に、おばちゃんの野太い声が耳を劈いた。

「ああ。ありがとーおばちゃん」

「ありがとうございます」

「世話になった、ボス。礼を言う」

口を開くと、三者三様にペコリと頭を下げる。

おばちゃんは満足そうに笑みを浮かべて返した。

「またいつでも。今度はゆっくり食べにおいで！」

「時に、飯沼。これまでずっと気配を探っていたのだが一向に感知できない。おまえ、いつものうるさい護衛はどうした」

店を出るなり一華を振り返る怪訝そうな黒い瞳。

ぎよっとして惣一も一華を見た。

「ごえい？ 護衛なんて連れてるのか？ 飯沼」

「え、ええ……護衛というよりは、お目付け役のような感じなのだけど」

大袈裟だと苦笑を返す一華。むっとした様子の晶が惣一に答える。

「飯沼本家の要人には一人ずつ護衛が付く」

「それって、一守の事？ 監視してるって言ってたよな」

「一守の役目は監視であって護衛ではない。飯沼の護衛は確か……」

「出歩く事を伝えていないし、今は学校じゃないかしら」

「竜玉を持つ者が、無用心な……」

「ごめんなさい」

背の低い晶の睨みに、素直に頭を下げる一華。

なんとなく空気が重い事を感じた惣一は努めて明るい声を発する。

「護衛が学校なんて行ってるの？ 護衛育成学校なんてのがあ
るわけ？」

「うっん。普通の公立学校よ。学業を疎かにしてはいけない
って、父様が」

「へえ……」

学校で勉強してる護衛……？ 一体どんな奴なんだろう。断然興
味がわいてきた。学校通ってるって事は、俺等と同じ年位か年下か
……… まさか俺等の学校に居るんじゃないだろうな。

「……… っていうかさ。なんか異常に暖かくない？ 店に入る前とは
大違いだ」

木枯らしの吹く季節。日差しの弱さはここ最近のものと変わらな
いのに、何故か寒さをまるで感じない。ああ、そうか。冷たい北風
が止んでいるんだと思い至った時に、晶の鋭い声が飛んだ。

「ミコシバ、水晶に入れ」

「は？ なんだよいきなり……」

「私は飯沼——もとい、竜玉を護衛せねばならない。おまえが居ては足手まといの何者でもない」

「……おまえが飯沼を護るのか？」

あんなに嫌っていたのに。惣一がマジマジと晶の顔を見ると、自分とて不本意だと言わんばかりの表情を返す。

「竜玉を護る事は本来、竜駒巫覡共通の使命。何よりも最優先される。竜玉なくして竜復活は成り立たない。竜玉は竜駒であると同時に護るべき最大の宝だ」

「そうなの……」

惣一の視線に、一華は居心地悪そうに苦笑した。

「竜玉は、再光臨する時に竜が目印とする竜駒らしいの。他の竜駒を呼び寄せる性質も持たらしいし」

「て、それって大変じゃないか……」

それが真実なら竜玉は、竜の復活を願う者や竜駒を狙う者にとって真つ先に手に入れておきたい竜駒という事になる。

つまり一華は四六時中、晶のような不思議な力を持つ者に狙われていても可笑しくはない訳だ。護衛が要るってのはそういう事か……。

「竜玉を持つ輩は余程の事のない限りは自ら正体を明かさない。白き竜の末裔である飯沼が竜玉を所持している事は周知の事実ではあるが、個人の特定までは出来ない。故に飯沼の要人や本家屋敷には、国の主導する心霊対策機関から派遣された陰陽師の精鋭が付く。護衛は常に要人と共に在る事を義務付けられているはずなのだが……まあ、あ奴ならばやりかねない」

腕を組み語る晶は、言葉尻と共に盛大なため息を吐いた。……へえ。一守もこんな顔するんだ。惣一は一華の護衛とやらに興味を抱いた。

「一守も知ってる奴なのか？」

「会合で会っている。あ奴が飯沼の護衛となる以前にも共に修行した事がある。腕がいいのは認めるが、性格に難がある」

「……あ、そうなんだ」

一守に「性格に難あり」と称される護衛で……。考えている事がわかったのか、晶の厳しい黒瞳が惣一を一瞥した。

「とにかくミコシバは早く水晶へ。空気が妙だ」

「けど、狙われている飯沼は野ざらしだろ？ 俺だけ隠れるわけにはいかない」

「自覚しろ。おまえが居ると足手まといだ」

「ひっでえ」

冷たく言い放つ晶に口を尖らせると、一華が間に立った。

「一守さん大丈夫。御子柴君は私が護るから」

それ、俺が言いたかったセリフ……。情けない顔の惣一の前で、厳しい顔つきの晶が開口するより早く、

「それに御子柴君は……」

神妙な面持ちをして言いよんだ一華が、突如、厳しい顔つきで辺りを見回した。

「……御子柴君！」

ほとんど同時に、晶が竜角を出すのが見えて、は？ と眉間に皺を寄せた惣一の首に何かが絡みついた。

冷たい感触にぎくつとした時には、嫌に悪臭を放つ骨ばったソレは猛烈な力で首を締め上げてきた。

瞬間、息が止まる。

「……………っ は……………！」

首が潰れると思った時に唐突に開放され、惣一はその場に崩れて激しく咳き込んだ。まだ息が出来ない。

「大丈夫！？」

駆け寄った一華が背中を摩る。彼女を安心させたくて声を上げようとして、惣一はさらに咳き込んだ。

「無理しちゃだめ」

触れられた背中から、清涼な空気が流れ込んでくる。マイナスイオンでこんな感じかな。惣一は落ち着くまで潤んだ視界で地を睨みながらこんな事を感じていた。

「……………るい、飯沼、もう大丈夫だから。てか、一体何が……………」

僅かに身を起こす。振り返った惣一が目にした物はまさしくゲームの世界のそれだった。

「……なんだありや……」

小さな黒髪の少女が銀に光る刃を振り回して、ゾンビの群れをばったばったとなぎ倒している。

なんて現実味のない光景なんだろう。啞然としながらも、惣一は晶の動きに目を釘付けられた。

「わからないの。御子柴君が襲われて、振り返った時には死霊で溢れてた」

手前のゾンビを大きな青白い刃で一刀両断。その横で、小さな体に今にも襲い掛かるうとしていたゾンビを返し刃で一閃。覆い被さるように倒れてくる体を豪快に蹴倒す。

「しりようて……あのゾンビの群れの事？」

仰向けに倒れた腐った肉塊が消失してゆくのを見届けることなく、迫るゾンビを袈裟懸けに切る。短い黒髪が舞い、振り向きざまに背後にいたゾンビを一閃した。

「わかっているのは、いつの間にか空間が完全に閉ざされていた事と、そのために氣の流れが滞っているという事」

あんなに大きな刃を、まるで舞うように軽やかに操る晶の姿から目が放せない。……そういえば、最初に竜角に刺された時も、ゲームのような、という感じを覚えたっけ。惣一が暢気にそんな事を思うほど、晶の動きは軽やかで、圧倒的だった。

が、如何せん数が数。死霊の数は無限のように増える。狭い道幅を埋め尽くし、消された死霊の隙間を埋めようと前へ前へ単純な前進を続ける。

晶はその群れの中に単身突っ込んで、やがてその舞も見えなくな
った。

「つて、なんでアイツ自分から……！」

惣一は晶の後を追おうと立ち上がりかけ、後ろから制服の裾を引
っ張られる。

「一守さん！」

一華はいつになく強い瞳で戦況を見守っていた。

「……手を出すな！ 護りに集中しろ！」

鋭い高音が群れの中心から聞こえてきたかと思えば、宙から降り
る雷のような蒼白い閃光。

瞬間、轟音と共に視界全てが真っ白になった。

「……なんだ！？」

目に痛い程膨大な光量。惣一は両腕で視界を遮りながら、一華を
庇うように前に出る。

「……一守！？ 大丈夫なのか！？」

「もう終わった」

驚くほど近くで晶の声がして、は？ と腕を下ろした。

未だ余韻が残る視界。瞬きを繰り返してから徐々に回復してきた
視力で改めてその光景を捉える。今の衝撃を受けたためか、道をふ
さいでいた死霊は全て消失し視界は意外な程に開けていた。小さな

石ころサイズの肉塊が転々と落ちる細道を、竜角を従えた晶が大腿でこちらに向かって歩いてくる。

「……って、おまえ……！」

平然と歩いてくる晶の姿に、なんと声をかけてよいかわからない惣一。口をパクパクさせる。晶はそんな惣一の様子を怪訝そうに見上げながら隣で足を止めた。

よく見ると、平然としているようで、確かに戦いの後が見られた所々破れた生地。裂かれたスカートの裾。白い制服が飛び散った肉塊で汚れている。頬、手、足、露出した肌には大小さまざまな引つかき傷があちらこちらに見られた。

「一守……大丈夫か？」

「問題ない」

「一守さん」

一華が小走りに近づくと、晶は露骨に顔を歪ませた。

「化膿するから」

問答無用。不快オーラを受け流して、一華は血の滲む晶の頬にそっと片手で触れる。

「飯沼？ 何して……」

一華の翳した手から、白い光が漏れるのが見てとれて、惣一は息を呑んだ。

その間ほんの数秒。一華が触れた傷は完治していた。傷など、はじめからなかったかのように。

「……治癒能力って奴……？」

むすつと気難しい表情を浮かべる晶の手を取り、手を翳す一華。その背中に声をかけると、

「竜玉が否定したものは全て消える」

晶が代弁した。

「……きえる？」

馬鹿みたいに、鸚鵡返しに問いかける。

「この空間は異常だ。密閉され空気は淀んだ上、呪で汚染されている。本来なら息をするのも難しい程だ。先程まで、私は呼吸をなるべく控えていた」

「俺、なんともないけど」

「言っただろう。竜玉——飯沼一華が否定したのだ」
「……………」

惣一の視線に気づいたのか、一華がそちらを緩く振り返った。やはり寂しげな笑顔を見せた。

「理解できたでしょう。一守さんが、私を警戒する理由」
「……まあ。さっき飯沼が俺を止めた理由も解ったよ」

息が出来ない空間に、策なしに飛び込もうとしてたんだな、俺。あのまま突っ走っていたら訳もわからぬ息苦しさにへたり込んだ上、ゾンビどもにやられて無駄死に……もとい、阿呆丸出だった訳だ。

礼を言つと、「いいの」と、一華が首を振った。

「御子柴君、知らなかったんだし。それにあの状況では、御子柴君が一寸さんを心配して飛び出すのも当然というか……無理もないもの」

「なんだそれは」

目を丸くする晶。

「ゾンビの中に突っ込んでった一寸を助けに行こうとしたんだよ……」

ばつが悪そうに惣一が答えると、晶は世にも呆れ返った目を向けた。つかつかと目前に立ち、息を大きく吸い、たつぷりと間をとつて、

「……………馬鹿だろうミコシバは」

力のない目で惣一を見上げつつ、力いっぱい罵った。

「はあ？　なんだよその言い草は！　折角人が心配して……」
「そんなものはいらない」

強い瞳できつぱりとそう告げられては返す言葉もない。惣一がぐつと言い詰まったところでさらにぴしゃりと言つてのける。

「言つたはずだ。足手まといだと」

「そりゃ、何も出来なかったかもしれないけどさ、一人よりは二人の方が心強いだろ普通……！」

「それは助けに来る者にもよる」

「馬鹿にすんな！ 俺だつて男だぞ！？ おまけに今は半分幽霊だから体が軽いし。単純に腕力だつておまえよりは数倍強い……！」
「——では聞くが。幽体が実体化した程度で何が出来るのだ？ 死霊の浄化か？ 飯沼のようにバリアのようなものを張れるのか？」
「……！ た、盾くらいには……！」

「まことに残念だなミコシバ。目の前で棒立ちされては竜角も邪魔で仕方ないだろう。怒りで真紅に染まる刃が死霊を切る前にミコシバをぶった切つてその場に捨て置くやもしれん。いや、まことに残念だが」

「竜角操つてんのおまえだろ……！」

続く口論の中、治療を終えたか一華がその場にすっと立ち上がった。

「一守さん、死霊がどこから発生していたか判る？」

口論をやめた二人が、同時に一華を振り返る。

「空間が閉じたままだし。これで終わりとは到底思えないの」

一華の神妙な面持ちに、晶はコクリと頷いた。

「死霊の中に死霊使いは居なかった。死霊が沸いて出ていたのはこの細道の向こう——北東だ。確認後に竜角で一帯を浄化し、むささび守に調査に行つてもらつたのだが……遅いな」

「相手を見失つたのかも」

「であればすぐにでも帰還する」

「……やられちまつたとか？」

「むささび守に何かあったのであれば、私に伝わる」

言われて惣一は今朝の事を思い出した。自分が受けた傷と同じ箇所、晶も傷を負っていた。つまりは、あれと同じという訳か……。そこまで考えてから、はっと気づいて晶を見る。案の定、黒髪の間から覗く彼女の白い首に痣のようなものを見つけた。

これでは本当に、いざという時、自分はこの子の盾にもならないではないか。

「……なあ、一守。その事なだけどさ」

惣一が言いかけた事が伝わったのか、不機嫌な面の晶が大きく開口した。その時だった。

大衆食堂じゃんばから悲鳴が上がったのである。

「おばちゃんの声だ!!」

叫ぶや否や店に向かって駆け出す惣一。幽体が実体化しただけの体が軽いのか、その背中は風のような速度で店内へ消えた。

「ミコ……!?!」

「御子柴君!!」

制そうと声を張り上げた晶の横をすり抜けて、一華が惣一の後を追いかけていく。

「馬鹿か……!」

舌打ちをして彼女達の後を追う。罨である事は明らかだというのに、ミコシバはともかく竜玉が飛び込むなんて無謀すぎる。何か考え合つての事か……いや。飯沼のあの様子、とてもそうは見えなかった。

「いやー、本当。ああ見えてお嬢、結構猪突猛進つつうか。考えなしだかんね」

突如背後から聞こえてきた場違いな程暢気な男の声。足を止めた晶は思いつきり眉を潜めて振り返った。

「おばちゃん!」

ガラス戸を開け放ち、慌てて飛び込んだ店内には異様な静けさが漂っていた。

人の気配も、死霊の気配すらない。数分前——店を出るまでは煌々と点いていた照明が何故か全て消え、窓の無い店内に闇が満ちていた。

「おばちゃん!? 無事か!？」

足音が響くのと同時に、店内に自分の影が伸びる。手探りで壁を伝いスイッチを見つけると、店内に光が戻った。

カウンター越しに厨房を覗く。と、視界の端に、床に落ちた白い布が見えた。

「おばちゃん!！」

手をかけカウンターを飛び越える。危なげなくふわりと着地すると慌てて白い布に——倒れているおばちゃんに駆け寄った。抱き起こすとおばちゃんの血の気の引いた顔が視界に入ってギクつとなった。

「おばちゃん!? おい、しっかりしろって……おばちゃん!」

叫んで揺すり動かすが反応が無い。……と、とりあえず落ち着け、落ち着けて俺……! 惣一は、加速していく鼓動を無理やり押さえつける。うん、よし。脈はある。息も……してる。死んでないよ、おばちゃん、死んでなんかない……って事は……、

「生きてる……、よかった……」

緊張が解ける。

おばちゃんを抱えたまま、ほーっと脱力した。その時だった。

「御子柴君！ 伏せて……！！」

開けっ放しの戸口から一華の声が響いた。え？ と振り返ろうとした惣一の首元を何かが掠める。視界に捉えようとしたが、背後を走った猛烈な威圧感に形容を瞬時に掻き消されて出来た、不自然に漂う大量の黒い霧しか目にする事が出来なかった。

足音と共にすりりとした肢体が現れる。

「大丈夫！？」

一華の必死の表情に、また彼女が助けてくれたんだという事に惣一は気づいた。

惣一の姿にほっと安堵の笑みを漏らした一華、横たわるおばちゃんを目にして再び表情をきつくした。

「……おばさんは……！？」

駆け寄る一華。未だ呆然としていた惣一がのろのと口を開き答える前に、一華はおばちゃんの脈をとって息をついた。

「よかった……どこにも怪我はないし、異常も見られない。気絶しているだけみたい……」

そこでようやく惣一の様子に気づき、「ごめんなさい」と少し強張った顔を見せた。

「死霊が一体お店に入り込んでいたみたい。気を配ってはいたのだ

けれど……」

「い、いや……別に、飯沼が謝る事じゃないだろ」

「でも、無関係の人たちを巻き込んだのは事実なもの」

「巻き込む？」

「竜駒の奪い合いに」

冷静な対応。重い言葉。彼女が放った圧倒的で非現実な力。……

飯沼は、一守と同じなんだ。この場において自分だけが、状況についていけずにうろたえてオタオタするばかりで。彼女達はまるで違う。はつきりと感じた惣一は、抱いていた違和感を口にした。

「……飯沼ってさ。今までずっとこんな争いに巻き込まれていたのか？」

一瞬、一層表情を強張らせた一華。少しだけ俯き、伏し目がちに
おばちゃんを見る。

「言いたくないんだったら、いいんだけどさ」

「……ごめんなさい」

「いって。会って結構経つのに、俺、飯沼の事何も知らなかったから少しびっくりした」

「……………」

「こんな大変な状況だったのに、察してやれなかったなってさ。少し反省してたんだ」

惣一の言葉に驚いたように顔を上げる一華。

「反省？ なぜ？」

「なんでって……」

問われて後頭部を掻く惣一。何かに悩んでたんなら、すぐに自分に話してほしかったとか。自分が支えてやりたいとか。……頼ってほしいとか。そんな幼稚な理由だったりするんだけど。……実際にそうされても役に立たなかったんだろうけどさ。

でも、それって、本人に言うべき事じゃないような気がする。俺が、飯沼にとって頼れる存在じゃ無かったって事だしな。責めるべきは自分だ。うん。第一、俺、飯沼にとって友達でしかないし。それに……なんか格好悪すぎる。

「……んつと。俺、昔っから気が利かないとか、空気読めとかさ。言われるから」

「それって、恋人に？」

「彼女なんて居た事ないって」

大慌てで両手を振る惣一の様子に少しだけ笑みを浮かべた一華。ほっとする惣一だったが、その表情もすぐに掻き消えてしまう。

「……反省するのは御子柴君じゃなくて、私の方」

小さな小さな、どこか懺悔のような印象を抱かせる呟き。

「……さっきの巻き込んだってやつ？ 飯沼のせいじゃないだろ。

仕掛ける方が悪いんだし、飯沼は被害者じゃないか」

「そんなことない」

「………飯沼？」

抑えた口調に、彼女の持つ苦悩が僅かに滲み出た。感じ取った惣一は伺うように一華の顔を覗き込む。

しかし、顔を上げた一華は無表情で。静寂の光を帯びた瞳がただ惣一を見返した。

「……訊かないよね。御子柴君」

「なにを？」

「……その、わたしが竜駒巫覡だって事や、半神族だって事とか」

「訊いてほしいの？」

「そういうわけじゃないけど……御子柴君、全然変わらないから疑問に思っただけ。いままで普通のふりして話してたのに……気持ち悪くないの？」

「気持ち悪い？」

「普通のヒトと違うから」

「あゝ……」

後頭部を掻いた。

驚いていないといえば嘘になる。実際びびったし、たった今、自分を助けた力だって、間近で感じて……正直、なんだか異様に恐くなった。

——竜玉が否定したものは全て消える

漠然と受け止めていた晶の言葉が、あの時、一気に現実味を帯びたから。

「……正直、よくわからないんだ。頭がついてってないつつうか」

なんとか言葉を搾り出す、と。一華が取り繕うように苦笑した。

「……そうよね」

なんでもないように笑って、一華は再び、おばちゃんの体を診る。

「ごめんなさい御子柴君、気にしないで」

その様子は既に普段の一華のもので、浮かべている笑顔も、惣一が見てきたいつもの一華の表情で。だからこそ惣一は、異様に胸が軋んだ。

おばちゃんを診る白い手が、僅かに震えていた。

「飯沼」

「何？」

いつものように答える。さらっと流れる髪。細い肩。折れそうな印象を感じて、抱きしめたくなった。

「御子柴君？」

不思議そうな瞳に見つめられ、我に返る。

「い、いや……その、考えてみたらさ。確かにびっくりはしてるけど、今まで見てきた飯沼が変わる訳じゃないよなって」

目を泳がせつつ、一華の反応を見る。きょとんとした瞳が、真意を問いたげに惣一を見ていた。

「うん。考えてみたら、不思議な力持ってたってさ。それは前からなんだろうし、単に俺が知らなかったただけだし、今までと変わるわけじゃないし。飯沼が抱えてる全部が今の飯沼を作ってるんなら、別に気にする必要ないかなって」

「……御子柴君」

「ほら俺、今の飯沼……嫌いじゃないし、さ」

……やばい。

惣一はぐるりと首ごと視線を逸らした。

……俺って奴は。なんでこう、なんでもかんでも勢い任せに吐き出してしまうんだろう……！ 飯沼の顔が恥ずかしくて見れなくなってきたつつか。絶対顔、赤いだろコレ。告るまでもなく、バレバレじゃないか。

「……お、おばちゃん！ いつまでもこんなところに寝かしておけないよな。休憩室に運ぶよ」

居たたまれなくなつて、おばちゃんを抱えてこの場を立ち去ろうと……した。
が。

「……………ぐ……………！？」

……ごめん、おばちゃん。俺、おばちゃんナメてた。

やつぱ、すんげえ……………重い。確かにデカいけど、予想遥かに上回るつつか……………一体何キロあるんだおばちゃんつつか……………！
けど……………引っ込みつかねえ……………！

一華の視線を背後に感じつつ、ひっくり返りそうになりながらも、ふんじばってなんとか中腰の状態からぶるぶると全力で立ち上がる。

「御子柴君、大丈夫？」

「……だ、いじよぶ……………！」

手を貸そうとする一華を制して、ゆっくりゆっくり一歩ずつ前進する。ようやく厨房を脱し、よろよろと通路を通り、地下に降りる階段の前まで来た、その時、

「ありがとう」

背中に声をかけられた。

「え？」となつて首だけ振り返る。

途中までついてきていた一華が、通路の中央に立つて微笑んでいた。

「ありがとう、御子柴君。私も……」

彼女の泣き笑いの表情と、取り巻く光景を見た瞬間、恥も重さも何もかも一気に吹っ飛んだ。

「……飯沼!!」

惣一の声にはつとして一華が振り返る——その前に。

見たことのない長髪長身の男が、一華の細い腕を捻り上げた。

「……っ」

「いけませんね。竜玉ともあろう方がそんな表情かおを見せては」

漆黒の長髪を後ろで一つにまとめ、黒い服をすらっと着こなしたどこか上品な雰囲気을 匂わせる男が、整った顔に穏やかな微笑を浮かべながら、一華の体を自身に引き寄せる。

「貴女の全ては、竜に捧げるべきものでしょうに」

よく通る男の声が、苦痛に表情を歪ませた一華の耳元を刺激した。

「……誰だ、あんた……!!」

声を荒げた惣一を、男は柔和な表情を浮かべたまま見る。
やや釣り気味の切れ長の黒瞳。冷たい色に捉えられた瞬間、惣一の脳裏にこれまでの異常な光景が過ぎった。

「……ゾンビ、あんたの仕業なのか!？」

「死霊の事ですか。まあ、私のせいといえれば私のせいになるのでしようが……私はただ、この鏡を反転させただけなのですよ」

ニコリと笑って、黒髪の男はジャケットの内側から掌サイズの物体を取り出した。

八角形の中心に、どす黒い何かを漂わせる丸鏡が付いている。

「……竜眼……!？」

横目で捉えた一華の呟きに、黒髪の男は愉快気に笑む。

「ええ。昨晚、貴女を手に入れる為、竜駒巫覡より譲り受けた竜駒しなです。結界を張る際に竜眼を反転させてみたら、結界内の陰陽のバランスが乱れ、気が淀み、忽ち死霊で溢れました。やはり竜駒はすばらしい。まさかこのような効果があるうとは」

「やはり貴方だったのね。……元に戻しなさい」

「嫌だと言ったら」

「貴方を止めます」

一華の言い放った言葉に、声を上げて朗らかに笑う男。

「どうやって。幾ら竜玉とて、同じ竜駒を消す事はできないでしょう。それとも私を消すつもりですか? ……否。貴女にそんな覚悟はない」

「……………！」

睨む一華の頬に、優しく手を添える。

「そんな表情も、また愛おしい」

男は一華の顎を上げ、自身の顔を近づけた。

「飯沼を放せ！」

怒り交じりの声に、触れるか触れないかの距離で止まった男の唇は再び口角を上げる。

「……貴方には、全てが終わった後、たつぷり身の程を思い知らせてから消えてもらおうと思っていたのですが」

「思い知らせるだ？」

「ええ。これほどの宝玉。愛でるのも仕方がない。しかし、決して貴方が欲しているものではない」

「意味わかんねーし。大体、さつきから玉、玉ってな……一体何の話をしてんだよ！」

おばちゃんの体を椅子に座らせて立ち上がった惣一は、男を睨んで吐き捨てる。

「そいつは玉なんて名じゃない！ 飯沼ってんだ！！」

怒り任せに、思いっきり地を蹴った。

身体が弾丸のように飛び、一気に接近する。

「だめ……………！」

一華の制する声。構わず、未だ笑みを浮かべたままの無防備な長身の男に、叩き込もうと右拳を振り上げた。

いける……！ 確信し、振り下ろそうとした瞬間、

「御子柴君！！」

一華の悲鳴を、遠くで聞いた。
何が起こったのかわからない。

正面に猛烈な圧力を感じた刹那、背中から全身へ強烈な痛みが走った。

「御子柴君！！」

「といれ」と書かれた木札が足元に落ちた。その音で、飛びそうだった意識が戻る。木札を視界に入れて、ようやく状況を把握する。どうやら、男の立っている出入り口付近から突き当たりにあった扉まで、真っ直ぐに吹き飛ばされたらしかった。

「……………ンなる……………！」

よろよると立ち上がる。

男は、整った眉目を僅かに歪ませた。

「直撃を受けて立てるのですか……成る程」

声に視点を上げる。長身の男は、一体どこから取り出したのか巨大な杖を持っていた。

先端と末端に見事な装飾。華奢な造りのいやに湾曲した銀色の杖は長身の男の背を遥かに上回っている。

「貴方を傷つけるべきで無い事は理解しているつもりですが……やはり目障りです。事が済むまでせめて黙っていてもらいましょうか」

言つて、男が杖の先端を惣一に向けた。瞬間、杖に青色に光る紋様が浮かぶ。またさっきの衝撃波か……！？ 惣一は身構えた。体を動かす度に全身がぴきぴき痛む。だが動けない程ではない。それに、今の自分は幽体。恐ろしく身軽だ。ひょっとしたら、さっきのにも対応できるかもしれない。できなければ……一華が危ない。意地でも……！

ふらつく足に気合を入れる。と、一華の発した声に思考を吹き飛ばされた。

「……やめて、一守君！」

惣一は状況を忘れて、大きく動揺を示す。

「いちもり、だつて……！？」

惣一の反応に、「おや」と男。まるで新しいおもちゃを見つけた子供のような笑みを浮かべ、やけに楽しげな様子で杖を降ろした。

「そつえば、自己紹介がまだでしたね」
「不要だ」

冷徹に響く高い音。

同時に、高速で回転しながら飛んできた何かが男の手を弾いた。男が一瞬、一華を放した。迷わず惣一は地を蹴る。

すぐに男は一華を捕らえようとするが第二波に気をとられてその手は僅かに届かなかった。惣一が、走り寄る一華を背中に隠した。

「無事か、飯沼!？」

「ええ……御子柴君こそ、大丈夫!？」

「俺は平気、けど……!」

一瞬振り返って一華やおばちゃんの様子を確認する。一華に変わった様子はないし、おばちゃんは椅子に寝かせたまま微動だにしない。大丈夫そうだ。

正面に向き直ると、目前に竜角を構えた晶の背中があつた。

「一守」

惣一の声には反応しない。晶は目の前で穏やかな笑みを浮かべて佇む男をただ睨んでいる。

「結界を斬られた感じはしなかったけど。という事は、もう一人は竜玉の護衛君かな」

「当つたり。正解者に拍手」

軽快な声の主が、店の出入り口の前で、宙を走る二つの物体をぱしっと受け止める。

「そつちもやってくれるじゃん。いきなりお嬢の気が察知できなかった時にはさすがの俺っちも焦ったさ」

「……って、お、おまえ……!？」

見覚えのありすぎる姿に、惣一は目を丸くし、口をぱくぱくさせた。

「よ。ニコちゃん。さっきぶり」

戸口に凭れかかりながら、外側三分の一に刃を付けた二つの輪っかをヒラヒラ振って見せたのは、水戸光國だ。

「水戸君！」

惣一の後ろで声を上げた一華に苦笑を浮かべる光國。

「相変わらず、護衛無視して無茶してくれんなあ。お嬢」
「ごめんなさい、けれど……！」

一華の瞳はそこまで言うのと、静かに佇む男を射た。

「水戸から話は聞いた。空間閉鎖したのは竜眼。死霊を操っていたのは竜爪。手にしているのは……飛竜か」

男を視界に捉えたまま、油断なく身構えていた晶が口を開く。
その声音からは何の感情も読み取れない。

「久しぶりに顔を合わせたと言うのに、挨拶も無しか。晶」

「そちらこそ。何の音沙汰も無く、数年ぶりに現れたと思えばいきなり仕掛けてくるとはまた随分な挨拶だな」

「そういえば、そういう事になるのか。ははは。無礼はこっちの方だったね」

晶の様子に「変わらないね」と笑んだ男が、右手に持った飛竜と呼ばれた杖を下に構える。

「初対面の方もいるし、やはり自己紹介はしておこう」

青色に光る紋様が男の手から飛竜を上下に走り、湾曲した杖の先端と末端に、青光を帯びた糸のようなものが張られた。同時に、少し上に構えた男の左手側に現れたのは、真っ直ぐに伸びた一メートル程の木の棒。

「私の名は、一守 瑛^{あきひ}」

否。男の手が棒を握った瞬間、赤い紋様が棒の表面を走る。紋様が先端まで行き着くと同時に、棒の先に炎が灯った。

「……竜尾……！」

「竜から創られた七つの神具の内、既に四つは私の手の内。幾ら竜駒巫覡が揃っているとはいえ、貴方方の中には——」

「伏せろ、お嬢——！」

叫んだ光國が黄の紋様の浮かんだ二輪を放つ——よりも早く。

「——最早、私を止められる者はいない」

床に放たれた炎槍の矢が、辺り一帯を巻き込む大炎上を生んだ。

幾日も雨の降らない日が続き、日照りで干からびた地に住む人々は苦しんでいた。

来る日も来る日も枯れた沼の前で雨乞いの儀式を続けるが、甲斐なく雨は降らない。

そんな中、儀式の最中に一人の見目麗しい女が歩み出る。

女は沼の主と名乗り、雨が降らない現状は、神の罰であると告げた。

項垂れる人々に女はこう続けた。

ある人に恩を返したいが、天の神がこれを許すはずも無い。雨を降らせば我が身は裂かれ地に落ちるだろう。

我が身が落ちたら、これを沼に返してほしい、と。

人はこれを了承した。

女が姿を消して間もなく、曇天に日が隠れ、待ちに待った大粒の雫が干からびた地に降り注いだ。激しい雨の中、踊る人々の歓声は雲を突き抜け天まで届いた。

恵みの雨はそれから七日間降り続いた。

七日目の夜。女の告げた通り、空から竜の切断された体が降ってきた。

人はそれぞれ落下箇所にて寺を作ると、感謝の意を込めてこれを祀ったという。

「……これにて、めでたしめでたし」

西日の差し込む無人の教室。

教室の廊下側の席に腰を下ろしていた、一華に良く似た黒髪の女

が絵本を閉じた。

惣一は、開けっ放しの窓枠に腰掛けて女の横顔を眺めていた。

「……これって、印場沼の昔話……ってやつ？」

「少し違つかしら。これは、ヒトの作り話ですもの」

「つくりばなしって……だから昔話だろ？ それ」

「昔話は、昔に起こった話だから昔話と言つのよ」

「実際に起こったってのか？ 竜の体が空から落ちてきたって……」

「ええ、そう」

絵本を机に置いて、椅子を後ろに引く。

女はすっと立ち上がると惣一に向き直った。

「このお話には、続きがあるの」

「続き？」

「ええ、忘れ去られた続き。一部のヒトには今も伝わっているらしいけれど」

「一部って？」

「竜駒巫覡と、言ったかしら」

足音が近づいてくる。

女が惣一に向かってゆつくりと歩いてくる。

やがて惣一の前まで来ると、女は惣一を見上げてにこりと微笑んだ。

「続き、知りたい？」

「……どっちでもいい」

「そう？」

「どっから本当で、どっから作り話……ってのは、気になる……かな」

「そう。眞実^{ほんとう}を望むのね」

女は惣一に両の手のひらを差し出した。
ほっそりした白い手。その手の中に、一冊の絵本が現れる。

「これは、本物の昔話」

「本物の？」

「ええ。それも、貴方の望んだ箇所だけ記される絵本よ」

「読んでいいの？」

「貴方のための本だもの。いつでも、好きな時に開けばいいわ」

惣一は窓から降りると、女を見上げる。

女は笑みを絶やすことなく、絵本を差し出した。

差し出された絵本を惣一は受け取った。

「よかった。貴方が望んでくれて。ずっと受け取って欲しかった本^{もの}だから」

「ずっとつていつから？」

「貴方が貴方として生まれ落ちる、ずっとずっと前からよ」

教室を赤く染めていた日が徐々に沈み、夜の帳が女の姿を消してゆく。

「貴方の意思無く世^{おもて}は回るから。せめて意志を持つ為^{ため}の世を、貴方に」

「意志……？」

「必要なものよ。決断する為に。そしてその選択の刻は——」

夜が降りて、視界が利かなくなる。

闇の中、長い黒髪がさらりと揺れた気がした。

——ほら。

もう、すぐそこに。

「おい」

「無事か」

一体いつ頃からだろう。頬をぺちぺち叩かれ続けて……うざいから跳ね除けてただけ、あんまりにもしつこく叩くもんだから、うがあああとなつて飛び起きた。

「ああもう……少しは寝かせてくれよ！ ……って」

自分の部屋ではない。

寒い。

いや、その前に。ここどこ。

目をかっぴろげた惣一の視界に、見たこともない異様な光景が広がっていた。

天に広がる平和な夕暮れ空。沈む日に、いやに焦げ臭い辺りは大分薄暗く染められている。丁度その時、ぱちぱちと音を立てて点灯した外灯が照らしたのは、古家と古家に挟まれた敷地一杯に転がる真つ黒な瓦礫達、大小様々。……いや。よくよく見れば、黒い物体の所々に、記憶の中の見知った物体と合致する箇所がある。例を挙げると、手元にあつた「い」と「れ」の文字が辛うじて見て取れる長方形の黒い塊。……これって、ひょっとしなくても……、

「ようやくお目覚めかい。こりやまた暢気な奴チャの」

声に視点を戻すと、まず、黒い景色の中、自分の両脇にしゃがみ込んで様子を覗き込んでいた光國、晶の顔があつた。いやいや。それより何より、自分の正面に小さな小さな影シルエットが浮かんでいるではな

いか。ようやく、惣一は声の主に焦点を合わせ、無意識に避け続けた現実を直視した。

「……………だから。なんで、猿がいるの？」

胸の上にちょこんと座っていた小猿が、突如齒を凶悪に剥き出すと、

「誰が猿ぢゃい！」

空高く跳躍し、折りたたんだ扇子で惣一の頭を思いっきり叩いた。

「や、やっぱり猿が喋ってる！」

「二度も言うか……！」

第二波を叩き落そうとする小猿に、惣一の両脇から冷たい視線が飛ぶ。

「猿だよ。一徹さん」

「猿だ。宮司」

「なんぢゃ、おぬし等まで人を猿呼ばわりしおって……！」

光國と晶に向き直り唾を飛ばす小猿の背中を呆然と見ていた惣一。

「……………その声。ひょっとして、エロ爺……………？」

「だが、あれが、えろじいぢゃ……！」

飛び掛って顔にへばり付くと、バリバリバリ……

「いってええ！」

悲鳴を上げた惣一の胸からようやく降りた小猿は近くにあった大きな瓦礫に着地するとふんと鼻を鳴らし腕組みした。

「宮司。痛いのだが」

惣一の痛みが伝わったか、無表情で訴える晶に向き直るや否や、扇子の先を鼻先に突きつける。

「自業自得チャ、全く……！ 心配してきてみればどうチャ。忍木戸婆さんの店は崩壊。竜玉の嬢ちゃんも奪われ、拳句の果てには命の恩人を猿呼ばわり。儂がおらんかったら危うく街半壊チャったところチャぞ！」

「予め店周りに結界張つといたのは俺っちだつて。一徹さんはソレ強化しただけだつつの。つつうか逆に訊くけど、一徹さんの力だけでさっきの防いだとか、めでたいコト思ってたの？」

「んーな事、いつまでたつてもクソ生意気な小僧に言われんでも解つとるわい！ 神の力を儂の力だけで防げるものか！ 貴様の竜牙じゃちと不安チャったからの、この儂の巫力を上乗せしてやったんチャ。でなかったら竜玉の姉ちゃん一人満足に護れんような貴様の張ったやわな結界なんぞ、木っ端ミジンコ瓦礫に消えとるわー！」

「いい年こいて『いー！』はやめようよ一徹さん。それにさ、お嬢奪われたのはこっちの不手際じゃなくて、お嬢の独断行動の結果だし。結界は間に合ったつてのにお嬢の奴、何考えてんだか俺っちを完無視してからさあ……」

「……そうだ！ 飯沼は……！？」

痛みに悶えていた惣一が、叫んで跳ね起きる。

引っかかり傷だらけの痛々しい惣一の顔面をなんだか気の毒そうに見つめる一同。代表して、口を開いていた光國が溜息混じりにボヤ

いた。

「……だから。攫われてったんしょ？」

「だあら、危ないから首突っ込むのはよしとけつつたんだよ。ほら俺護衛だからさ、面倒ごとはごめんつつかさ。けど、俺っちの忠告聞いた例がないもんだから、今回はこっちもそんま放置してたつて訳。ほら、少し危ない目に遭えばさ。お嬢もお嬢育ちだし、さすがに懲りるかなって」

「……本当。おまえのその性格でよく護衛なんて勤まるよな……」
「ん？ 腕がいいから？」

一守家で食卓を囲む一同と猿。意識の戻らないおばちゃんを休ませる為と、腹が減っては戦ができないという理由だった。

程よく焼けた鮭の絶妙な塩加減がたまらない。至福の笑みを浮かべる光國に、惣一は白飯を租借しながら不快の表情を露にした。

大体、『アイドル発掘し隊』なんて二つ名を持つふざけた新聞部の頭であるこの男が竜駒巫覡だったというのが信じられない。その上、よりにもよってこいつが飯沼の護衛ときた。どうりで飯沼一華に関する情報量が半端なかった訳である。昔からつるんで来た奴だというのに全く気づかなかったなんて。まるでドッキリに嵌められたようだ。それとも、これ、長い夢？ 俺、いつの間にか寝てた？

……って。

んな訳ねーんだよなあ……。

「どつたのミコちゃんさつきから溜息ついて」
「……んでもねーよ」

男達の向かい側で黙々と食事をしていた晶が、一粒残らず平らげた茶碗の前で手を合わせると箸を置いた。その音で、惣一と光國は揃って晶を視界に入れる。

「それで？」

渋い柄の湯呑みを啜ると、晶は光國に鋭い視線を向けた。

「水戸。元来面倒臭がりの貴様が今回でしゃばってきた理由とは？」
「でしゃばるって。そりゃ、俺っち、お嬢の護衛だからさ……」

「貴様の竜牙は後方からでも攻撃可能なはず。わざわざ姿を見せて私に事を説明しに来た辺り、何か企んでいるとしか思えない」

「あーあ。そんなに信用ないかね、俺っちって」

「その態度で信用しろと口にできる貴様が狂ってる。さあ、さつさと吐くがいい」

「相変わらずだな晶チャン。人がせつかくアイドル発掘し隊発行『美少女図鑑』に写真乗せてやってるつつうのに……ほら、ここ。な？　しかめっ面ばつかしてると勿体無い……」

光國が顔の前で晶に見せるように広げた『美少女図鑑』の背から勢いよく青白い大刃が突き出された。

刃は青ざめる光國の鼻先数センチの位置でぴたりと静止している。

「天高く飛ばされたいか。地深く沈みたいか。昔の誼だ。選択権をくれてやろう」

「いや、マジに恐いし。相性からして竜牙にや分が悪いつて知ってて竜角構えてる？」

「無論。嫌ならふざけてないで洗いざらい吐け」

「ワカリマシタ。長いし、どっから話せばいいかわかんないんだけどワカリマシタ。わかったから竜角しまつて」

「……………」

一寸置いて、手にした竜角を消す晶。だがその目は未だ警戒の色を解かない。「相変わらず冗談の通じない奴だな……」溜息を一つ。観念した光國は口を開いた。

「取りあえず今朝、雇い主の一声でさ……」

「雇い主って？」

惣一の視線に目を丸くする光國。

「……なんだ。ミコちゃんて本当にも知らないんだな。その無表情女から何も聞いてないんだ？」

未だむっすり気難しい表情を浮かべる晶を顎で指す光國。

「一守とは昨日会ったばかりだから」

「会ったばかりでも、今朝は話す時間がたっぷりあったろ？ 両手に花状態でじゃんぼに入ってたから、てっきり俺、そこで暴露大会になつてるのかと思ってたんだけど」

「……貴様がミコシバと知り合いだという事実を、私は兄と対面する直前に聞いた。つまりは、さっき初めて知ったのだ」

「けどさ、晶ちゃん……」

「その呼び方で呼ぶな」

「……俺っちがミコちゃんと同じ学校に居た事位は気づいてただろ？ あんた今朝、屋上で生真面目に気配探ってたじゃんか。相変わらずお嬢に過剰反応してたけどさ」

「竜玉と竜牙。二対一では分が悪すぎる。どちらかに何らかの動きがあれば、先に仕掛けるつもりでいた」

「……まあ。らしいけど」

苦笑いして豆腐の味噌汁を啜る光國。と、惣一の困惑の視線に気づいてそちらを向き直った。

「悪い悪い。えーっと、ミコちゃん。俺っちの雇い主ってのはさ、飯沼本家なのよ。元々俺っちは心霊省の精鋭部隊所属でさ」

「シンリョウショウ？」

「国が主導する心霊対策機関の名だ。昼に一度話したと思うが」

しかめっ面の晶が補足する。

「どかーんと大爆発後で覚えてないってそんなの。でも精鋭部隊って………水戸。おまえ、一体いつから飯沼の護衛なんてしてたんだ？」

「いつからって年齢？ ……そうだな、飯沼の護衛に就いたのが小二、三の時……お嬢専属になったのはそのすぐ後かな。尤も、その頃はお嬢付きは二人だったけど。さすがに大事なお嬢をガキ一人に任せられないだろ」

「んなら小二、三の時にはその、国の組織の精鋭部隊だったってのか！？」

「あー。それ、ちょっと大袈裟なんだよ。別に俺っち特別ななんてないし。けど、なんでも素質？ みたいのがあったらしくてさ。生まれてすぐに心霊省トキョーの育成施設ってトコに入れられたのね」

「ふええええ」

そんな小さな頃から親元離れて、陰陽師育成施設みたいな所で暮らして……で、小学校二三の時——俺と一緒に遊んでた時には既に精鋭部隊に属して、飯沼の所で仕事してただど？

そんな経歴を、いつもの軽薄な笑みを浮かべてなんでもない事のように話すこいつもこいつだ。

「話を戻したいのだが。水戸。飯沼本家の一声とは？ 触れでも出たか？」

「そりゃ一つしかないだろ。あんたんとこの長男坊が竜駒を四つ奪って逃走してるつつさ」

「……やけに情報が早いな。合流直後のおまえの話だと、昨日夕方兄を確認した時にはまだ、竜駒を一つしか所持していなかったそうではないか」

「そりゃ、ふやけてても精鋭だしな。同僚も仕事してるって。てな訳で、朝っぱらから沸いた一大二ユースのおかげで屋敷の中、笑えるくらい大慌てでさ。竜玉が危うくなつたと踏んだんだろうな。今日中にお嬢を本家に連れ戻せと、俺っちにさ」

「んで、渋々飯沼の後を追って、じゃんぼに来たんだな」

「いんや。御触れが出た直後にお嬢が動いたからさ。何するつもりだと思つて、様子見てた」

「……………ご老公よい」

惣一のジト目を受け、慌てて光國は理由を捲くし立てる。

「ほら。多分、御触れはお嬢にも電話かなんかで伝わってただろうし。連れ戻されたら最後、当分の間、家から出られなくなる事位気づいてたんだろ。……の前に、やつときたいコトがあるつつうんだけ？ ミコちゃんだって同じ立場なら気になるっしょ、お嬢の目的な？」

「本人に会って直で訊けばいい事だろ」

「解つてないな、ミコちゃん。それじゃあスリルてもんがないじゃん。テンションだだ下がりじゃん」

「青ざめる程に不真面目だな貴様」

「へへ。それほど」

「褒めてないのだが」

「一応いつでも動けるように朝から中庭で待機してたんだ。そしてら案の定、お嬢の気配が消えたからさ。ドンピシャ。こりゃなんかあったなって。ほら、な？ 俺のこの研ぎ澄まされた直感。まさに護衛の鑑ってやつだろ」

「…………… ミコシバ。コイツを友人にして後悔はないか？」

「いや、そいつ、ただの腐れ縁だし」

「なんだよ二人してその物言い。さっきからひどくね？」

「至極真つ当な反応だ」

「むしろ物言いに驚いてるのはこっちの方だからさ」

「そ？ そんなら別にいいけど…………」

「いいんだ…………」

「…………… ンでさ。お嬢の気配が消えたのは学校の近くだったから、すぐ移動は果たせたんだけどさ。特殊な結界でも張ってあるのか、お嬢の姿がない。結界の位置もわからない。さてどうするべと考えてたら、どこからかカンカン何かにぶつかる音がする。適当に竜牙で裂いた中空からこいつが出てきてさ」

「そういや、返さなきゃだったな」とやけに楽しげに呟きながら、光國はごそごそと懐を探る。取り出した小瓶を直視した晶が突如憤慨の表情で立ち上がった。

「む、むささび守！ …… 貴様、むささび守になんて事を！」

「なんてって………… 瓶詰めにしてるだけっしょ」

「おのれ愛らしい動物精霊を愚弄しおって………… 大体、適当に竜牙を振るっただと！？ むささび守に何かあったらどう責任とるつもりだったのだ！！」

怒り任せにずかずかと物凄い足音で踏み込んだ晶が光國が持っている小瓶に手を伸ばす。

それを立ち上がってひょいと避けた光國。

「責任？ どっちかつつたら、そっちの監督不行届けだろ」
「よくもぬけぬけと……！」

竜角を出して切りかかる晶。大剣をひょうひょうと避けながら、光國は楽しいな笑みを浮かべて惣一を振り返った。

「ンな訳で。コイツのおかげで俺たちは結界内に入れたって訳。すぐに晶ちゃんと……」

「その呼び名で呼ぶな！」

「……合流出来て事態を把握してもらった、まではよかったんだけど。お嬢が入った後、じゃんぼに二重結界を張られちまって、すぐに店内に入れなかったんだよ。で、その後は全員知っての通り、よりにもよって飛竜で竜尾を放たれてどつかーんの後、今に至る……と」

ちゃぶ台の周りで繰り広げられるドタバタを、惣一は呆れ返った目で眺めていた。

一人、先ほどから箸が進んでない。気づいた光國が動きを止め、苦笑を浮かべる。

「大丈夫だってミコちゃん。お嬢は無事さ。なんせ、こっちには竜牙と竜角がある。竜駒はまだ揃ってないんだからな」

その隙に小瓶を奪還した晶が、蓋を開け、光る何かを数珠に移した所で深い溜息を吐いた。

「……竜を呼び出すには、全ての竜駒が揃っている事が必要だ」
「それは、何度も聞いたけどさ……」

惣一は目覚めてからこれまで、ふとした拍子に幾度も、意識を失う前に対面した長身の男の姿を思い出していた。

晶の兄を名乗った男は、気難しい表情をデフォルトとする晶とは対照的に、終始笑みを絶やさなかった。

しかし、その切れ長の黒瞳は常に冷酷で不吉な光を放ち、未だ惣一の奥底に不気味な影を落としている。

しかもあの言動、自分を敵視していた所から見ても、あの男は相当一華に執着している。

竜駒云々に限らず、普通に一華の身が危ないのでは……、

「水戸の話によれば、兄は竜駒を手にしてから日が浅い。手持ち全ての竜駒を未だ使いこなせてはいないのではないかと私は考える。幾ら多数所持したところでそんな状態では竜玉には敵わないだろう。故に兄が次に行動を起こすのは我々に対してだと考える。我々から竜駒を奪わなければ目的である竜の召喚を果たせないからな。それまでの間であれば竜玉が飯沼を護るだろう」

竜角を数珠に収納しつつ晶が付け加えた。

「何。ミコちゃんお嬢の身の心配してんのか？ だったら大丈夫だって。何か策でもあるんだろ。でなきゃ連れ去られる時少しくらいは抵抗するし普通。てことはさ、お嬢、自分の意思で奴についてったんだよ。大体あの女、転落してもただで落ちるタマじゃない」

片膝立てて座ると、食後の一服と言わんばかりにシガレットチヨコレートを取り出した光國。

「おまえは少しは心配しろって……。ちなみにさ。その、竜駒が揃っていない状態で竜を呼び出そうとしたらどうなの？」

手にした一本の包装を剥ぐ作業に集中しつつ平然と答える。

「竜に食われる」

「く……！？」

青ざめ絶句した惣一に「マジだよ」とチョコレートを銜えた光國が一言。

着席した晶が、茶を飲み干して湯呑みを置いた。

「だが、それにしたってだ。使用出来ないにしても、四つの竜駒のように竜玉だけを奪った方が奴にとっても楽だったのではないか？ 隙はたくさんあったはずだ。なのに何故、飯沼まで攫う必要があったのか……」

「あいつに竜玉は奪えないさ」

銜えたチョコレートを弄びながら、なんでもないことのように光國は断言した。

「何故言い切れる。確かに昔から、人間一人の霊力で竜駒を三つ以上制御する事は出来ないと言われてきた。過去それをやって暴走し自滅した巫覡の名、千日手をとって、竜駒巫覡の間で禁止されてきた事だ。しかしどういう妙技か知らないが今、兄はそれを成し得ている。千日手が可能ならば、使えずとも竜玉を所持する方法があってもおかしくないと思うが」

ぼりつと噛むと、ようやくチョコレートから視線を外し晶を見る。

「じゃなくてさ。考えてみなよ。飯沼一族が大昔から代々守ってきた大事な宝を、幾ら長子だからって子供なんかに——若い女の子に託す？ 普通だったならそんな事やらないね。それをあえてやってる

トコがミソだつて」

「どういう事だ？」

「飯沼家が何の策も練らなかつたと思うか？ 例え奪われたって他の奴らにや使用出来ないようになってるさ」

「……………まさか、飯沼の奴……………！」

「まさかもなにも、そうするしかないつしよ」

「……………なんだ？」

晶の尋常ではない様子に問いかける惣一。
だがその声に答える者はいない。

「とにかく竜玉は奪えない。例えお嬢を殺した所で奴は使う事はできないよ。まあ、うまくやれば一瞬だけ使えるのかもしれないけど」

「一瞬？」

「お嬢を殺して、お嬢が完全に息絶えるまでの間だけ、かな。その間ならお嬢も制御できないだろうし」

「おまえ……………！」

「いちいちマジにとるなつてのミコちゃん。事実を言つたまでだつて。とにかく、竜駒が揃うまではお嬢は無事つて事。理解できたつしよ？」

「……………それならば、彼女が寝ている間でもできるのではないか？ 要は意識を失いさえすれば良い訳だから」

「竜玉を継承してからこれまで、お嬢が意識を手放した事はないよ。きつとこれからもずつとだ。それこそ、死ぬまでさ」

「…………………………」

「……………どういう意味だよ。それ」

「助けた後で、直接お嬢に訊いてみなよ。ミコちゃんならお嬢も教えるつしよ」

言つて自嘲的に笑う。光國の表情に、惣一はなんとなく胸がざわ

つくのを覚えた。

惣一の表情に気づいたのか、空気を変えるような明るい声色で光國は開口した。

「で？ 結局お嬢は何しにそっちに行ったの。暴露大会じゃなかったんだろ？」

「てかさ。逆に疑問なんだけど。そもそもなんでご老公が把握していない訳？ 護衛って相手のスケジュールとか頭に入っていないと出来ない仕事だろ？」

「まーな。それがお嬢って、元々秘密主義……つか、基本信用してないんだろうな。俺らの事」

「俺らって、護衛の事をか？ なんで？」

「外から来てるからさ」

「そと？」

「外とは印場と白羽外——心霊省を指す」

「シンリョウショウって……さっき言ってた国のなんたらってやつだろ？」

「行政機関の一つだ」

「それってもしかして……文部省とか環境省とか、そういうのと同じなのか？」

聞いた事無いんだけど。

「知らないの無理ないよ。極秘機関なんだ。元々普通の奴らにや説明つかない事象を扱ってる機関だからさ。ミコちゃんだって今回の事がなきゃ耳にしたって笑うばかりだろ」

「まあ、確かに。話してる奴を小馬鹿にするかも。漫画の見すぎだ……とか」

「素直なのはミコちゃんの美德だよ。で、話戻すけど。印場と白羽は心霊省がマークしてる土地の一つなんだ。だから俺っちみた

いなのとか、一守が派遣されてきてるのさ」

「一守も？」

光國の言葉に視点を移す。自分の湯呑みに茶を注いでいた晶が気づいて口を開いた。

「ああ。宮司は、元は心霊省に所属していた。白羽^{ハク}へは派遣されてきたらしい。土地の変調を正すと同時に半神族である飯沼の偵察、調査も含めた任を課せられたそうだが、程なく脱退した」

だから一守、自分は飯沼の監視役だって言ってたのか。昼間、一華と対峙した時の晶の様子を思い返す惣一。考えが伝わったのか、晶はこくりと頷いた。

「けど偵察とか調査って……なんとなくスパイを匂わせる単語だな？」

「まあ、似たようなものだな」

「……なんか俺、そのシンリョウショウっての？ あんまりいいイメージ沸かないんだけど。要するに、飯沼の事探ってるって事だろ？ さつきエロ爺さんは脱退したって言ってたけど……まだ続けているのか？」

「脱退している故、報告義務はないが。同じ能力者として、飯沼は危険視せざるを得ない。飯沼の監視は一守の義務のようなものと捉えている」

僅かに非難の色の入り混じった視線を向ける惣一に、むっとした様子で返す晶。その様子を半目で見ていた光國が剥き終わったチヨコレートを口に放り込んだ。

「心霊省に助っ人寄越せと依頼してきたのは飯沼さ。半神族とは言

え血は薄まっている。この土地の特殊な環境を、飯沼だけじゃ押さえられなくなつたんだろうな。尤も、心霊省がそう仕向けたところはあるんだろーがさ」

「それって嫌がらせしたとか？」

「そんなかわいいもんじゃないだろ。それこそエゲツナイ事とか」
「だから、なんでそこまで」

「飯沼が心霊省に所属していないからさ。飯沼が管理しているこの印場と白羽には、心霊省の力は届かんの。心霊省って一応国の機関だけど、ミコちゃんもご存知の通り一般には認知されてない、力の弱い組織だからな。全国から陰陽師を募って勢力や影響を拡大、影で日本を押さえたいつつ幼稚な野望もある。そんな心霊省にとつて、半神族である飯沼や、小さな土地を聖地として祀り上げてしまふ竜駒なんてのは脅威……つつつか邪魔でしかないだろうさ。あわよくば竜駒を奪おうともしている。確かに俺達は飯沼に依頼されてこの土地に入つたけど、同時にミコちゃんの言う通り、心霊省の犬^{スパイ}でもある訳。勿論、飯沼も重々承知してはいるだろうけど、心霊省の申し出を断つてドンパチするのは避けたんだろうさ。エリート陰陽師が数いる心霊省に、たかだか数人の半神族と、団結してない竜駒巫覡でケンカ売った所で負け戦……よくて傷み分けになるのは目に見えてる。飯沼が己の護衛を完全に信頼してはいないってのはそういう訳」

「なんつか……心理戦？　みたいな……」

「世は常々そついうもんだよミコちゃん」

呻いて後頭部を掻く惣一の肩に腕を回して、力任せに引き寄せる光國。

「な、なんだよいきなり……！」

「ミコちゃんが知らない影でたくさん奴らが走り回ってる」

「……例え恐えよ」

「事実さ。ミコちゃんは今少し己を知るべき。さもないや」

「んだよ？」

「大事なモン、取りこぼすぞ」

「……………」

「今戻ったぞ」

障子が開いて、冷たい外気と共に、ちよろちよろと小猿が入ってきた。

「随分長い廁だったな、宮司」

「馬鹿者。周囲の結界を強化して回ったんぢやい。おぬし等がちんたらやっとする間にいつ襲われるかわからんからの」

席に着き晶と同じ仕草で茶を啜る。と、まるでずっとそこに居たような雰囲気、世間話でもするような呈の口を開いた。

「して小僧。おぬし等飯沼えすぴーは、本家の御触れとやらが出る前に——確か昨日の深夜には心霊省から任を解かれとるぢやろ。嬢ちゃんが何も話さなかったのはそういう理由ぢやないのかい。逆に問いたいのぢやが。なんでおぬし、ここにおる」

一徹の声にはあ！？ と、光國を振り返る惣一と晶。光國は口笛を吹き、まばらの拍手を一徹に贈った。

「さっすが一徹さん。情報早い」

「誰のおかげでこんな格好しと思うとるんぢや」

「あ。やっぱり一徹さん今、飯沼本家か」

「任を解かれただと？ 聞いていないぞ」

「ん？ 言ってなかったっけ？」

「そんなら、昨日の夜中から既に飯沼の護衛じゃなかったって事が

？」

「一応はね。けど、飯沼本家は事情知らなかった訳だし。俺っちも一応学費払ってもらってこうしてミコちゃんと同じ高校生してる訳だしさ。最後の頼まれ事ぐらいはやつとこうかなって」

「お主らしくもない考えぢャの。実際お主以外のえすぴーは皆東京に帰ってしもつて、今飯沼の守備はからきしぢャ。ゴタゴタしとるどころではないぞ」

「どついう事だ、宮司」

「どついう事も何も、心霊省の都合でしかないぢャる。犬を放つ必要がなくなつたと」

「何故だ。竜駒を揃えつつある人物がいる今、飯沼を護る名義でこれを倒し、使い手を失つた竜駒を貰い受ける。心霊省にとつても千裁一遇の機会なのでは……」

「そこまで考えても、まだわからんの？ 晶ちゃん本当に一徹さんの孫？」

「その呼び方は止めると言っている……！」

「その『竜駒を揃えつつある人物』ってのが、心霊省に属してるつつつたら？」

半立ちになつて怒りにわなわな体を震わせていた晶が、光國の一言で硬直した。

「……まさか。兄が？」

「心霊省で一守瑛あつちつて名は有名よ？ 数年前に心霊省に入つたと思つたら、あつつう間に精鋭部隊トッブに上り詰めやがたつつつ、脅威の陰陽師。俺っちと同じ、超絶エリートだつて」

呆けた表情で聞いていた晶。そのまま、茶を啜る小猿を振り返る。

「……宮司は知っていたのか」

「あやつは家を出た。どうでもいい事ぢや」
「……………」

すたとんと着席する晶。声をかけようとした惣一は光國に制される。

「程よく暗くなったトコで話戻すんだケドさ。結局お嬢、何しにあらんたらに接触したの？ よつばどただ事じゃなさそうなんだけど」
「ただ事じゃないって……………なんでそう思うんだ？」

「タイミングもそうだけど……………そりゃあ嫌がってたからさ、お嬢。ミコちゃんに正体知られる事」
「……………」

光國の言葉で、惣一の脳裏に一瞬、一華の寂しげな笑顔が蘇る。

「いや、知ってて黙ってたのは悪かったけどさ。口止めされてたし。それに俺っちはちゃんとお嬢に進言してたんだぜ？ 全部吐けば楽になるぞって」

「取調べの刑事かよ……………」

惣一の顔を神妙な面持ちで見上げていた晶。視線に気づいた惣一がそちらを見遣る。と、晶は喉を鳴らしてから光國に向き直った。

「……………飯沼は何もしていない。ただ、忠告しに来ただけだと」

「何を。一守瑛の事？」

「いや。ミコシバを元に戻せと言ってきた。さもなくば死人が出る」と

「ふーん。んじゃーそうすつかあ」

「気だるげに立ち上がると、首をコキコキ鳴らしながら部屋を出て行こうとする光國。」

「って、俺を体に戻す方法、知ってるのか!？」
「いや、わかんね」

ずっとける一同。

「相変わらずヂャのー、お主」
「一徹さんもね。まあ、完全に切れた魂を体に戻す方法。無くはないでしょ」

言って、障子を開ける光國。

「マジで!？」

「つつても、手持ちじゃ無理なんだけど」

身震いするほど冷たい夜風に当たって気持ちよさげに深呼吸する
光國の後ろで再び一同が畳の上に転がった。

「……………何回俺を転がせば気が済むんだ水戸」
「まあさ。お嬢が言うんだ。なら、なるだけミコちゃんの体の近くに居た方がいいって事」

胸のすくような清々しい笑み。目にした惣一は自分には無い彼女
との絆を思い知った。

「……………信頼してるんだな。飯沼の事」

惣一の言葉に、きょとんと目を見開く光國。

「いや。信頼つつつか。お嬢は知ってるからさ」

「知ってるって、何を？」

惣一が首を傾げると、光國はしばし空に浮かんだ白月を仰ぎ……
数秒後、無表情で顔だけ振り返った。

「……全部？」

薄い雲の広がり、ほんの少しだけ欠けた月を覆っていた。

暗い森に囲まれた一守家の庭園で、制服姿の黒髪の少女が熱心に大剣を振っている。

惣一は少女の邪魔にならないよう、屋根の上からぼんやりとそれを眺めていた。

「ありや晶の日課なんぢや」

声に振り返ると、一匹の猿の姿。ゆつくりと惣一の横に移動すると腰を下ろし、晶の様子を眺めている。

「気の迷いでもあるのか、乱れた精神を統一したいのぢやろが……色々と不器用な孫での。ああやって竜角に頼る事しか知らん。すまんの、付き合わせて」

ひょうひょうとした口調で、一徹にしてはしんみりとした言葉を発するものだから、惣一は少しだけ慌てて首を振った。

「別に、謝る必要なんて……」

「お主、隠してはおるが、居てもたつてもおられん状態じゃろ」

図星をつかれて絶句していると、一徹はさらなる一撃を放ってきた。

「晶も気づいておるぢやろうが」

「……………マジ？」

「晶に聞かなかったか？ 現状ぢやお主、晶の式守ぢやろ。式守の

感情はダイレクトに術者に伝わるもんぢャ」

「……………」

人の口から改めて聞いて、解っていたつもりの惣一は、都合のいい所でいちいち失念していた事に気づいた。……………やべえなんてもんじゃない。それって、つまりはバレバレだったって事じゃないか。あいつ何も言わないから……………って言えるわけないだろ。

「まあ、男としては気の毒に思うがの。晶に邪な感情を抱いた時点で貴様は晶から最も嫌悪される存在に昇格したのぢャからの」

「抱いてねーっつか楽しんでんなよエロ爺」

「ま、冗談はさておき」

「冗談言つなよこのタイミングで……………」

「伝わった所で、晶には理解できん感情かもしれんがの」

「……………理解できない？」

「お主、昨夜から晶と共に行動して、何も気づかんかったか？」

「……………色々、疎いなあとか思ってたけど」

「晶は一日のほとんどを修行に費やし神社で過ごしておるからの。故に人付き合いも皆無。世間に疎いのは当然」

「なんで学校とか行かせないんだ？」

「晶にその気がないからのお」

それって学校に行く気がないって事？　なんで？　顔中に疑問符を並べた惣一を横目でちらりと見た後、「ま、いいぢャろ」と小さく呟いて猿は語り始めた。

「心霊省の話は聞いたかの？　内部にある育成施設では一般常識も一通りは教えておる。過程を終了すれば高卒、もしくは大卒と同等の資格が手に入る。施設側の意向での。学校へ通う必要のない環境が完成しとるのぢャ。当人にしたって、勉強より他に優先させる事

柄があるからの」

「何なんだよ、その優先させる事って」

「そりゃあ能力を高める事チャよ。誰に言われるまでもなく時間があれば自ら鍛えとる。ようやく平仮名が読めるようになった子供が同室で六人背中を合わせて、寝る間も惜しんで黙々と術書を読みふけっとるよ」

「水戸もその中に居たって、晩飯の時に聞いた。でも、なんでそこまで……」

「心霊省なんぞに属する輩チャからの。個々背負っているものがあるんチャろ」

「水戸も、……一守も、そうなのか？」

「晶は……そうチャのう……。背負うというよりも、そうせざるを得なかったというべきか」

齒切れの悪い言葉に、惣一が首を傾げて様子を見る。

小さな猿は、ただ一心に月を眺めていた。

「あの子は生まれつき霊力が高くての。怯えた両親によって生後間もなく心霊省に預けられた……まあ、所謂、捨て子チャったンチャ」

「……………すてこ？」

「儂や、実孫である瑛と血の繋がりはない。事情は違えど——」

事实に頭が真っ白になった惣一にも浸透するように、一徹の声がゆっくりと響いた。

「——晶は、お主と同じなんチャ」

「…………宮司から何か聞いたか」

惣一が縁側に腰を下ろすと、それまで一心不乱に大剣を振るっていた晶が動作を止める事なく口を開いた。

晶の幼いながらも整った横顔を眺めながら、惣一は口を開いた。

「わかるの？」

「私を憐憫の目で見ている事位は」

「憐憫って……」

「違うか」

「違うないかもだけど、なんか表現露骨っていうか……おまえってそういう難しい言葉は知ってるのな」

「読書は好きだ。特に一守の蔵の古い書物はいい」

「……それだったらさ、一守。おまえ学校とか行く気はないの？
学校にだって古い本はいっぱい……」

「ない」

晶の即答に、一瞬怯む惣一。

だが、即答だからこそ気になった。そういえば今朝だって……、

——私は生まれてこの方、学校という場に通った事はない。

なんでか、むっとした表情でぴしゃりと言いつけていた。一守の奴、本当は意識しているんじゃない……。

「……今日、俺の学校行ってみて何も思わなかった？」

「特には。ただ、潰すように時を過ごしているのだなとしか」

「潰す？」

「ほとんどの者が明確な意志もなく、時が過ぎるのをただ待っているように見受けられたのだが……違うのか」

「……… 違うない、かもだけど。でもさ、学校ってそれだけじゃ

なくて」

「私の目的ははっきりしている。限りある時間で学び舎に通う事がプラスになるとは思えない」

「その目的ってさ。いつごろから決めてたの？」

「宮司より竜角を継いだ時に誓った」

「何を」

「竜を天に還す」

言葉尻で、大剣を頭上から真っ直ぐに振り下ろす。

蒼く光る刃が一瞬、水晶のような虹色の輝きを放った。

「耳にしたのかもしれないが、兄と私は血が繋がっていない。心霊省に居た頃、ただ一人、同室であつた兄がよくしてくれたおかげで今の私がいる」

「……あいつも心霊省に居たのか」

「祖父の施設だから、と、両親に体よく預けられたんだと笑っていた。心霊省を脱退する宮司に引き取られていく兄が、私の手をとったのだ」

「……………」

「兄こそが私に竜角や竜駒巫覡の話聞かせたのだ。宮司から竜角を受け継いだ時、それに恥じぬ力を手に入れたいと兄はよく話していた。あの頃の私は、竜駒巫覡となつた兄の手助けがしたかった。

生きる目的を持たせてくれたのが兄だった。私はそれを守り、実行したい」

「……………一守、おまえそれは」

竜ではなく、兄の想いを守りたいのか。

一瞬だけ、晶は惣一を見上げる。

「その兄が今、他の竜駒を四つ揃えている。私にとってもこれはチ

ヤンスだ。兄の意志がもしあの頃のまま私と同じなら、竜角は献上してもいいとも思っている」

晶の言葉に惣一はぎょつとして、思わず立ち上がってしまった。自分の目に映った一守瑛は、晶の話の中の一守瑛とはかけ離れた印象を醸し出していたからだ。

「その、心霊省つて所が裏で糸引いてるかもなんだぜ？ 竜を召喚すれば力が入るんだろ？ それが目的かも」

「竜駒巫覡は竜の為に在る。竜を還す事が存在理由だ。力の所在は二の次だ」

「飯沼が力をつけるのは嫌がるくせに？」

「……飯沼の力は特殊だし、そもそも竜を天に返す気はないからな。……まあ、水戸の話が真実だとすれば無理もない事かもしれないが」

「だから、どういう意味なんだよ？ それ」

「飯沼に会ったら直接訊くがいい。水戸は私を止める為に情報を寄越したのかもしれないが」

「竜を天に返す事が、飯沼にとって悪い事になるのか？」

剣を振る手を休めて、晶の鋭い黒目が惣一を見た。

「……………だとしたらどうする？」

雲が、晴れた。

「ミコシバも私を止めるか？」

形のよい顎。滴り落ちる汗。月明かりを背にすつと立つ晶の澄んだ瞳に射抜かれて惣一は一瞬、言葉を失った。

「……今、訊かれても答えられない。飯沼にとってどんな不都合があるのかわからないから」

思わずしどろもどろになりながらもなんとか言葉を搾り出すと、晶はふうと息をついた。

「そうか。決めたら、どうか教えてほしい」

視線を外し正面を向くと再び大きな剣を構え、振り下ろしはじめた。

「……わ、わかった」

返事とともに、視点を足元へ。晶の姿が視界に入らないようにして、気を落ち着けた。

……ちよつとだけ、なんか、困った。

一守が一瞬だけ、違う奴に見えたからだ。

他の存在を突き放すような鋭利な輝き。繊細な強さに僅かに混じった柔らかな弱さが意識を惹きつける。彼女が持つ大剣、竜角に受ける印象と同じように。

そつえば、こいつと出会ってまだ二日しか経ってないんだよな。知らない面があるのも当たり前か。さっきは少し、びっくりしただけだ。うん。

気を取り直すと再び縁側に腰を下ろして、晶の横顔を眺める。

……本当、揺るがないよな。こいつって。

兄貴じゃなくて、こいつが竜角を受け継いだ理由。なんとなくわかる……様な気がする。

「……しかし、目的か。偉いよな一守」

「何がだ？」

「俺達くらいの年で目標なんて持つてる奴なんて数えるほどだつて」
「ミコシバにもあるではないか」

さらりと言われ、目を丸くする。

「元の体に戻るのだろう？」

「あ」

「先ほど水戸の話を聞いて思ったのだが、ミコシバの現状問題を解決出来るやもしれん竜駒がある」

「マジで!？」

「飛竜と言う。使えば死人に再び命を与える事が可能だ」

「……死んでないって、俺」

「だから、解決出来るやもしれんと言った」

「それに飛竜って、今は兄貴が持つてるんだろ？」

「事情を説明して拒むようなら、奪うのみだ」

「おまえってさ。意外に過激な発言多いよな。兄貴と戦うの、躊躇いないのかよ」

「私は竜駒巫覡。いくら兄でも負ける事は許されない。……許さない」

「一守……」

月が再び、陰る。

空を斬る音が一際大きく響く。

地に着く寸前でぴたりと刃を止めた晶は、そのまましばらく静止する。同時に風が止み、まるで時を止めたような静寂が辺りを支配した。

永遠のような刹那。晶は一息つくと竜角を消した。

「……いいのか？」

こちらに歩いてくる晶に声をかける。晶はちらりと惣一を見た後、そっけなく視線を逸らした。

「いい。迷いは晴れた」

「そっか。よかったな」

「……ミコシバのおかげかもしれない」

「え？」

「雑談も時には役に立つ」

「……そりゃ、よーござんした」

惣一の隣に腰をかける晶。置いておいたタオルを手に取り大量の汗を拭う。

夜風が吹いて、晶の切り揃えた黒髪を揺らした。手を休め、気持ちよさそうに目を閉じる晶の横顔を盗み見しながら沈黙に耐えかねた惣一が開口する。

「しかし……元の体に戻るのを目的とか言ってもいいのかな」

「目的と言わずになんと言うのだ」

「だってそれ、成り行きつつつか、突発的なものだろ。一守みたいな崇高なものじゃ……」

「人の目的など、大半が成り行きで出来ているものだ。私のも然り。それにミコシバだって半永続的に抱いている目的もあるだろう。それを果たす為にも必要な事ではないか」

「え？」

「飯沼を守りたいのだろう」

「……………え？」

「ひしひしと伝わってくるのだ。あの瓦礫の中で起き上がった直後……いや、もつとずっと前からか？」

自分の顔が、みるみる赤くなっていくのがわかった。

一守の視線を感じて、ぐると顔ごと視線を逸らす。

「……やっぱバレバレかよ」

「なにがだ？」

「いや……だからその……」

「何が言いたいのかわからないのだが。ミコシバが飯沼に対して異常なまでの興奮を抱いていた事は時々あった」

「………変態じゃん、俺……」

「違うのか？」

「……… 厳密に言えば、違うない」

「何をそんなにがっかりしている？ 私はミコシバが羨ましいぞ」

羨ましい？ …… 変態が？ 思ってもみなかった言葉をかけられ、

惣一は思わず晶を振り返る。

目が合って、晶は静かに微笑んだ。

惣一の心臓が跳ね上がる。

「人のために無謀になれるおまえが」

「……えっと。…… 貶してる？ それ」

確かに、一守を助けようとして呼吸できない場所に飛び込もうとしたり、飯沼を助けたくて敵わない相手に殴りかかりたりもしたけどさ。

思い出しては気が沈む。「……ま、当然か」惣一は溜息混じりに小さく呟くと頂垂れた。

「貶してなどいない。確かにそれは危険であると同時に馬鹿げている。自身の力量も把握できず、命を過小評価したとても愚かな行為だ……」

「馬鹿にしてんじゃん思いつきり」

「……と、今までは思っていた。が、ミコシバと接している内に思った。それは強さに変わる時もある」

「強さか。……本当に、そうなればな」

「望むのなら術者として、可能な限り力を貸そう、ミコシバ。それが私に出来るせめてもの償いだ」

「償いつて、そんなオーバーな。一生幽霊^{このまま}つて訳でも……ないんだろ？」

恐る恐る問う惣一に、首を傾げる晶。

「だよな……方法わかってないんだし。でも、水戸はなんか知ってそうだし……。」

「ならば、物々交換といこう、ミコシバ」

なおもブツブツ呟き続ける惣一に、右手を差し出した晶。

「竜は人の世を守って散った。竜駒は竜を守る為に在る。だから私は竜を守る。可能な限り、その為の力を貸してほしい、ミコシバ」

言われて惣一は戸惑った。何も出来ない俺が、一守に力を貸す事なんてあるんだろうか。これまでだって一守に助けてもらってばかりなのに？

差し出された白い手を見ると、ふいに一華の声が聞こえてきた。

——一守さん、すごく警戒心が強い。ヒトにはあまり、心を許してくれないの

一華の言葉の理由はもう知っている。でもどんな過去を背負っても、いつだって晶の表情は真剣で、そ

の意志は揺らぐ事がない。

その晶が、自分に手を差し出している。

「……ああ」

真摯な瞳に改めて向き直ると、惣一はしっかりと頷いた。

「俺に出来ることなら」

惣一はその手をしっかりと握る。やっぱり頼りない程小さくて、やっぱり汗ばんでいた。けれどそれはどんなにか温かくて、じんわりと惣一の胸に沁みていった。

時刻は丁度、午後十時。

神社の境内に惣一、晶、光國の姿があった。

全員制服姿のままである。晶の着替えようとしていたのだが、光國と一徹に止められて断念した結果だった。

三人と向かい合って、小さな猿が腕組みしつつ仁王立ちしている。

「さて。今儼は飯沼の結界主チャからしてそこから動けん。かと言って、式守の身^{サル}のままついていった所でロクな事も出来んチャろう。お主等に全部を任せるのはちと不安チャが、ま、なんとかなるチャる。もし、どうにもならない状況に陥った時には……晶」

「なんだ宮司」

「仮にも竜駒巫覡の名を持つ己で答えを導き解決するんチャな」

「？ 何を言っている宮司」

「肝心なのは、状況に囚われぬ意志と判断力、それに物事に動じぬ強靱な精神力チャ。選択の時は近づいておる」

「選択？」

一徹と晶のやり取りを横目に、惣一が首を傾げた。
はて。俺もつい最近、同じ事を誰かに言われたような……。

「何の話だ、宮司」

「今夜。竜は復活するチャろう」

晶の体が僅かに揺れた。

「なれど、選択肢は無限にあると言う事チャ。儂は何も言わん。孫が自分で考え自分の意志で成した事ならな、爺は見守るまでチャ」

「宮司……」

「行つてこい。帰ってきたらこの間通販で仕入れた高級茶葉がお主を待つとるからの」

晶はしばらく一徹の目を見ていたが、次の瞬間、深く深く頭を下げた後、

「行くぞ、ミコシバ」

くるりと踵を返して長い石階段を降りて行つた。

「……ちよいエロいけど、いい爺さんだな」

「ああ。……最高だ」

「……なぜ、瑛ではなく晶に竜駒を継がせたか。晶は解っておるのかのう」

「一徹さん。俺っちにもよくわかんないんだけど、それ」

声に一徹が見上げると、いつの間にか光國が腕を組んで隣で突っ立っていた。

「晶チャンより瑛サンのがスペック高いじゃん。俺っちそれ、常々疑問だったんだよね」

「おぬしは知らんでいい。というか、早う行かんかい！」

一徹が手にした扇子で大きく扇ぐと、強烈な風が発生した。

「へーい」

黒い木々が揺れる盛大な音と共に、何の抵抗もなく飛ばされる光國。

その姿が小さくなっていくのを油断ならないといった表情で凝視していた一徹は、やがて陰を解くとふうと息を吐いた。

「単独行動しておるように見えるあやつの目的もわからんままか。無駄足だったかのう」

飯沼家の方向へ消えていく猿の背を、木の枝の上で足を組んでいた光國が見下ろしていた。

「俺っちも一つ疑問なんだけど。ミコちゃんの目的と晶チャンの目的。どうやって選べるのはどっちか一つだけだって事、ミコちゃん達わかってんのかなあ」

欠けた月を背に、夜闇を病院へ向かって移動する。
時折強く吹き付ける北風を肩を竦めてやり過ごす。

そうしていつしか麻痺するように体が凍える寒さに鈍くなってきた時。丁度一守家と病院間の中点に位置する場所で、先頭を歩いていた光國が唐突に足を止めた。

「どうした？」

「俺っちさ。二手に分かれた方がいいと思っただよねー」

「は？　なんだよ唐突に……」

同意を求めようと晶を見るが、晶は無表情で光國の動向を見つめている。

惣一の声に振り向くことなく光國は正面の三叉路に立つと一方に体ごと向き直った。

「こっち行くとさ、ミコちゃんの体が眠ってる市大病院がある」

光國の視線を辿って道の先を見る。今朝、晶と一緒に往復したばかりの道は静寂と闇に包まれ、まるで違う印象を受けた。

「んで」

言葉を短く切ると、光國は正面の道に向き直る。

「こっち行くとさ、俺らの通う印場高校。……で、こっちには何があるかつつと」

「印場沼、か」

最後の道に向き直る光國に、晶がそっけなく答える。

「竜を召喚するには、打ってつけの場所だな」

「さっすが晶ちゃん。伊達に竜駒巫覡名乗ってないね」

軽薄な口笛と棒読みの賛辞に不機嫌に鼻を鳴らしてそっぽを向く
晶。

「夕餉の後、貴様が行方を晦ましている間に数体の式神が印場沼の方角へ飛んでいくのを見た。貴様、既に偵察済みなんだろう」

晶の言葉に感嘆の声を漏らす惣一。やっぱ一守と同じにコイツもそういう事出来ちゃう奴なんだ。そりゃ国の施設の精鋭部隊、だっけ？　そういうトコにいる奴なんだし、出来て当然の事……なんだろうけど。実際目にしてないし、欠片も現実味ないし。……水戸コイツだし。耳にしたって未だに微妙に信じられないんだけど。でもちよつとやってる所見てみたかったかな。

惣一の視線を「どーもどーも」と愛想よく受ける光國。

「書く物ないし、サインは後でね」

「いらねっつの」

「護衛対象が気になるのは理解出来るが、竜玉が捕らわれた今、竜駒巫覡の使命に基づいて我々は協力体制をとらざるを得ない状況下にいる。単独行動は控えてもらいたいのだが」

晶の厳しい目つきに、しかし光國はおどけるような仕草で「さーせん」と頭を下げた。当然、より一層不機嫌面をした晶がさらに口を開こうとする。

「つか一守、疑問なんだけど」

険悪な空気を感じた惣一は努めて明るいう口調で二人の間に割って入った。「今この時、水戸の態度を窺める事以上に重要な疑問があるのか？」とでも言いたげな視線を寄越す晶に内心ビビリつつも言葉が続ける。

「いや、なんで印場沼が竜を召喚するのに打ってつけなんだろうなあ……とか。ほら、召喚した竜が現れる所って、竜玉を持つてる飯沼の居る場所なんだろう？ 街から離れてるとか広いとか、そういう場所的な意味？」

話すにつれ、晶の黒目からみるみる怒気の色が消失していく。言葉尻を待つて「ふむ」と一言漏らし、何かを納得した様子。腕組みしてこちらに向き直った。どうやら気を逸らす事に成功した模様。感謝しろよご老公……って多分、人からかって遊ぶのが趣味の黄門サマの事だ、恩を着せようモンなら「いらん世話」とか溜息つかれるんだろうけどさ。背後のトラブルメーカーを心で一睨みしたところで、目の前の晶に溜息をつかれる。あれ？ 気のせいかな、まだ不機嫌っぽい……？

「……ミコシバ。印場沼は元々、黒き竜の住まう神聖な湖沼だ。人にとっては黒き竜と意志を交わした伝説の地であり、我々竜駒巫覡にとっては、はじまりとおわりの場所と言われている」

「そつえばそうだったな。確か、竜が言ったんだっけ。雨を降らす代償に、裂かれて堕ちた自分の身を沼に返せ……とか。……あれ。そしたら竜駒って最後は沼に返さなきゃいけないんだ？ 竜召喚したら無くなっちゃうのか……それで『おわりの場所』なんだ？」

返す惣一に、意外そうに目を見開く晶。

「……………よく知っていたなミコシバ。昼間は黒き竜の話を知らないと言っていたが」

訊かれて惣一は「そうだったけ？」と首を捻る。

「一守の言葉でなんとなく思い出した。忘れてただけで耳にした事があったのかも」

「如何にもミコちゃんらしい答えだねえ」

「どんなだよ。お前の中の俺って」

後頭部に両手をやり陽気に笑う光國を振り返りジト目で睨む。じやれあう二人——惣一をしばらく怪訝そうな面持ちで見ていた晶だったが、気を取り直して視点を光國に移した。

「……………話を戻そう。水戸。やはり兄は今、印場沼にいるのか？」

「ああ、それなただけだよ。何体送っても途中で消滅しちゃうんだ、俺の式神」

「消滅？」

「そ。邪魔されてるって事。だから残念ながら沼の様子はわからない。けどまあ、瑛サンとお嬢がいるのは十中八九、印場沼こうちだと思っんだよね。俺っち」

病院に続く道とは反対方向に伸びる道に顎を向ける光國。

「ミスリードって可能性もあるけど。なんとなく、気配感じるしさ」「心配って？ そんなんわかるの？」

惣一の疑問に光國は「まーね」と軽薄な笑みを返す。

「竜駒一つでも馬鹿みたいな霊力放ってるのにさ。こっちの二つの竜駒以外、全部一箇所に集まってる訳だし。特にお嬢——竜玉は他の竜駒を引き寄せる性質を持つからさ」

「私も水戸と同意見だ。しかし」

難しい顔で印場沼の方向を睨む晶。

「兄が何も仕掛けてこないのが疑問だ。手元に竜眼があるのだから気配を絶つ位一瞬で済むだろうに垂れ流しとは。竜眼を使用出来ない理由があるのか、単に我々を場に誘き寄せたいのか……」

「畏つて事？」

「いんや。瑛サンて今や千日手だぜ？ そんなめめっちい事しなくともさ、竜駒を一個ずつしか持たない俺ら相手なら二対一でも余裕つしょ」

「千日手つて、さつきも言つてたけど……」

言葉の先を予測したか、思案顔の晶が惣一の言葉尻を待たずに答える。

「千日手とは、竜駒巫覡の間で禁じ手とされてきた、一人一人が竜駒を三つ以上手にした状態を指して言う」

「なんで禁じられたんだ？」

「過去に一度だけ、竜召喚の意を持たず、ただ力を得るただけに竜駒を収集しようとした巫覡がいた。が、その者は結局、三つの竜駒を手にした所で制御出来ずに自滅し、一帯に甚大な被害を齎した。人が竜駒という神力を操るなどそれだけで奇跡に近い所業だというのに、複数を手に入れようなどもつてのほか。再発を恐れた心霊省の提案もあり当時の飯沼——竜玉がこれを禁じ手と定め、以後竜駒巫覡は固く守ってきた。……だが、どういう訳か兄は今それを成し得ている」

「それ……かなりやばいんじゃないか？ 昔話が真実なら一守兄つて、今いつ自滅しても可笑しくない状態だつて事だろ？」

「そうそう。理解できた？ ミコちゃん。いまいち緊張感ないけど、今つて結構シビアな状況なのさ」

「緊張感がないのは貴様がいるからだろっ」

「ひどいな晶ちゃん……」

「その呼び方はやめろと言っている」

「……俺っちだつてさ、これでも危機感ぐらい持つてゐるつて。竜駒を四つも持つてりゃあ、日本だつてどうしても出来るだろーし」

「どうにでもつて……？」

「じゃんぼの二の舞とか？」

「日本全国、辺り一帯丸コゲ焼け野原つてこと？ ……まっさか……」

カラ笑いする惣一に半目を向ける光國。溜息を吐きながら首を振る。

「ミコちゃん、こんだけ言つてもまだ事態把握できてないだろっ」

「当然だろっ。実際竜駒を扱っている我々でさえ予測不可能なレベルだ」

反論しようと開口した惣一を遮って、晶が半目で光國を見返す。

「そりゃ、千日手なんて想像しかできないけどさ。負担でかそーだな、とか……」

「負担？ 竜駒使うのに負担なんであるの？」

「そりゃあ、ミコちゃん。竜駒一つでなかなかキツイもんよ。最初は俺っちでもヒーヒー言つてたさ。けど、代わりにあの力だしな」

「竜駒つて一つでもそんなにすごいんだ？ 確かに、ゾンビ軍団追っ払った時の一守はすごかったけどさ、でもあれは一守自身がすご

「かつたつつつか……」

「……そっか。竜駒の威力、目のあたりにしてない訳だな。ミコちゃんは」

なるほどねーと腕組みし、うんうん頷く光國。なんだか馬鹿にされたような気がしてむすつとしかめつ面になる惣一に構うことなく上機嫌で語りだす。

「じゃんぼが破壊された時はさ。予め竜牙で店周りに結界張ってたからアレくらいで済んだんだよ。飛竜と竜尾の合わせ攻撃だなんて今まで誰も試した事のない大技なんだぜ？　どっかーんの後、自分等も街も無事だったわかった時はさすがによく抑えたもんだよと自分を褒めたくらいさ」

「水戸はいつでも自分褒めてんじゃん」

「全てが貴様の手柄ではない。宮司の力もでかい」

「人が気持ちよく浸ってる所に、揃って冷水鉄砲撃たないの。…

…まあ。けどさ晶ちゃん」

「その名で呼ぶな」

「俺っちもそうだけどさ。自分も竜角の力、解放したことないだろ？　余裕で街壊滅くらい行くと思わないか？」

「………試した事はないが、竜角を全開にすれば恐らく私の意識は吹き飛ぶ」

「制御不能ってやつだろ、それこそヤバイじゃん」

話を聞いてる内に惣一はだんだん恐くなった。一守達がなんでもない事のように普通に扱っている竜駒って……実はとんでもない物なんじゃん。話だけ聞いてると、まるで兵器だ。

「……一守兄ってあの時、本当に街を破壊する気だったのかよ？　やばいんじゃない？」

惣一の言葉に「さてね」と両手を後頭部に、空を仰ぐ光國。

「どうだろうなあ。あの派手な攻撃は俺っちや一徹さんが結界張ったのを見越したコケオドシ的なものだと思うけどでも。……必要があればやる、かもね。あの時だって、躊躇なかったしな」

「けど、そんな事したってなんになるつつうんだ？ 従わないなら街壊せて、その日本のお偉い施設が命じたのかよ？」

「俺っちにわかる訳ないっしょ。今回飯沼SPには撤退命令が出ただけ。心霊省の指令いつてるの瑛サンだけだし。ま、とにかくさ。今の瑛サンの力じゃ、俺っち等に罠を仕掛けるまでもないという事はわかったっしょ？」

「……なんとなくは」

竜駒が自分が想像しているよりずっと大変な代物で。それを四つも持っている一守瑛は今のところ、最凶。一国を破壊出来る程の力を持っているという事。現実味は全くないが、実際に日常は一瞬でじゃんぼ跡形もなく吹き飛んでしまった。これが現状だ。

「水戸。心霊省はともかく、飯沼の真意は全く読めないのか？ 飯沼は自ら兄についていったと言っていたが」

晶の言葉に惣一はピクリと反応し、光國は首を竦めた。

「言っただろ？ お嬢は秘密主義。なんでも知ってるからこそそうなのかもしれないけどさ」

「何でも知っている」。光國の言葉に、惣一の脳裏に少し前に浮かんだ疑問が再び過ぎった。

——いや。信頼つつうか。お嬢は知ってるからさ
——知ってるって、何を？
——……全部？

あの後、光國にはぐらかされて結局教えてもらえなかったのだが。

「夕飯の時も同じ事言ってたよな。それってつまりは、どうゆう事だよ？」

「飯沼の、半神族としての力だ」

惣一は感情に一早く反応した晶が答える。

「？ 竜玉ってのは……確か、全部を否定する力、じゃなかったっけ？」

「竜玉の力はそうだ。他にも飯沼は、半神族本来の——時空干渉の力を持つ」

「……時空、干渉？」

聞き慣れない言葉に惣一は首を傾げる。光國は壁に背を付け面白くなさそうな顔で二人を見ていた。

「どういう理屈か知らないが、飯沼はその力を持って過去現在未来、全てに影響を及ぼす事が可能であると宮司に聞いたことがある」

「………それってつまり、どういう？」

「詳しい事は私にもわからない。が、私が飯沼を警戒する理由はそこだ。彼女の持つ竜玉の力と半神族としての能力は非常に相性がいい。故に私は飯沼を監視してきたのだが……」

「いままでに飯沼がその……時空干渉って力を使ったことがあったのか？」

「いや。私がこの街に来てからこれまで、全くわからなかった。だ

が、あの一族はこれから起こる事全てを把握していると考えた方がいい。恐らく宮司も今後の対応策として飯沼家に呼ばれたのではないかと私は考えている」

「……全てを把握している？ …… そうなのか？」

晶の言葉を惣一はどうしても飲み込む事が出来なかった。嘘を言っていない事はわかる。昨日会ったばかりで自分はまだ僅かな面しか目にしていないのだろうが、それでも一守晶という人間が、揺るがない、鋼のように真っ直ぐな奴だという事は把握できた。晶は、一華の事を本当にそう思っているのだろう。…… だけど。惣一は今日一日の記憶、昨日以前の記憶の中からも、一華の姿を探して追った。本当にそうなら飯沼、あんな簡単に一守瑛に後ろとられたりするか？ それに、俺が暴走した時に見せるあの様子って、あの表情って。そうなる事を知ってて演じれる反応^{もの}なのか？

「…… 俺には、そうとは思えないんだけど」

口にしてから晶の反応を伺うと、彼女はなんだか、ばつの悪そうな顔で惣一を見ていた。

「まあ、私も全てを熟知してる訳ではない。能力者の間で囁かれていた事だからな」

「水戸は知ってるのか？」

話を振られて瞳を見開き、少しだけぎょっとした顔つきになる光國。珍しいと思った次の瞬間には気だるげな視線を惣一に投げて寄越した。

「まあ、一応はね。けど、そんな…… 言う程便利な力じゃないと俺たちは思っよ」

「なんで」

「なんでって……まあ、はたから見えてそう思ったただけだけど。い
つともなんか悩んでるからさ、お嬢」

「……………今回も一人で考えて実行した結果ってか」

情けなさと同時に、怒りにも似たもどかしさが、自分の中の暗い
奈落の底から沸き起こって心に重く押し掛かった。

いつだって彼女に癒されるだけ癒されておいて、自分は彼女の事
を何も察してやれない。

…… たった一人で。何を思っただの男についていったんだろう。

幾ら不思議な力を持ってたって、飯沼は女の子だ。背中に隠した飯
沼は微かに震えて……怯えていたのに。無事だろうと周りに太鼓判
を押されたからって、僅かでも安心してしまった自分、最悪。たっ
た一人で、心細くないはずがない。

また、あんな顔して……泣いてはいないだろうか。

「……印場沼に、飯沼がいるんだよな。二手に分かれるんだったら、
俺、そっちに」

「ミコちゃんは体の近くに居たほうがいいだろ。お嬢が早く体に戻
れつつってるんだからさ」

惣一 の感情任せの声を、遮るように光國の鋭い声が飛ぶ。苛立ち
と共に顔を上げた。

「病室に居たって戻り方なんてわからないじゃないか。それに一守
が言ってたけど、俺が元に戻るには飛竜ってのが必要なんだろう？
それって一守兄が持つてるって……！」

吐き捨てる途中で、冷静な光國の目が自分を刺している事に気づ
いて口を噤む。ミコちゃんが行っても何にもなんないっしょ。そう

光國に制されているように感じて、なんだかひどく悔しかった。

「飛竜か。……飛竜ね。ふうん。確かに戻せるのかもしれないけど……根本はそういう事じゃないんだな……」

ブツブツ言う光國の様子を怪訝そうに眺めながら晶が口を開いた。

「おまえが言っていたのは飛竜ではないのか。他に方法が？」

「うん、あるんだ。一つ。確かで、それが多分真実^{ベスト}って奴が」

ベストって。何に対してベストなんだろう。

惣一と晶の視線に気づいた光國、壁から背を離すと二人の近くまで歩を進める。

「ここからは俺っちの推測なんだけど。昨日晶ちゃんも大いに混乱したと思うけどさ。靈力ゼロのミコちゃんが精神体に靈力纏ってるの」

「……どうして貴様がそれを？」

「まあ、聞いてよ。実はさ瑛サン、その事故の日——昨日から急に目立った動きとるようになったんだよね。飯沼家でも瑛サンの昨日以前の行動は把握出来ていないつつ」

「……それがどういう？」

「ミコちゃんの事故。無関係のように見えて今回の件に大きく関わってると思う」

「………なんだって？」

惣一が眉を潜めた横で、晶が不審な声を上げた。

「少なくともお嬢は、ミコちゃんがあそこで事故るの、知ってたぜ？ わざわざ学園寮抜け出して近くで待機してたくらいだし。しか

も丁度そこで、飛竜を手にした瑛サンと出くわしたんだ俺達。もし
かしたらミコちゃんの事故、瑛サンが仕掛けたのかもしれない。け
ど、そこんところは俺っちにも分からなかった。お嬢は、何か知って
たのかもしれないけど」

光國の言葉に、昼間校庭で会った時の一華の言動を思い出す。そ
ういえば、彼女は知っていたじゃないか。

俺の事故を、二人で見っていた……だつて？

呆然と立ちすくむ惣一の肩をぽんと叩く光國。

「な？ だから、ミコちゃんは一応安全な場所に避難。で、護衛も
必要だろ。俺は当然、術者である晶チャンが適任だと思っただけど」
「……なら、飯沼は……」

回らない頭で問うと、光國は少しだけむっとしたような顔になっ
て、親指で自分を指し示した。

「何のために護衛おねいがいるんだよ」

だって、ずっと前から見てきたんだ。

貴女のやりたい事なんてもう見えている。

貴女の見ているモノなんてもう気づいている。

貴女の望む世界なんてもう知っている。

どれ程の命と時をかけて、それらを叶えようとしているのか。それだけは、さすがにわからないけれど。

だけど。貴女を見ていると、疑問が沸いて止まらないんだ。

それならどうして、俺はここに居るんだ？

—— / / S I D E - M / / ——

はじまりとおわりの地——印場沼。

「……………なんだあこりゃあ」

式神を全滅させて拵えた魔方陣を使い目的地手前に瞬間移動を果たした光國は、ものの見事に干上がってしまった沼底を前に素っ頓狂な声を上げた。

「さっすが竜駒。面倒な術式すっ飛ばして無尽蔵な靈力でこんだけの事を成してしまうんだからとことんデタラメだよな……………」

「何を驚きますか。竜駒などなくても術式を組み時間を費やす事で、水戸君にだって出来る真似でしょうに」

黒い木々に狭く切り取られた暗い空の下、どこからともなく響く声。ポケットに手を通り込んで中空に視点を上げたまま光國は言葉を続ける。

「そりゃあね。でもやろうとは思わないっしょ。何年もかけてやっと達成するその前に俺っちの方が干からびちまうっつか」

「だから、水戸君も竜牙を手に入れたんだね」

「全部眺めてみて、コイツが一番気に入ったんだよね。ぶん取る時、前の持ち主をちょーっと再起不能にさせちまってお嬢には大層怒られたけどさ」

ポケットの中から二つのリングを取り出し、空に放る。光國の意に応じて、指輪状のそれ等は直径四、五十センチ程に巨大化した。外側と内側に刃の付いた銀輪。一部分に赤い布を幾重にも巻きつけて作られた持ち手を、交差させた両手で光國が握ると表面に黄色の紋章が走り、同時に輪の外と内側に月牙状の刃が出現した。

「圈を模した土属性の竜駒か。使いこなすには相当な鍛錬が必要だっただろうに君は宮司の指導の下、数日で一通りマスターしてしまった。晶よりセンスがよかったよね」

「その節は修行にお付き合いただき。感謝シテマス。兄弟子」

構えた両手と頭を下げ「あざっす」と光國。その様子にクスクスと笑いながら、よく通る中性的な声は言葉を続ける。

「たった数日間だけだったけどね」

「早いトコお嬢付き、一人立ちしたかったもんでさ」

「けなげだね」

「その逆。嫌に鼻につく女を一回でいいから泣かしたいと思っただ

け」

「子供には過ぎたお姫様だったろ」

「よく言うよ。そっちも、俺っちが飯沼に入る前から既に狙ってたくせに」

「おや。バレてたかい」

「それなかったことにして、今さら竜駒を手に昔話の成就とか。あのさ。それって、本当に上からの命令な訳？」

「君はどうだと思う？」

質問で返された。光國は眉を潜めつつ腕組みする。

「んー……そうだなあ……」

「当たったら見逃してあげてもいいよ」

「冗談。ここで見逃してもらっても、いずれどっかで殺られるだけだからね」

「バレてましたか」

「そりゃあ俺っちも心霊省の人間だからさ。それに俺っち、これでもお嬢の護衛なんだ」

「おや。任務は解かれたのに？」

「俺っちのやりたいようにやる。その為に手に入れた竜牙さね」

「君も宮司のように脱退するつもりかい？」

「実は最近、それもいいなとか考えてたり」
「本当かい」

やたら残念そうな音を上げる声。

「君とはいいお友達になれそうな気がしたのに」

殺気の入り混じるそれを半目で聞き流すと、片手を首にやりコキコキならす光國。

「いや、同じ男として俺っちに惹かれるのはすんげえ理解出来るんだけどさ。俺っち友達は何らん主義なもんで……」

「おや。御子柴惣一君はどうしたの」

「ミコちゃんは……義兄弟つつうか。お嬢とは違う意味で特別」

「君は相変わらず面白い物言いをするんだね。なるほど。血は繋がってないけど家族は同じなものね。……けど、私と晶とは違う。同じに育った訳じゃあない」

あくまで朗らかな返答に光國の動きはピタリと止まった。

「それなのに同じ環境に居て、意識し合うだけならともかく、そこまで仲良しになるものなんだね。実際に目にして驚いたよ。お姫様の命令なのかい？」

「………んなの、どうだっていい事っしょ。つつうか、いつどこで仕入れた情報だよ」

「御子柴惣一君に関わる前に、彼がどういう人物か少し調べさせてもらったんだよ。組織が大きいと柵もすごいけどこういう時には便利だよな」

静止した光國の瞳に銀の光が宿る。

「……気に食わないな。そのドヤ声」

「ようやく、素になつてくれたかい？」

「素？ 俺は元々こういう性格だけど」

「気づいていないんだね。目の色が明らかに変わった。よっぽど突付かれたくない事だったのか、もしくは……君の大事なお姫様を見つけたか」

光國の視点はここに来た時からずっと一点で静止していた。

干上がった沼底のはるか上空に巨大な水の塊が浮いている。中にほっそりとした人影が見えた。両手両足を水流によって固定され、体の自由を奪われている。深く瞳を閉ざしたまま動こうとはしない。

「安心していいよ。あの水は沼の泥水じゃなくて、飛竜で生み出した清流だ。竜玉で身を守っているのか呼吸も問題ない。まだ、生きているよ」

「お嬢を、どうするつもりだ？」

「どうも私を止めようとしていたみたいだけれどね。残念ながら彼女を味わうのはもう少し先——私が竜角を手にした後だ。だから、時が来るまでの間、あそこで高みの見物をしてもらうつもりさ。あの位置なら病院だつてよく見えるだろう？」

「味わう、ね……。さすがにお嬢がこういう状態か……」

「ああ、理解しているよ。彼女は既に成駒化しているね。半神の血を守るためには言え、飯沼家は残酷だ。適性はあつたとしても白き竜の力を完全に受け継いでいるのは彼女じゃない。陽動……彼女を本当の駒としたのか。まあ、仕えている君に言う事じゃないのかもしれないけど」

「……………」

「さて水戸光國君。君こそどうするつもりかな。護衛なのに彼女の意志は守らないのかい？ 彼女のやりたい事、君ならもう理解出来ていると思っていたけれど」

「俺が守るよう言いつけられてるのはお嬢の身だけなもんで。お嬢の意志なんて知ったこっちゃない。むしろ少しは泣いてくれた方が可愛気があるってもんだ。これまで散々護衛泣かせてくれたからなせいぜい邪魔させてもらおうか」

「性格悪いね」

「妹泣かしに来たアンタに言われたくないつつか。俺は護衛おれの仕事を真つ当するまでだし」

「そう。なら、僕は妹の元へ急ぐとしよう。君を泣かしてね」

言葉尻を合図に、辺りを漂っていた殺気が数箇所で凝縮し鋭利なものに変化する。光國に向けて四方八方から放たれた炎の槍——竜尾。視線を巡らし、炎が己に到達する一瞬で理解する。じゃんぼを破壊したものと同じ攻撃だ。

「ふうん……。竜眼で、竜駒もコピー出来ちゃうんだ。こりゃまいったなあ……。なんて」

動じず、光國は両手を顔の前で構える。「あざっす」と手を離してからそれまでずっと音もなく地面を走り続けていた二輪の竜牙がそれぞれ光國の手に吸い込まれるように収まった。同時に、光國の立ち位置を中心として周辺——竜牙の走った複雑な軌跡が発光する。全ての炎の刃が一瞬にして地より湧き上がった大量の光に掻き消された。

完成した巨大な黄の魔方陣の中心で竜牙を構え、腰を低く落とす光國。竜尾の攻撃と共に沼底に姿を現した一守瑛に向かって低い声を放った。

「……さあ。俺のお嬢、返してもらおうか」

— / / T O R E T U R N / / —

ひっそりと静まり返った夜闇に沈む病院を前に、眉を潜めた晶の横顔を覗く。

「何」

「結界だ。それも、建物——いや、敷地全体を覆うほど強大な……」
「結界？ 中に入れないのか？」

晶は片手を伸ばして病院の敷地に入っていく。数歩歩いて、触れた感触に立ち止まった。

「そういう訳ではないようだが……中の空間が妙だ。違和感がある。

……竜眼か？」

「一守兄、印場沼に居るんじゃないのかよ？」

「水戸が戻ってこない所からして、そのはずだが。何故、ここに仕掛ける必要があったのか……目的は」

しばし宙を仰ぐ晶。ふと、惣一を見た。

「やはり水戸の言っていた通り、ミコシバが関わっているという事なのだろう」

兄が重要視しているもの。晶が知っている限り、病院には惣一の体しかない。

惣一は困惑の表情を返す。

「俺何もしてないし」

「わかっている。だが、事実是这样だ」

二人して、病院を睨んだ。その間数秒。

「どうする？」

「行くしかないだろう」

晶は竜角を手にとると結界をぶった切った。

竜角で一閃して正面玄関の自動ドアを手で押し開けると、二人は暗い病院内に侵入する。

「……いいのかな」

きよろきよろと落ち着かない様子で院内を覗くように歩く惣一。
一方晶は竜角をしまうといったものように大股でスタスタと歩を進める。

「いいも悪いもない。非常事態だ」

「……ですか」

ため息混じりに呟くと、晶の後を追って非常灯だけが頼りのただっ広い待合室を歩く。機能を完全に停止したような無人の病院は無機質でまるで生の感じがなく、廃墟に紛れ込んだような感覚だった。少しだけ不気味に思えて晶の様子をちらつと覗くが彼女は臆した様子もなく、いつもどおりの無表情でスタスタと病棟へ向かう。

「なあ、さっき言ってた違和感って今も続いてるの？」

晶の言う違和感を惣一は実感する事が出来ないでいた。昼間のように死霊がうようよしている訳でもない。なんの変化もみられない。勿論畏も。

暗い病棟はそれだけで不気味だったが、ただの病院。それ以上でもそれ以下でもない。

「確かに、陰陽のバランスは安定している………というか、安定しすぎていると言った方がいいか」

「しすぎているって？」

「印場と白羽……飯沼が管理している土地はそもそも、他と比べて異常だ。竜駒が発する神力による影響で、空間の性質が乱れている。ちよつとした衝撃で……例えば、人が歩行するだけでも陰陽のバランスが乱れやすい。それが通常であるのに、病院内部（こく）だけ、そうではないのだ。私はともかく、幽体のミコシバが実体化して歩いてもなんの波紋も起こらないのはこの地においては有り得ない事だ」

「それって、いいことなんじゃ？」

「そうだが……意味がわからない。わざわざ結界まで張ってこの病院を正常に保つ理由が」

エレベーターの表示が一階で点灯する。

扉が開いて、闇に慣れた目に痛い程明るい箱が現れた。

乗り込んで惣一の病室のある、四階のボタンを押す。

扉が重たく閉まり、機械音と共にエレベーターが昇る。惣一は、操作ボタンの前に立つ晶の背を眺めていた。

「……大丈夫かな。水戸の奴」

黙っていると、どうしたって一華が居ると思われる向こうの様子が気になる。ぼそつと呟いた惣一を振り返る事なく、晶が開口する。

「水輪の飛竜のみであれば土輪の竜牙に勝ち目はあったかもしれないが、金輪の竜眼をはじめとして、火輪の竜尾、月輪の竜爪を手にした千日手に単独で挑むのだ。無事で済むはずがない」

冷たい響きに、惣一は少女を凝視した。

「……………わかってるのに一人で行かせたのか？」

「策があるようだった。もしかしたら勝ち負けではなく、単に飯沼を逃がす為かもしれない」

光國は一華の護衛だ。奴が一華の為に動くのは当然である。わかっ
てはいるのだが……。

小学生の頃から一華とともに居て、ずっと一華を護ってきた。それは、惣一の”立ち位置”を揺るがす事実だった。

それで何かが変わる訳ではない。だが、まるで自分のいる位置にだけ巨大地震が発生したような感じた。足元がぐらぐらして心許ない
というか、居ても立ってもいられないというか。

惣一は一華に一目惚れだった。

初めて会った時。早朝補習で嫌々乗り込んだバスの中。ハンカチ
を拾って見上げた先に一華がいた。

浮かべた笑顔に、どうしようもなく惹かれた。自分だけの宝物を見つけたような気がした。なんとなく翌朝から同じ時間のバスに乗って、彼女を探し続けた。そわそわしては落胆する、浮き沈みの激しい日々が続く、そうして翌週の月曜日の朝、バスに乗り込んだ彼女の姿を見つけたその一瞬で予感確信に変わった。居ても経つてもいられなくて自分から声をかけた。名前を覚えてもらうと舞い上がってどんどん会話を続けた。話すようになるともっと笑顔が見たくなって笑い話を仕込むようになった。おかしいくらいに彼女に執着した。こんな事は初めてだった。

光國はそんな彼女と毎日を共にしていたのだ。自分が彼女を見つ
けるもうずっと前から。

おかしいだろうけど、自分だけだろうと思っていたのだ。女子校
育ちで、どこか人を遠ざける雰囲気を持つ彼女は——そりゃこれだ
け神がかった容姿だ。モテるのだろうけど——仲の良い男なんてい
ないと、馬鹿みたいだけと思い込んでいたのだ。

「……………水戸ってさ。やっぱ」

「なんだ？」

「いや、なんでも」

好きなのかな。飯沼の事。

女々しい感じがして、言葉を飲み込んだ。そもそも、こういう自
分は嫌いである。他人には見せたくないかった。

飯沼と会ってから、自分はどんどん情けない奴になっていく気が
する。

っていうか、知らなかった。自分にこんな面がある事。

軽快な音と共にエレベーターが開いて、内に入り込んでいた惣一
を現実に取り戻した。

……考えるのはやめよう。いくら想像したって仕方ない。今、自
分には一華を助ける術がない。部外者だったのだ。認めて飯沼の無
事を祈って、水戸を信じよう。もう、嫌な自分が出てこないように
改めて直視した正面のナースステーションには、明かりこそ点い
ていたが人っ子一人見当たらなかった。なるべく音を立てないよう
に横切って、惣一の体のある病室へと二人で急ぐ。

「巡回に行ったりするのかな。ばったり鉢合わせしたら追い出さ
れそうだな」

「面会時間外で、鍵を竜角で破壊してからの不法侵入だからな。当
然だろう」

「自覚あるんだ。銃刀法違反」

「……ミコシバがあんまりしつこく咎めるからな」

俺言ったつけ？　と考えて、はたと答えに辿りつく。心中が丸聞こえだったんだつけ。

「病院のスタッフと鉢合わせしたらどうする気だよ？」

「気の毒だが、眠ってもらうしかないだろう」

「……………平然と」

「仕方があるまい。水戸ならばもつとうまくやるだろうが、生憎私は結界を張るのが上手くないのだ」

「なら、一守は何が得意なの？」

「……………斬る、事くらいか」

「……………」

俺の視線を受けてか、心中を読んだか。一守は気難しそうな表情で僅かに俺から顔を逸らした。

後方のナースステーションから漏れる光に照らされて、黒い髪の隙間から覗く赤く染まった耳が目についた。

惣一の個室の扉には面会謝絶の札が仰々しくかかっていた。

確か、今日の検査結果に異常が見つからなければ明日にでも一般病棟に移されるはずだった。このタイミングはありがたいかもしれない。個室であれば一守兄妹がドンパチやっても巻き込まれる事は……ないと、思う。多分。じゃんぼの有様を思い出して徐々に自信がなくなる惣一。だって、恐らく兄が気を遣う訳はないし、妹の方は結界とやらが苦手ときた。あの時大惨事を防いだ結界を張ったのは、不在である水戸と一守爺だ。

躊躇なく晶は扉を開けようとして、さらに顔を顰めた。

「また結界か」

「今朝はなにもなかったのにな」

「準備が整ったという事かもしれない。どちらにせよ、こちらの行動は読まれているという事だ」

「……罾か」

「下がってるミコシバ」

竜角を手に一閃すると誘うように僅かに開いた隙間。とつてに手をかけ引き戸を全開にし固定されたのを見届けると晶を先頭に足を踏み入れる。

惣一の命を繋いでいる精密機械の音が止んでいる事を惣一が不審に思う前に、独特な匂いが鼻腔を擦った。

「……………線香……………」

廊下から漏れる弱々しい光を頼りに匂いの発生源を確かめようと見渡した部屋の様子が、以前とまるで違っていた。

「……………ここって……………」

音がしないのは当然だった。精密機械など、この部屋には一切置いていない。

線香の煙が細く棚引く四角い室内の中央に白いシートで覆ったベッドが一つ置いてある。

「……………部屋違う？ 間違えた？」

晶はぶんぶんと首を横に振る。

「位置は間違いない。だが、空間を弄られたかもしれない」

「弄られたって……でも、これじゃあまるで……」

——霊安室じゃないか。

言い終わらぬ内に、晶は首を縦に振って肯定した。顔を顰めている。

「無数の死者の気配が入り混じっている。ミコシバ、それよりあれは……」

線香の置かれた台の前に設置されたベッドに歩み寄る。白いシートにこんもりとした膨らみ。誰かが、寝かせられている。しっかりとした生地の白い布が一枚、顔面を覆い隠していた。

「うそだろ……これ……」

自分の病室だった場所に寝かされている白に包まれた人物。青い顔で僅かに後退した惣一を横目に、晶が布をとる。そこで寝ていたのは――

「い、飯沼……！？」

二人は目を見張った。

飯沼一華は白肌をさらに白くさせて無機質な蠟人形のようにベッドの上に横たわっていた。

「飯沼……！　嘘だろ！？」

真っ白になった頭に熱い何かがぐわつと駆け上がる。金縛りを解いた惣一は息をするのも忘れて彼女の体に駆け寄った。

「飯沼！ 起きろよ、飯沼！」

何度名を呼んでその体を揺すっても起き上がる気配は一向にない。長い睫毛が縁取る大きな瞳は硬く閉ざされたままだ。

「……飯沼、起きろって……頼むから……！！」

冷たく硬い感触。生きている感じがまるでしない。これじゃあまるで……無じやないか。沸き上がる恐怖で顔が引きつる。

「……嘘だ、嘘だ嘘だ嘘だろ……こんな、こんなのもって……！！」

ほの暗い絶望が真っ黒に染まる瞬間。脳に絡みつく線香の煙を払うように、惣一は両拳でベッドを思いっきり叩いた。

「……無事だつて、言ったじゃないか！　なんで、なんで飯沼が、こんな……！！？」

「違う、ミコシバ、これは……！」

「それが現実だからですよ」

穏やかな声に振り返る二人。

戸口ににこやかな表情を浮かべて瑛が立っていた。

漆黒の長い髪を後ろで一つにまとめた黒衣の男は身構える二人の正面で仰々しい手振りで恭しくお辞儀する。

「ようこそ。現実へ」

ゆっくりと上げた顔から仮面のような笑顔が覗く。細められた切れ長の黒瞳からは真意は読み取れない。

「水戸は倒れたか」

瑛の両手首に嵌められた銀輪を目にした晶が、動揺を示した惣一を庇うように一歩前に出た。

「彼こそが一番の脅威だったからね、竜玉をだしにこちらの陣地に釣り上げてみたんだけど寸での所で逃げられてしまったよ。やっぱりさすがだね彼は。用意周到と言うべきか」

「追わずにこちらを優先させたのか。らしくないな」

「こちらにも事情があるものだからね。既に再起不能である彼に引導を渡すのは、後でも出来るかなって」

「おまえ……！」

今にも飛びかからんばかりの惣一を片手で制し、晶が真一文字に結んだ口を開く。

「問おう、兄よ」

「堅苦しいなあ。」お兄さん”って呼んでいいよと何度も……」

「狙いはなんだ」

おや。と不思議そうに首を捻る瑛。

「晶ならとづくに気づいていると思ったけど」

「目的が黒竜の復活であれば竜角を献上しようと思っていた。だが、そんな単純な話ならここまで手の込んだ事はしまい。病院の空間を歪めた理由はなんだ。何故飯沼を」

「生かしているかと言いたいのかい？」

「……………」

惣一は感情を読んだか、振り返らずに一守は告げた。

「生きている。竜玉の力は未だ感じる。それは抜け殻だ」

「ぬけ……がら……？」

惣一はベッドを振り返った。

何度目にしても悪夢のような光景だ。白い衣服に包まれた、眠るように横たわっている青白い顔はどう見たって飯沼一華なのだが……。

「私にも理屈はわからないが、その飯沼からは竜玉の力を感じないのだ。しかし、幻のように見えて決してそうではない。その飯沼も確かに生きている。今はまだ」

「意味判らないんだけど。彼女、飯沼じゃないってのか？ どう見たって本人……」

「言っただでしょう。これが現実であると」

よく通る楽しげな声に晶が眉を潜める。

「”現実”とは、わざわざ竜駒を用いて世界の一部を侵食させてま

で存在させている異空間の事を言っているのか？」

「そうだね。確かにここは異空間で、今まさに死にゆくようにしている。その彼女は異空間の飯沼一華だ。君達が救おうとしている彼女ではないね。だけど間違いなく彼女は飯沼一華だよ。竜玉を手放してしまった後の、ね」

「水戸は、竜玉は他者には使えまいと言っていたが」

「ああ、それは確かに誤算だった。彼女は例え仮死状態にしたって意思を手放さなかったよ。そんな真似が出来るのは、竜玉と同化している証」

「竜玉と、同化……？」

晶の後ろで声を上げる惣一表情を視野に入れて瑛は薄く笑んだ。

「そうですよ、御子柴惣一君。彼女は竜駒を所持しているのではなく、竜駒と同化しているのです。竜玉は彼女の中で混ざり合って溶けています。もう切り離す事は出来ない」

その表情は、初めてその姿を見せた時、男が自分に告げた言葉を思い起こさせた。

——……貴方には、全てが終わった後、たつぷり身の程を思い知らせてから消えてもらおうと思っていたのですが——

あの時と同じ、冷めた瞳で自分の反応を見つつ、口調だけは楽しげに語る。一体、自分に何を知らしめようとしているのか。慇懃無礼に言葉を並べてくれるが、自分にはいまいち飲み込めない。

顔に出ていたのだろう。瑛はさらに笑みを浮かべて、まるで子供に語りかけるような優しい声でゆっくりと言葉を紡いだ。

「竜召喚は、彼女の命と引き換えだという事ですよ」

ねつとりと脳に纏わり付くような言葉は、まるで破滅の呪文のよう
に響いた。

「……………なんだって？」

「竜駒は竜の体の部位で作られています。体を返さなければ竜は現
存できません。彼女は竜玉と混ざり合っています。恐らく現存時に
は彼女毎竜に取り込まれるでしょう」

真つ白になった頭に言葉がゆつくりと浸透してゆく。

やがて浮かんだのは、時々見つける一華の悲しげな表情。そして。

——ミコシバも私を止めるか？

「……………一守」

自分でも驚くほど低く、乾いた声が出た。

目の前の小さな背中中は振り向かない。

「おまえ……、おまえ知っていて俺に協力しろなんて」

「……………ああ。言った」

晶の考えはわからない。だって、俺には彼女の心は読めないから。

「どうしても、竜は復活させなきゃならないのか？ ……その」

ちょっと変な奴だけど。能天気生きてきた俺とは全く違う生き
方をしてきた奴だけど。ただ彼女は真つ直ぐな人間だと思った。
昨日会ったばかりだけれど、いい奴だと。信じるにたる人間だと思
わせた。

「……飯沼が、死んでも」

瞳の強い光が。

「飯沼とて竜駒巫覡だ」

未だ手に残る、柔らかな感触が。

「私とて同じ立場なら、己の命で竜が復活するのならば本望……」

「……おかしいだろ」

「なにが」

「おかしいだろう、そんなの！」

きつぱりと言い切る、その意思に、晶は驚きに見開かれた瞳で僅かに惣一を振り返った。

「妹を責めないでやってくれますか？」

にこやかな表情のまま口を挟んできた瑛を睨みつける。構わず、さらに言及しようと口を開く惣一を、

「わざわざ口にしなくたって、君はもう十分彼女に訴えているだろうに」

穏やかな表情の男が放った、冷静な声が遮った。

「確かに晶は昔から真面目一辺倒で、融通の利かない性格だ。その為に誰かと衝突する事も多かった。しかし、そもそも人の価値観は決して等しくない。個は寄り添う事は出来ても交わり一つになる事

はない。それなのに自分だけの正義を他者に押し付けるのは感心しないですね。御子柴惣一君」

「押し付けてなんか……、俺は普通に考えて……！」

「いいや、君は君個人の意思より、物を言っているよ。好いているのでしよう、飯沼一華を」

さらつと紡ぐ男の声を耳にした瞬間、カッと顔が赤くなった。

そんな事を、なんだって今、飯沼を奪ったこんな奴に言われなくちゃならないのか。

「……そんな事関係な……！」

「いいえ、大いにあります。君が彼女に特別な感情を抱いてしまっただが為にこの現状が成り立っているのですから」

「どついう意味だよ、意味わかんねえよ！」

「わからないのなら、わかつとすればいい。この部屋に全てが在ります」

続く不可解な言葉に表情を歪ませる惣一。

ここに全てが在る……だって？

飯沼が霊安室に寝ているだなんて、これ以上ない位悪ふざけな空間にか。

考えれば考えるほどに、怒りが沸々と頭に上り、支配して思考を短絡化させる。

「飯沼が死んだ方がいいっていうのか？ おまえも、一守と同じように……！」

「それは違います。君は主観で物を言っている。人である以上無理もない事ですがね。晶は言い訳をする子じゃないから、私が彼女の代わりに弁解してあげてもよいのですが」

「弁解だ……！？」

「ええ。真実とは存外、ストレートで分かりやすいものです。もつと俯瞰で世界を見てください。そうすれば、自ずと理解出来るはずだ。だって君はもう持っているじゃないですか」

「持っているって、何を……」

「真実まじつを」

ドクン。

鼓動が、何故か一際大きく響いた。

「ミコシバ……？」

惣一の反応に、晶は怪訝そうに眉を歪ませ、瑛は黒瞳を細める。

「見ようと思えばなんでも目に出来るし、わかろうと思えばなんでも理解できるはず」

「だから、あんたの言葉はさっきから意味がわからないって……何が言いたいんだよ！ 俺は何も……！」

「わかるうとしないのなら、君には必要って事で。私がいただいてもいいんですね？」

言い終わらぬ内に、瑛は手の内に八角形の枠に囲まれた丸鏡を出現させると、鏡を惣一に向けた。

一度だけ目にした事がある。瑛に捕らわれた時、一華が『竜眼』と呼んだものだ。それが今、惣一の全身を——困惑の表情を映し出していた。

「なんだよ、それ」

「……………やはりか」

瑛は溜息交じりに呟くと、竜眼を小さくし衣服のポケットにしま

う。代わりに手にした長方形の薄い紙の表面を人差し指と中指でなぞった後、惣一に向けて飛ばした。紙は、まるで鳥のようなスピードで惣一に接近すると目前で消失する。疑問に思った刹那、猛烈な圧力が惣一を襲った。上下左右前後、あらゆる角度から押し潰される……！

意識が吹き飛ぶ瞬間、暗くなった視界で銀の光が縦に走った。圧力から開放され、惣一はその場に崩れ落ちた。

— / / SIDE - A / / —

「ミコシバに手をかけるのは、私を倒してからにしろ」

竜角を手にした晶が、刃先を瑛に向ける。

「おや。自分を信じぬ男^{たにん}を救おうというのかい？ 君を庇った兄と敵対しても？」

「周りは関係ない。私は私の決めた通りに動くだけだ」

「勝てないと判っていても？ 真実も知らぬまま散って、君はそれで本望かい？」

「兄は言った。ここには全てが在る。これこそが、現実であると」

「……気づいたのか。晶」

「ああ」

「『大事なものは、状況に囚われぬ意志と判断力、それに物事に動じぬ強靱な精神力』。宮司の教えが生きているのだね」

ふと懐かしい表情で晶を見る瑛。

垣間見た瞬間、まだこの手が彼に届く気がして晶は思わず叫んだ。

「兄、兄が望んでいるのは、今この世で竜を復活させる理由はもしかして——」

だが、自分の知る温かな表情は、その一瞬で消える。

「私情と心霊省の利害が一致したという訳だ。そのために今一度心霊省に移り鍛錬を続けながら機会を伺っていた」

「……心霊省を出る時、兄は二度とここには戻らないと、そう私と誓った。力をつけて、我々であの馬鹿げた施設を破壊しようとも。それはもう……！」

「本当はもう、解っているのだろう晶」

自分を宥めようとする、困ったような笑顔。無駄な物を全て削ぎ落としてしまった、生活を共にしていた頃とはまるで別人のような痩身の男が今浮かべている表情はしかし、自分が最も好きだった兄の表情と寸分も違わなかった。

晶は愕然とする。瑛は正気だ。心霊省に操られているのではなく、本当に自分の意志で成そうとしている。

「おまえが関わる必要はない。悪いようにはしない。だから、私に竜角を渡して欲しい」

「……だが」

短く切った言葉。晶は僅かに、兄から視線を逸らしていた。

「だが。兄は私を利用した」

「……………晶」

「おかげで。関係、なくはないのだ、私は、もう」

「よく、考えてみなさい晶。式守に執着するのがおまえの悪い癖だ。痛覚すら共有しようとする。だから、式は選べと昔から……」

「……式じゃない！」

いつの間にか握っていたはずの竜角が数珠に返っていた。
気づいたら、両手を握り締めて、地を見ながら、晶は全身で叫んでいた。

「ミコシバは、式なんかじゃない！」

大きなまっすぐな黒瞳で瑛を見返す。
射抜かれて思わず瑛は絶句した。
それは、瑛が今まで見たこともない晶の表情だった。

「……わかつているのかい、晶。おまえがやろうとしている事は私と、それからそこに寝転がっている男がもっとも嫌がる事だよ」

「無論」

「竜角は攻撃型。おまえと同じで、守るには不向きだ」

「ああ」

「月齢十五日前後はお前の霊力が最も落ちる刻だね？」

「そうだな」

「私は……おまえより、強いよ」

「承知している」

「………そうか」

瑛は目を閉じた。

いつの間にかその手に、一メートル程の大きさの棒を握っていた。
打撃部分に節目のような突起が二十一も付いた硬鞭。
瑛の意により、硬鞭に銀色の紋様が浮かび上がる。

「竜爪……！」

竜爪は確か、精神操作が可能な竜駒——気づいた晶が動くよりも早く、

「残念だよ晶。まさかこんな事になろうとは」

表情を完全に消した瑛が、硬鞭を振るった。
晶の体が完全に固まる。

「……っ」

しかし、晶の顔に敗北の色はない。

近づこうとした瑛を、無数の風の刃が襲った。

晶の目前に、イタチの動物霊が浮かぶ。

「式守？ …… 竜爪の精神操作は竜玉以外では破れないはずだが」

地に落とした竜牙の描いた魔法陣が瞬時に発動する。

噴き出す大量の光は瑛のすぐ間近まで迫っていた式の攻撃を全て反射させた。

「……………」

が、晶は無傷だ。

「なるほど、もう一体いるね。竜爪を受けたのは——」

二輪の竜牙がそれぞれの軌跡を描いて晶に飛ぶ。

動けないはずの晶が瞬時に前に出て、竜角を振るった。竜牙を地

に叩き落す。

「——不可視にした式だったか。数年間見ない間に少しは成長したんだね。ではこちらも」

その手に現れる身の丈以上の大きさの弓——飛竜。

「少し、本気になろうか」

同時に晶の周りを、何千何万の炎槍——竜尾が包囲した。

「……これは……!？」

目前に現れた一本の竜尾を手にも、瑛が飛竜の光弦を引く。と、周囲の竜尾の穂先の炎が一齐に晶を向いた。

「竜眼でコピーした竜尾だよ。性能も本物とほとんど変わらない。四方八方から発射される全ての竜尾を竜角で打ち落とす事は不可能だろう？ かといって避ければ後ろの御子柴惣一君に当たってしまうかもしれない。お姫様は自身で身を守るかもしれないが……」

「お手並み拝見といこうか」

にこりと笑って限界まで引かれた光弦を離す。竜尾が放たれると、それを合図に竜尾のコピーも一齐に晶に向かって飛んだ。動じず、素早く三つの印を結んだ晶は、懷から取り出した四枚の薄紙を人差し指と中指の間で挟み上から下まで指を滑らせ発光させると後方に投げた。紙はまるで意思を持つかのように、それぞれの方向に向かって飛んだ。

「障壁」

晶の言葉で四枚全ての紙が弾け、惣一達の前に不可視の壁が出来た。確認する事なく疾走した晶は正面から飛んでくる竜尾だけを竜角で打ち落としながら瑛に接近する。後方から今まさに己の頭を貫かんとする竜尾の接近を感じた晶は、瑛の目前で竜角の刃先を床につけると棒高跳びの要領で瑛を飛び越えた。

「相変わらず体育会系で荒々しいなあ」

晶を追って目前に迫った無数の竜尾を、瑛は竜眼を掲げて瞬時に完成させた強固な結界壁で防ぐ。まるでガラスが破損するような音を立てて砕けると、地に落ち消滅する竜尾のコピー。振り返って、己の後方に着地し身を翻した晶の振るう竜角を、手にしていた飛竜で受け止めた。

「太刀筋はいい」

「……………」

晶は驚愕に瞳を見開く。これまで竜角に切れぬものはなかった。しかし、今兄の手にしている華奢な飛竜が、何故か斬れない。

「竜角は単純になんでも斬る。形のない物も斬る事が出来る。時空だろうが人の魂だろうが真つ二つさ。でもそれは逆に、なんにでも触れられると言う事だ」

ぶるぶると震える巨大な銀の刃が己の頭上数センチの所に迫っていても、瑛は表情を崩すことなく歌うように語る。

「御子柴惣一は確かに消失する運命だった。消滅するはずだった魂

の行く末を斬って留めたのは、実は晶なんだよ」

「……私はあの時、強烈な神力——恐らく竜玉の波動を感知してあの場に駆けつけた。だが、ここが現実であるのならば、仕組んだのは飯沼ではないはずだ」

「ああ。仕組んだのは私だ。晶の特殊な魂昇天手順を知っていたのは私だけだしね。それに神力を感知して他の竜駒巫覡も集まってくれた。一石二鳥というわけだ。首尾よく竜玉、竜角、竜牙以外の竜駒を手に入れる事が出来たよ」

「どうしてミコシバを救った？ 兄は……飯沼さえ助かれればそれでよかったはず……」

「たった一日とは言え、そんなに彼の近くに居たのに気づかなかつたのかい？ 晶」

「勿体つけていないで——」

晶の表情に、ふっと笑って瑛はそれを口にした。

晶の表情が驚愕に歪む。

その隙を見逃すはずもなく、瑛は瞬時に手にした竜尾を正面に突き出す。

槍の刀身——炎塊が、晶の薄い腹を貫通した。

「……………っ！」

焼けるような痛みで晶の力が緩んだ。頭上の竜角の刃を受け流した瑛は数歩下がりがりながら竜牙を放つ。弧を描いて晶の後ろに回りこむと円形の刃は小さな身体を執拗に切り刻んだ。同時に、正面から飛ぶ飛竜の衝撃波。これを察知して、なんとか気力を振り絞り竜角で打ち払う晶。完全には斬れず、軌道を逸らされた衝撃波は晶と、障壁の向こう側にいるもの以外のあらゆる物質を全て破壊した。室内の外——建物が無事だったのは瑛の張っている結界のおかげである。

室内を舞う大量の粉塵の中、瑛は困った表情で戻ってきた二輪の竜牙を掴んだ。

「炎上しなかったね。身を任せていれば痛いのは一瞬だけだったのに。とつさに式守で身を守ったか」

後方に跳躍し距離をとると、着地と同時に片膝をつく晶。取り出した護符を傷口に押しつける。吸い込まれるように消えた護符が大量の出血を止めると同時に痛覚を麻痺させた。晶は素早く息を整える。

……咄嗟だった。炎が自分を貫通する直前、水属性の体積の大きな式守をと考えて瞬時にイル力守を出した。イル力守は現存したその一瞬で自分に鋭利な痛みを遺して消失した。しかしその犠牲すら超えて、竜尾は自分の身体を貫通した。

「傷は浅くはないというのに竜角は手放さないのだね」

晶は未だ荒い息で体勢を整えながら、それでも瑛から片時も視線を外さなかった。その瞳の色を慈しみの表情で眺める瑛。

「そうだね。手放せば、晶の意志は貫けない。……竜角を継いだだけの事はあるようだ」

瑛の言葉に、晶の精神が大きく揺らぐ。

竜角は、兄が受け継ぐはずのものだった。

でも、宮司は選んだのは、何故か血の繋がりのない自分だった。あの時の兄の表情が脳にこびり付いてしまって、未だ竜角を手にする度に思い起こされる。

柄を握る度に、問われるのだ。

何故おまえが手にしている、と。

「だけど、まだまだだ」

静かに言葉を紡ぐ兄の浮かべる薄い笑み。しまったと思った時には遅かった。竜爪の先端が晶の体を縛っていた。

「せめて一瞬で終わらせよう。だから、今度こそ抵抗するんじゃないよ」

正面で、飛竜の光弦が限界まで引かれる。瑛は矢を手にしていなかったが、代わりに飛竜に集まる尋常ではない靈気を感じて晶は戦慄した。なんという膨大な力だろう。あれが放たれれば自分は愚か、後ろの障壁も、この室内も人も壁も、その背後に在る景色も全て木っ端微塵に消し飛んでしまっだろう。ミコシバも――

――なんとかして竜爪の呪縛を解かねば。いや……解かずとも打ち消してしまえば。迷っている間はなかった。一瞬で精神集中。手にしていた竜角に全ての靈力を注ぎこむ。刃に碧光が走る。その淡い発光が先端まで行き着くと、晶は叫んだ。

「……招雷！」

瞬間、天から落とされた轟光が、あらゆる障壁、呪縛を超え晶を直撃した。

意識が消し飛ぶ寸前、風穴の開いた腹を押さえ付けてなんとか踏み留まった晶、落雷の一瞬前に放たれた飛竜の力を、雷光の宿った竜角で叩き斬る。間一髪だった。耳をやられてしまったのか無音の世界で、一刀両断された飛竜の衝撃は晶とその後方を残して全てを綺麗に吹き飛ばしてしまった。惣一と一華、二人の背後の直線状にある壁や景色だけは破滅を免れ、何事もなかったように残されていた。その光景は、まるで合成写真のようだった。

その少女は、既に虫の息だった。

腹部、背中、穴から流れた血で真っ赤に染まったスカート。ぼろぼろになってしまった制服。その布地に守りの術が施されていた事に瑛はこの時初めて気づく。……宮司の仕業か。

少女は、自分が竜眼で結界を修復する数十秒の間、立ったまま微塵も動く事はなかった。……ひよっとしたら気絶しているのではないだろうか。

「たった五分程なのに、満身創痍だね。苦しいだろう晶」

言って放った竜牙は抵抗しない小さな身体を容赦なく刻む。倒れない所を見るとまだ意識は残っているようだ。

「……どうして。君はそんなに一途なんだい？」

下肢を斬られ、踏みとどまっていた晶が大きくよろめいた。しかし倒れる事を許さないのか、倒れようとする方向から飛んできた竜牙がさらに華奢な身体を刻んだ。その後も続く衝撃に、晶の身体は木の葉のように踊る。

「本当は弱くて小さな女の子なのに。修行なんて適当でよかったんだ。元々晶は一守の人間ではなかった。錘つづみを唐突に託された時は恐れからあんなに青ざめていたのに。断ればよかったのに」

それでも、真っ黒に焼け焦げた小さな手は決して竜角を離さない。

「いつまで、昔おもいでの私を守ろうとする」

既に答える気力がないのか、耳をやられて届いてもいないのか。晶は成すがまま身体を弄ばれるだけだった。構わずに瑛は続ける。

「私がいいと言ったのに」

「……………だ」

漏れた音に注意深く見れば、晶はかすかに口元を動かしていた。意を汲んで手元に返ってきた竜牙を瑛は腕輪状に戻す。

「……………だっ……………ら」

倒れそうになるのをしかし踏みとどまって、黒い煤と赤い血で覆われた顔を上げる。

晶の真っ直ぐな眼光が瑛を貫いた。

「……………私の目的は、ずっと、兄、だったから」

か細い声に一瞬、驚いたように瞳を見開いた瑛。「本当に、君は……………」小さくそう呟くと優しく苦笑する。

「折角の愛の告白が、過去形かい」

「……………あい、などでは……………」

いつもいつでも。困ったように表情を歪ませるこの少女が、本当にかわいくて仕方なかったあの頃。

自分はどこかで、この少女の想いに気づいていたかもしれない。

けれど、自分は、選んでしまった。

望むものを手に入れるために。

少女を、たくさんのものを置き去りにして――

「——いいよ。晶、君を解放しよう」

穏やかな表情で、瑛はゆっくりと飛竜を構えた。

「私を含めて、全てのものから」

瑛が飛竜を構えるのを見て、すぐに晶は竜角を構えようとしたが、力が入らない。黒い両手を震わせてなんとか刀身を上げようとするが半分も上がらない。

「理解しているだろう。竜駒は力ではなく、霊力を持って初めて揮う事が出来る。要するに、晶は今インストールしているんだ」

「えん……すと……だど？」

「晶」

顔を上げた晶が目にしたのは、あの頃慕っていた瑛の、優しい兄の表情だった。

「もう、楽になっていいんだよ」

許されて、ふっと、肩の荷が下りたような気がした。全身の力が抜けていく。

その場に膝をついた晶。顔を上げると、限界まで引かれた飛竜が、放たれた所だった。

竜角を扱えない今、自分に防ぐ手立てはない。（すまない）脳裏に浮かんだ男に謝ると、観念して晶が目を瞑る。が、衝撃はいつまで経っても訪れなかった。

目の前に、晶が目を開ける。

「……みこ、しば……！？」

目の前には、両手広げ晶を守った惣一の中があった。

—— / / T O R E T U R N / / ——

考えなんてなかった。

盾になるつもりもなかった。

つまりは無意識に彼女の前に飛び出した。

それぐらい、意識を取り戻した惣一が目にした光景は、切羽詰った状況だった。

だから、わけが解らなかった。

死よりも絶望的な、己の消滅を確信させる程のあの光渦が、思わず目を閉じてしまった一瞬で、一体どこへ消えてしまったというのか。

「……危ない……下がれ、ミコシバ……！」

満身創痍の少女が自分の後ろでか細い声を絞り出した。

ひよっとしたら彼女が、何かしら不思議な力で、また自分を護ってくれたのだろうか。

血だらけで、煤まみれで、見るからに痛々しい虫の息の少女。考えるだけでムカムカと腹が立った。どこにそんな余裕があるっていうんだ……っ

「おまえこそ下がってろ！」

頭にきた、その勢いで正面の男を睨んだまま怒鳴った。

「おまえ……私に怒っているのではなかったのか？」

背後から困惑の声が返ってくる。俺が自分を庇った事が、よっぽど不思議らしい。

「ああ、怒ってるよ！ 現在進行形！」

「なんだそれは」

「もつと自分を大事にしろつつってんの！ 竜復活なら命厭わないだとかぬかして、そんな大怪我してぼろぼろになって……これじゃあケンカもできないじゃないか！」

一瞬の間。

「けんか、だと？」

掠れた声が返ってきて、思わずそちらを振り返ってしまった。

いつの間にか立ち上がって細い肩を上下させている血だらけの少女が、呆けた様子で自分を見ている。……って、痛くないのか、おまえは。

「ああ、喧嘩してただる俺ら！」

大きく頷いてみせる。「ひくほど大怪我してる奴が平気そうな面して突っ立ってんじゃねえよ恐いから」悪態つきつつ瑛と対峙しながらじりじり後退して体を支えてやる。やはり相当な無理をしているのか、晶は差し出した腕にふらりと凭れた。触れた晶の身体は見た目以上に小さくて細くて、頼りない。本当にこんな傷だらけの身体で、どうして立ってられるんだよ……。

自分は一体、どれくらいの間意識を失っていたんだろう。彼女はどれ位の間、俺や飯沼を護って一人、慕っていた兄と戦っていたのだろうか。それは一体、どれほどの孤独だっただろう。

「……………ミコシバ……………」

声に視線を落とすと、煤だらけの顔に戸惑いの表情を浮かべて自分を見上げている晶。

「私を、軽蔑したのでは？」

「けいべつつて……」

どんな意味だっけ。急に問われて、ぱっと嫌なイメージしか出てこない。ケイベツ……ああ、『軽蔑』。軽蔑か……。頭の中で単語を噛み砕きながら、心底不思議そうな晶の顔をマジマジと見る。

確かに、自分は彼女に、怒っては……いる。

飯沼を殺しても竜を蘇らせようとかしているし、全部知ってて、それを俺に協力させるし。その為に、こうやってボロボロになっているし。理由も何も教えてくれないし。

……でも、多分、『軽蔑』とはまた違うと思う。

自分は多分……。

「……………」

ただ――

「……………ミコシバ？」

急かされて、内から返った惣一は慌てて言葉を搜した。

「そ、そんなのよくわからないけど、俺……嫌いになるほどお前のことなんてまだ知らないつつの！」

惣一の搾り出した言葉に、晶は瞳を僅かに見開いた。

「……………それも、そうか」

呆けた表情で、それでも納得のいったかのように呟く。
どこことなく間の抜けた彼女の様子に、惣一はどこか投げやりに、
しかし力強く肯定した。

「そーだよ！」

「そろそろ、お別れは済んだかい？」

耳どおりのよい声にはつと正面を向き直れば、瑛がこちらへ飛竜
を構えていた。

力集まるそれは、真っ直ぐに惣一の胸を狙っている。

「いけない……！」

惣一の腕を払い、晶が竜角を構えようとした。
が、地に着いた刃先は、僅かに浮くかどうか。どういつ訳か、晶
は竜角を持ってないでいる。

「ほら、もうよせつて！ 自力で立つてすらいられない奴が、そん
なデカい武器振るえる訳がないだろ！ 無茶だ！」

「……………無茶でも……………身体が動く内は……………っ」

竜角を持ち上げようと全身を震わせて両の細腕に力を込める。苦
しそくに表情を歪めながら晶は惣一の手を拒んだ。

「だから、なんでそこまでして……………だああ、もういいつの！ あ
いつが狙ってるのは竜角それだろ？ もう渡しちまえよ、でないとおま
え、本当に死んじゃう……………！」

「……………嫌だ！」

止めようとして、竜角に伸ばした惣一の手を拒絶の意志をもって払う。

「……一守……！」

「これしか……ないんだ！」

晶はガクガクと震える細腕で必死に竜角を構えようとする。
正面の——瑛を睨みながら、晶は声を絞り出した。

「私には……これしかないから……！」

——自分は多分、ただただ、悲しいのだ。
そんなことしか言えない彼女が。

「一守……」

彼女が本当に抱えようとしているものは、違う。
抱こうとしているのは、きっと竜角じゃない。

「……！」

震える小さな手に、見かねた惣一が手を添える。

「……ミコシバ……！？」

「……一人じゃ無理でも、二人ならなんとか……！」

言葉尻と共に、腕に力を込める。二人がかりで竜角を持ちあげようとするが……、あ、やばい。竜角^{コレ}、見かけ以上に……とんでもなく重いじゃないか。例えるなら、鉄の塊——自動車のものを二人で持ち上げようとしているようなものだ。うんともすんともし

ない。どうやっても上がらない。こんなものを、今まで一守はぶんぶん振り回していたってのか……！

「昨日会ったばかりなのに、君達は本当に仲がいいんだね」

声にそちらを視界に入れて、思わず惣一は呻いて仰け反った。

瑛の構えている飛竜という弓。自分を狙うその中心から、視認できる程の圧倒的な神力が巨大な白渦を巻いていた。まるで、台風の天気図をリアルに目にしているかのようだ。その威圧感たるや。気を抜けば腰が抜けて二度と立てなくなってしまうそう。あれを前にして未だ直立している自分が奇跡の存在のように思えた。

……実際には身が竦んで動けないだけ、なんだろうけど。

「その姿は微笑ましいけれど……残念」

再び響く声に、我に戻る。

白渦の中心、台風の目が綺麗な青色に光った。

「タイムリミット
時間切れだ」

一気に白渦が青く染まったかと思うとついに、巨大な神力——衝撃波が瑛の手から放たれる。

「……畜生……っ」

惣一は竜角を手放し、バランスを大きく崩した晶に覆いかぶさった。

「……ミコシバ！ よせ！」

抱きしめる自分を振り払えない程弱い力で抵抗する晶。怒りとも悲しみともとれない彼女の必死の表情がすぐ目の前にある。大丈夫だから。安心させようと口を開いた直後、まるで新幹線が全速力で突っ込んできたような衝撃を背中に受けた。

「ミコシバー!!」

……だが、それだけだった。

「……………」

……痛くない。

……………。

……つつつか、なんで無事？

あんな異様なものが直撃したはずなのに、消し飛んでいない……
だって？

不審に思っただけ。惣一はゆっくりと瑛を振り返った。

瑛は穏やかに微笑んで、惣一達を眺めているだけだった。

「やはり、君には竜駒が効かないんですね。御子柴惣一君」

静かで不気味な——嵐の前の、夜の海のような笑顔。

「え？」

「最初に会った時もそうでした。僕の霊波で吹き飛んだだけで、竜駒の力は一切効かなかった。一応試してみたけれど竜眼も、全力で放った飛竜すらまるで効かない。まあ、予想はしていましたけどね」

やけに穏やかな声色は不安を齎しつつゆっくりと流れる。

「……何の、話だよ？」

「もうすぐ解りますよ。……ここには全てが揃っているから」

「全てって……」

「状況は解らずとも感じているはずですよ。何せ君は、私の呪縛を打ち破って自力で起き上がり、竜駒の力を吸収して実体化を継続させる程の力を得ているのですから」

「……呪縛？」

「実体化？」

「言われてみれば、晶が立つ事すらままならない状態に陥つてるというのに、自分は半透明に戻っていない。現にこの手は、晶に触れているじゃないか。」

「けど、俺にはなんの力も……」

「そうですね。君にはありません。だけど御子柴惣一君。君のご両親が、宮司が、飯沼家——竜玉が守っていたものが確かに在るんですよ。それはそれは、強大な力が」

微笑みと声色の不協和音が生み出す不安の影が、瑛のよく通る声を辿って徐々に濃くなる。

「……俺の……親が？」

「君と君のご両親に血のつながりはない。そうでしょう？」

「……なんでンなこと、知って」

「当然でしょう。君のご両親は元は心霊省の役員だったのですから」

「……馬鹿言え。俺の親って平凡な……ただの指圧師だぜ？ 第一、そんな事、一言も……」

「言う必要もなかったんでしょう」

濃厚な影が闇となり、徐々に正気を塗りつぶしていく。

「ある事情により君は、生後すぐに飯沼家に引き取られた。その飯沼家の申請で君の護衛兼養育係に抜擢されたのが今のご両親です。履歴も、存在すら偽ってね。本当は名も違う。実の子供と縁を切つてまで君の家族となつて立派に育て上げたのですよ」

「……………冗談、だよな？ それ……………」

掠れた声が出た。

何故か、笑みを浮かべている自分に気づいた。

「君の両親は、今は『ご旅行中』でしたよね。飯沼家からもらった『チケット』で」

一際大きく響く鼓動とともに、脳裏にフィルムのようにフラッシュバックされる数日前の出来事。

チケットを自分に手渡した、一華の笑顔。

「……………うそだろ？」

「事実です。君の両親は『旅行』の期間が過ぎても二度と君の家に帰ってきませんよ。今日でお役ごめん。要するにもう『両親』は必要ないのです。だって君は今日、消失するのですから」

「……………やめろ……………！」

濃厚な闇を切り裂く高い声がすぐ近くで響いた。

抱えていた晶が、懇願の表情で瑛を見ている。

「晶は黙っていなさい。彼にだって知る権利はあるだろう」

「だが……………！」

「……………一守。何か知ってるの？」

声に俺を見上げた晶は、しかし、気まずそうに視線を逸らす。

「私は……」

「晶には少し前に——君が意識を失っている時に話したんですよ」

晶の声を遮って響く闇。

「彼女も寸前まで知らなかった。もし知っていたら君達の関係は違ったものになっていたかもしれないね」

「どういう……事だ」

「君が、私達にとって重要なものを持っているという事です」

重要なものだって？

そんなもの自分は——

——やはり水戸の言っていた通り、ミコシバが関わっているという事なのだろう。

いつかの晶の声が、瑛を肯定するように蘇る。

「その彼女ですが」

ベッドを眺める瑛。釣られて惣一も寝かされている一華を振り返る。

「晶の言っていたとおり、まだ死んではいません。正確には、死に行く直前で時を止められたようなもの」

「どうして……」

「止めたのは、晶。そして、竜角ですよ」

晶を見る。彼女は瑛を睨んだまま。

「とは言っても、晶は何も知らなかったのだから彼女を問い詰めたって無駄です。私が利用させてもらったのですから。止める手立てはもう、なんでも触れる事の出来る竜角しかありませんでしたからね」

「……飛竜つての、持ってるじゃないか、あんた。確か一守が、死んだ人を生き返らせるって……」

「私が——竜角が止めたのは彼女個人じゃありません。世界そのものです」

「世界……だつて？」

自分にはさっぱり訳のわからない話だというのに……これはなんだろう。

「そう、言つたでしょう？ この空間だけは現実。……正確には『だつた』と付きますけどね」

「現実、だつた？」

「そう。君が晶と出会つたのは、世界交代した後の世界です」

正気を侵食する闇の足音のように響く、早鐘のような鼓動。

「ああ。だから後ろに広がる焼け野原にも、一瞬にして命を失った者達に対しても気に病む必要はありません。だつて、今から在るべき世界に戻すのですから」

至つた闇で、弾けそうになつたその時。

「……さあ。そろそろ彼女に目覚めてもらわなくては」

瑛が竜眼を足元に置いた。
鏡の部分が発光し、光の中から、天井に届く程巨大な水の塊が現れる。

「……………飯、沼……………!？」

水塊の中に、瞳を閉ざした制服姿の一華の姿があった。

「飯沼……………!」

駆け寄る惣一を、しかし瑛の発した霊波が吹き飛ばす。

「ミコシバ!」

壁に叩きつけられた惣一に何とか駆け寄るとなおも起き上がるうとする惣一を制して晶は瑛を振り返った。

「兄、これは……………!？」

「空間を繋げて印場沼からこちらに移したのさ。この水は沼の泥水を飛竜が吸収して浄化したもの。つまりこの中に入るという事は、沼に入る行為に等しい。人はようやく、竜との約束を果たせるんだよ」

瑛が飛竜を揮うと、水塊から勢いよく水が溢れ出でた。恐ろしいスピードで室内が水で満たされていく。

「な、なんだよこれ……………!？」

あっという間に水に浸かった惣一。慌ててもがくが、その内、苦しくない事に気づいて動きを止めた。

「当然でしょう。君は精神体ですから呼吸が出来なくても何の問題もない」

声に振り返る。青く光る飛竜を手にした瑛が制服姿の一華を抱えて正面に浮かんでいた。

慌てて周囲を見渡せば、先程までベッドに寝かされていた白衣に包まれた一華の体が浮いているではないか。惣一は慌てて彼女の元へ泳ぎ、漂う彼女の身体を捕まえた。

「……どういう事だ？ 飯沼が、二人……！？」

「兄の近くにいる飯沼は、我々と行動を共にしていた飯沼だ」

冷静な声に惣一はそちらを見る。

「……………結界内で召喚する気が」

自身の周りに薄い空気の膜を張った晶が瑛を睨んでいた。

「現実じゃないと意味がないんだよ」

「意味がないとは？」

「私と心霊省の目的を果たすために必要な事なんだ」

「なんだと……？」

「心霊省もこの有様を元に戻したいそうだ。これは、そのために預かった力——」

縛っていた紐が解けたか、水中に広がった瑛の長く美しい黒髪。その毛先が銀色に発光しているのが見えた。

「……千日手のからくりはそれか」

「皮肉だね。私が家を離れる前はあんなに長かった髪を、まるで男の子のように短く切り落としてしまった君の代わりに、短髪だった私が長髪になるなんて」

「兄には関係……」

「ないというのかい？ 本当に？」

「……………」

「一守、おまえ……」

晶を庇うように前に立った惣一。沈黙に振り返って晶の顔を覗き込んだ。晶はばつの悪そうな顔で俯いている。

「知っているかい？ 一つの強大な力がこの世界に存在する時、必ず対抗力とともに存在しているそうだよ」

「今度はまた何の話だよ」

むかしばなし

「心霊省で囁かれている伝承ですよ。この世全ての存在には必ず対抗存在がいるのだと言われています。白竜には黒竜といった風にねけれど、いるはずの白竜は今はその役目を成していません。大昔に身を裂かれ現存出来ない黒竜の対だから、白竜もまた存在できないということなのかもしれませんが。故にこの土地はいつまで経っても不安定なのです。そもそもここは出来てまだ間もない新しい世界ですから、管理者たる『世界の意味』も上手く機能していないという事なのかもしれません」

「出来て間もない？」

「ええ、そうです。日付が変わりましたから、ようやく創世三日目になった所ですよ」

「三日……？ 三日前って……俺が事故った日じゃないか……」

呟きに、髪の毛の半分を銀色に染めた瑛は満足そうに頷く。

「あの時、晶は君を竜角で刺しました。おかげで世界交代した後、

消滅するはずだった世界は消滅を間逃れ、こんな風に時を止めたまま未だ留まっているという訳です。死に行く君とともにね」

「……？」

「飯沼一華の対抗存在は君なんですよ。御子柴惣一君」

「俺が……飯沼の？ でも俺、力なんてなにも……」

「そうですね、君は無力だ。実のところ君はこの世で一番、力のない存在です。でもだからこそ、君は竜玉の対抗存在になり得る」

「そんな事言われても、全然意味わかんねーっつか……」

「でしょうね。君にはさっぱりでしょう。だから、こうしようと思っんですよ」

音もなく水中を竜牙が飛び、晶の身体を散々に切り刻んだ。上がる悲鳴に振り返った惣一が見たものは、漂う鮮血と、場に崩れ落ちる晶の小さな身体だった。

「一守！」

慌てて抱き起こそうとして、腕が晶の身体をすり抜ける。惣一はそこで初めて自分の体が半透明に戻っている事に気づいた。もう片方の腕で抱えていたはずの一華の身体も宙に浮いている。

「道理ですよね。晶^{もと}の水晶を絶つてしまえば、幾ら外部から供給しようが無力な君は実体化すらできない」

声に見れば、晶が常に左手首につけていた水晶の数珠が切られて水中を漂っていた。きつと瑛を睨む。

「どういつつもりだ、あんた。妹にこんな真似して……一守はあんたを……！」

「妹の口からは過去形で出ました。今の晶にとって、私はただの柵

でしかありません。ならばそんな感情はいつそ粉碎してしまった方が彼女の為だと思いませんか？」

「あんたはこいつの事、大事に思ってるんじゃないのかよ！？ 子供の頃変な施設からこいつを連れ出したのはあんたなんだから！？」

「こんな危なっかしい奴、責任とつてあんたが近くで見ててやれよ！」

「……君にそこまで話していたのですね」

惣一の言葉に、少しだけ瞳を見開いた瑛。

やがて、記憶を辿るように瞳を伏せる。

「晶をあそこには置いておけなかった。あのままいれば晶は駄目になっちゃおうと、彼女に告げられましたからね」

「彼女って」

「決まっているでしょう。竜玉かのじょですよ」

瑛は抱えていた一華を視界に入れて薄く笑んだ。

「……………飯沼が？」

「成駒化で竜玉と混ざり合い、全てを否定する力と、あらゆる時代ときに在する自身と交心する力を入れた彼女は世界で唯一人、未来を正確に認識出来る存在です。彼女は、晶を生かす為に私に接触したのだと思います」

「……………飯沼が、一守を生かした…………？」

「全てはきつと。君が死に行くのを止めるためですよ」

「……………どうして」

「君はつくづく、何にも知らないのですね」苦笑して惣一を見た後、瑛は再び視線を一華に移す。

「彼女はその強大な力を手に入れてからというものの、公平を保つた

め、己の望みを抱かないよう出来る限り人との接触を絶つてきました。人との出会いで人は変わってしまいますからね。良い様にも。悪いようにも。一族にもそういう聞かされて育ったのかもしれないでも、そんな彼女が初めて自ら接触を望んだのは君だったのです。自身の対抗存在だったからか、だから君こそが彼女の対抗存在となつたのか。それは私には知る由もありませんが。そして、彼女は君の運命を知ってしまった。君が三日前の夕方。自分のおかげで死に至ってしまう事を」

「飯沼の、おかげだって……？」

「三日前。君は使ってしまったのですよ。駒^{かのじよ}を」

向き直り、惣一の戸惑いの表情を見下ろす。

「世は不条理。彼女も、君の存在も。だからこそ今ここで、私が全てを正す——」

確固たる意志の言葉を口にする。

手にしたのは竜眼。向けられた竜眼の鏡から出た光が竜角を包み、瑛の前に転送させる。

「これでようやく、全てが揃いました」

瑛の周りに、手に入れた全ての竜駒が浮かんた。

飛竜。竜角。竜眼。竜牙。竜爪。竜尾。瑛が両手を広げると、これらはそれぞれ青、碧、金、黄、銀、赤色に輝く球体になり、それぞれ瑛の周りを飛んだ。

「一体何を……」

「君は思い知るべきなのです。無知でありながら彼女へ己を貫こうとする自身の罪を。彼女の闇——深い孤独と絶望を。そして、君と

私との差を……」

「——兄、駄目だ……！ そんな事をしては……っ」

甲高い、悲鳴のような声が劈いた。

ただならぬ気配に意識を取り戻した晶が瑛に向かって手を伸ばす。その銀に光る長い髪は、既に瑛のものではない。

球体の輝きを追っていた瞳が、声にそちらを向くと優しげに笑んだ。

それは晶の記憶にある兄の顔と同じで。晶の脳裏に一瞬で、瑛と共に過ごした全ての時間——その記憶が駆け巡る。

「晶。共に施設にいた時から、私は君の事がかわいくて仕方がなかった。本当の妹のように思っていたんだ」

耳にした言葉に一瞬、晶の世界が暗転する——それこそ、小さいが鋭い雷に身を貫かれたような気がした。

そこで始めて、晶は自分の奥底にあった小さな想いの存在に気づく。

「しかし、君を連れ出したあの刻から既に私達の歩む路は違えていた。私は竜玉に魅入られていたからね。宮司はね、それを見抜いていて初めから君に竜角を継承する事を決めていたそうだよ。私もね、妹^{きみ}にならばかつての夢を託してもいいと思えたんだ」

寂しい響き。もうどうにもならないのだと、ひんやりとした現実に突き落とすその言葉に、愕然となる。

「君を利用する形になってしまったこと。そして、君の路を曲げてしまったことを、どうか許して欲しい」

「兄……っ 聞いて、私は……！」

最後になつこりと笑つて、瑛は光り輝く六つの球体に向き直った。

『プロモーション
我、昇格を望む』

静かな静かな、力ある言葉に、球体がそれぞれ爆発的な光を発し、瑛の体に次々と飛び込んでいく。

その度、銃で撃たれたように、瑛の身体が大きく揺れた。

「……………瑛……………！」

晶の絶叫の中、全ての球体を吸収してそこに立っていた男は、最早瑛の身なりをしていなかった。

髪も皮膚も眼球も、全てが漆黒に染まっていた。

六つの竜駒の成駒化の果て。人間ではない、ただの駒。ゆっくりと顔を上げる。黒く染まった眼球に一筋の光が宿っていた。

「どうなつたんだ……………あれは……………！」

「……………兄ではない」

がつくりと頂垂れた晶。

「成駒化してしまった者は、人でなくなる。もう……………誰も届かない」

震える声で現実を紡ぐ。

「そんな、どうして……………」

「それでも助けたかったのだらう。あの女を」
いしめま

『竜角』

二人の正面で、黒男が低く唸って右腕を掲げる。と、雷を纏った右腕が碧く光り硬質化した。

「竜角……！？」

掲げた右腕をそのままに、男は傍らで瞼を閉ざしていた制服姿の一華に接近する。

「……や、やめろ……っ」

「ミコシバ、よせ！」

水中を跳んだ惣一、一華へ伸ばした手が、彼女に触れる瞬間、

『飛竜』

黒男の水泡を纏った青く輝く左腕が発生させた大きな水流に巻き込まれ、惣一の体は水中を木の葉のように舞った。

「——亀守！」

晶が漂っていた数珠を掴み揮うと、出現した半透明の何かが惣一の体を掴んで晶の元に引き寄せる。

「無事かミコシバ……！？」

「……つきしょ……っ」

飛ぶ寸前だった意識を奮い起こして惣一がそちらを見た時には、もう遅かった。

「……………」

水中に漂う、鮮やかな鮮血。
一華の胸を、黒男の碧に光る腕が大きく裂いた。

「……………」飯沼！」

— / / S I D E - I / / —

「貴女の夢を叶えましょう」

おばさんのお店の爆発の一瞬前、彼は私だけに聞こえる声で確かにそう囁いた。

符陣で移動した場所は印場沼だった。

彼は全てを語った後、私を水塊に封じた。

「いいの？ 私に触れたら怒るわよ。御子柴君」

先の自分から聞いて、知っていた未来だった。この男と関わってしまえば、どんな道を進んだっていずれはこうなってしまう事。

知っていて自分は関わった。互いがまだ幼い刻に、一守晶を生かす為に。

全てを告げると、私が招いた黒い未来を前にしかし一守瑛は笑みを返した。自分に選択権があったのならやっぱり、会えない不幸より関わられた地獄を選ぶよと、誇らしげに。

「成功すれば、君は生涯私を忘れないだろう。失敗した時には、私達は混ざり合って一つになれる。どちらにしても私は報われるんだ」

それが、私が彼という人間^{ひと}を見た、最後だった。

『……理解しました。その道に進めば、そうなってしまうのね』

水塊の中ではずっと、過去の自分と意思を交わしていた。
身体が眠っている時はいつもそうしていた。自分が今いる位置。
どうやってここまでできたのか。自分の行動で招くメリットとデメリット。幸運と不幸。そのために取りこぼしたものと、踏み台にしたもの。

——貴女が今、夢の中で一守君と接触すれば、一守さんが助かるのは確実なのだけれど、でも……。

自身が経験した事以外にも、自分がかつて訊いた、他の自分の経験も語った。

私にあらゆる事を教えてくれた彼女は、失敗したようだ。こうはならないようにと、私に伝えたのを最後に、彼女とは交心できなくなってしまうたから。

過去に在る自分がそれを訊いて、違う行動を考えて選んで実行し、私とは違う、より良い人生を歩む。

弟や妹が泣かないように。家族が嫌な思いをしないように。周りの人が不幸にならないように。決して己の感情に身を任せてしまわないように。出来るだけ自分の行動や思考を制御して、たくさんの私が踏み固めてきた未来を歩く。それが、竜玉たる私の生き方。

全ては、自分が世界に与える悪影響を最小限に押さえる為に。
そうやって私も、このモノクロームの未来を選んだ——

『ええ。他にも道がないか私も考えてみるけれど………ねえ。そんなに好き？ その男の事』

幼い私の声に、ふと、彼の笑顔が浮かぶ。

私は……。

自分の名を呼ぶ御子柴君の声が聞こえて、ゆっくりと開眼する。
気配に見上げると、表情も判別できない程真つ黒な人^{もの}が、青く光る右腕をあげて今まさに、自分を裂こうとしていた。

「……本当に。私と同じ成駒^{ばけもの}になってしまったのね」
「……………」

黒男は答えない。ただ、瞳の光が僅かに揺らぐのを一華は見逃さなかった。

瞼を伏せ、激情を堪えて声を絞り出す。

「……………」
「ごめんなさい」

自分を傷つける事を一番恐れた男が、僅かに残った自我を持って今、自分の胸を大きく裂いた。

噴き出し漂う鮮やかな赤の世界で、己の力を使ってしまうくないよ——無意識にでも助かる事を願わないように意識して、痛みに素直に身を委ねる。

「……………」
「ごめんなさい。」
利用したのは、決して貴方じゃない。自分の方だ。

遠ざかる意識の中、再び自分を呼ぶ悲鳴のような声が聞こえた。
ああ、この声は。

一華はゆっくりとそちらを見る。
たった数分の狭い世界の中で、一体幾度、その笑顔を瞳に焼き付けただろう。

日の光を受けると柔らかい茶色に光る髪、人懐っこそうな瞳、一

見細身で頼りなさそうだけど、その背中では意外と大きくて、骨ばった手は想像していたよりもずっと温かくて……ずっと私を守ってくれた。

大好きな男の子が、顔をくしゃくしゃにして、自分の名前を呼び続けている。

……御子柴君。

ゆっくりと手を伸ばす。

御子柴惣一君。

私の全身に溶けた竜玉が、体内で凝縮していくその瞬間にも律儀に反応して警告音きこめいするを鳴らす。

……解っている。

ようやく成就しようとしている私達の祈りねがいを前に、何を願ったりするものか。……ただ。

ただ、もう一度だけ。貴方に……。

彼の事を知ったのは、私が竜玉を継いですぐの事だった。

玉の力を使つて、弟達に過剰な期待を寄せ続けるお爺様を消してしまった時。そして、自分の寿命を知ると同時だった。

たくさんの大人の私が、私に語りかけてきたの。

彼女達が私を宥め、どんなに説明してくれても、最初はとても信じられなかった。でも、声はどれも、確かに飯沼一華わたしのものだった。

私は徐々に自覚する。自分が、とんでもない化け物になってしまった事。その力で、人を一人消してしまった事。

でも、堕ちゆく底なしの絶望の中に、たった一筋だけ、僅かな僅かな光が差していた。

様々な事を忠告してくる彼女達はみんな、御子柴惣一という人を生かしたがつっていたのだ。

心を閉じ情景が色を失っていく中で、知らない名前が、その存在

だけが僅かに胸の中に留まった。

御子柴惣一という男の子は、一体どういう人なんだろう。ちつぽけな興味は私の言葉と一緒に心の前に降り積もってやがて溢れ出す。

会わない方がいいと私は忠告してくれたけれど、水戸君に頼んで御子柴君の事を教えてもらってたりした。夜は夢を辿って御子柴君に会いに行った。御子柴君の夢の中で、あの秘密基地と一緒に遊んだりした。その内、貴方と遊べる夜を心待ちに思うようになった。なんでもない、普通の子供の様に無邪気に貴方と笑って――

――私の忠告が、今なら解る。それは飯沼一華が犯してはいけない最大の罪だった。

……御子柴君。

本当に、私達。会わない方がよかったのかもしれない。

だって、私は貴方を否定するだけの存在だから。

貴方がずっと全身で私に発してくれている気持ち、その理由はきつと……。

……だけど。それでもどうしたって、貴方に会いたかったの。

御子柴君。

こんな私をそれでもいろんな言葉で、態度で救ってくれてありがとう。

全ての音に耳を塞いでいたはずの私の中に、それでも貴方の声だけが心地よく響いた。

貴方の姿を見た、それだけで嬉しくて。貴方の隣はやっぱり、すごく居心地がよくて。貴方と一緒になら、ちよつとの間だけだったけど私は普通の女の子で居られた。

冷え固まった暗い世界が、ほんの少しだけ希望の温もりで満ちたの。

………だけ。

もう、この刻が来てしまったんだね。

今度こそ、貴方を救うから。

私が出来なくても、過去に在る^い私^{みんな}がいつか方法を考えて、絶対貴方を守ってみせる。

それが飯沼^{わたしたち}一華の、たった一つの夢。

何度も、何度だってこの手を伸ばす。どんな事をしたって、私に温もりを分け与えてくれた貴方を、光^{へいあん}の世界に戻して見せる、絶対だから……。

ごめんなさい。

ごめんなさい。……本当に。

ごめんなさい。

でもお願い、それでもどうか。

御子柴君――

―― / / T O R E T U R N / /――

「……や、めろ……」

黒男の右手が一華の胸を裂き、黒男の左手が傷口から一華の胸に進入して体内を探る。

「やめろって……!」

漆黒の指先が、一華の体内^{なか}で凝縮してゆく小さな玉に触れる。黒男がそれを掴むと同時に。

「――やめろおおおおおおおおおおおっ!」

惣一の意識が爆発した。

瞬間、晶の手首の数珠——惣一を繋いでいた水晶が破裂する。

「……ミ、コシバ……！？」

晶が驚愕に瞳を見開く。

惣一の体に薄く薄く纏っていた霊気が白光を帯び、感知出来ない程に膨張し弾けた。身の内から大気を揺るがす程の咆哮が轟く。

同時に惣一の体が、自らの体内から溢れ出でた黒い霧によって掻き消されていく。やがて惣一の全てを覆いつくした濃厚な闇が次の瞬間、猛々しく空を昇った。

天が黒に覆われていく。

夜闇よりもなお黒い、世界に訪れる真の闇。……否。空を支配する程巨大な、黒い体。

しなやかに、だが、圧倒的に。

今、黒竜が現存する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4818t/>

Trigger Point

2012年1月9日18時52分発行